

学校と家庭との連携・協力の充実をめざして

- 子どもと保護者の意識調査からとらえた家庭教育 -

子どもの豊かな人間性を育てていくためには、学校教育と家庭教育とが信頼関係の基に連携を図りながら、子どもの内面を見据えたかわり方をしていかなければならない。そのために学校は、家庭教育の実態を的確に把握し、子ども理解の上に立った教育活動を展開していくことが求められている。

本研究では、家庭教育の実態と課題を明確にするために子どもとその保護者を対象にした意識調査を実施し、分析を行った。その結果、子どもの成長に願いをもって見守っている保護者と、家庭を心のよりどころとしている子どものすがたが浮かび上がってきた。

このような両者の願いや思いを受け止めながら、学校教育が家庭教育とのパートナーシップを充実させていく方向について考察した。

目 次

| | | | |
|---|----|--|----|
| はじめに…………… | 1 | (2) 子どもと向き合う…………… | 27 |
| 第1章 家庭教育は変わったのか | | 子どもの内面に及ぶ親のつらさ / 「知らない」ことがつらさになる / 会話で築く親子の信頼関係 | |
| 第1節 家庭教育の“今”を知るために | | 第3章 子どもを見守る二つのまなざし | |
| (1) 低下したといわれる家庭の教育力 …… | 1 | 第1節 学級に求められる家庭の機能 | |
| (2) 家庭教育を探る…………… | 3 | (1) 「参観日は楽しみですか」…………… | 30 |
| 第2節 現代の家庭を概観する | | 生き生きと学ぶ自分を見てほしい / 分かる楽しさ、発表する楽しさが自己意識を高める | |
| (1) くり返される家庭の日常…………… | 6 | (2) 「休み時間はだれとすごしますか」… | 33 |
| 変化した生活スタイル / しつけ意識 / 交差する思い | | 学級に望むのは居心地のよさ / ひとりになりがちな子どもの自己意識 / 受容的・共感的な人間関係を育てる / 取組への賞賛が自己意識を高める | |
| (2) 学校教育への思い…………… | 10 | 第2節 保護者とともに | |
| イメージダウン / 親たちの学校像 | | (1) 「クラスのことを知っていますか」… | 37 |
| (3) 育まれる子どもの内面…………… | 13 | 信頼の根拠「学習理解」 / 信頼の根拠「学級認知度」 家庭教育に關与する「学級認知度」 | |
| 自分の「いいところ」って? / 自分と友だちとの間にあるもの / わが子を見る目 | | (2) パートナーシップを結ぶ…………… | 40 |
| 第2章 認められることで存在する自分 | | 孤立感がマイナス意識を強める / 求められている相談相手 / 保護者と担任とのより深い関係づくり | |
| 第1節 届かない思い | | (3) コーディネートする学校…………… | 42 |
| (1) あやふやな自分…………… | 18 | 参加できない状況と、参加しない理由 / 伝わっていない意義 / 「参加したい」会をつくる | |
| 肯定感の低さは受容感のなさか / 自己の存在価値が対人行動に表れる / 高い自己意識が課題に向き合う意志になる / 存在価値と連動する能力評価 | | おわりに…………… | 46 |
| (2) 安息の場にいる実感…………… | 21 | 付表…………… | 47 |
| 自分を認めてほしい人 / 存在価値を高める親子の信頼関係 / 家庭の人間関係が対人関係に反映する | | | |
| 第2節 親も人間的に成長する | | | |
| (1) 「分からない」という不安…………… | 24 | | |
| 対人関係は見えにくい / かかわり方が分からない / マイナスイメージは子どもに伝わる | | | |

< 研究担当 > 石原峰子 (京都市立永松記念教育センター研究課研究員)

< 研究指導 > 外川正明 (京都市立永松記念教育センター研究課指導主事)

< 研究協力校 > 京都市立静原小学校
京都市立嵯峨野小学校
京都市立桂川小学校
京都市立山階南小学校
京都市立朱雀第一小学校
京都市立伏見南浜小学校
京都市立納所小学校

京都市立鞍馬小学校
京都市立修学院小学校
京都市立桂坂小学校
京都市立桃山南小学校
京都市立明親小学校
京都市立西京極小学校

はじめに

12月のある朝、ニュース番組の中でメインキャスターが「現代の子どもは“低下”ばかりでなんだかわいそうだね」とつぶやいた。彼が伝えたニュースは、文部科学省が公表した『2002年度の学校保健統計調査（速報）』の中で、10年前に比べて子どものぜんそくや鼻の疾患が増えたという報告に関するものであった。彼は「抵抗力や体力の低下、それに学力もしつづも低下しているというが、この子どもたちはどんな大人になるのだろう」と言葉を続けた。

子どもが過敏な体質になっているのは、生活環境の変化やストレスなど複合的な要因のためではないか、と同省は推測しているとのこと（毎日新聞12月19日）だが、過敏になっているのは子どもの体質ばかりではない。子どもの心もその子どもに毎日接している保護者も、こうした社会環境の変化に大きく影響されている。本来、お互いの存在を享受し合い、安らぎに満ちた場所であるはずの家庭の中に社会の価値観や過剰な世評が入り込み、子どもも大人も「よりよい子ども像」「よりよい子育て」に振り回されてストレスをためこんでいないだろうか。子どもの育ち方に“低下”の影を見つけては悩みを抱えてしまう保護者もいるだろう。「よい子」を求められて、自分の価値に不安を感じている子どももいるのではないだろうか。

子どもは家庭の中で、社会の中で、あらゆるものと触れ合うことで人間形成をしていく。子どもと出会わせたいのはどんな触れ合いなのかを、わたしたち大人が今一度、考えてみなければならない時代になった。

第1章 家庭教育は変わったのか

第1節 家庭教育の“今”を知るために ～研究の動機と調査の目的・方法～

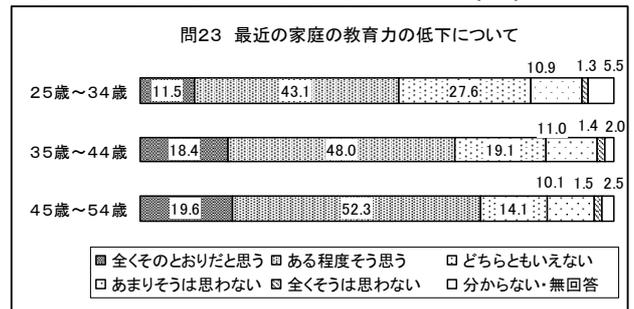
（1）低下したといわれる家庭の教育力

社会の急激な変化の中、家庭での生活スタイルは確かに大きく変化してきたといえるが、家庭の教育力もそれに伴って変容しているのだろうか。またそれは、近年いわれるように、個々の家庭では解決できないほど「低下」しているのだろうか。

昨年、国立教育政策研究所が行った「家庭の教育力再生に関する調査研究」結果の概要(1)によると、「家庭の教育力が低下しているのではないか」の問に各年齢層の保護者の過半数が「低下し

ていると思う」と回答した。（図1-1）

図1-1 家庭の教育力についての意識調査（％）



また、同報告によると、「家庭の教育力が低下している理由」として40%を超える回答があったものを割合の大きい順に並べると次のようになる。

- 1) 子どもに対して過保護、甘やかしすぎや過干渉の親の増加（66.7%）
- 2) テレビ、映画、雑誌などが子どもに及ぼしている悪い影響（50.5%）
- 3) 子どもに対するしつけや教育の仕方がわからない親の増加（47.1%）
- 4) 子どもに対するしつけや教育に無関心な親の増加（44.4%）
- 5) 学校や塾など外部の教育機関に対するしつけや教育の依存（44.2%）

この二つの問に対する回答結果からは、多くの保護者が、親自身の子育てに関する知識・意識の低さや子どもへの不十分なかかわり方を理由に、家庭の教育力が低下しているととらえていることがうかがえる。

一方、平成12年11月の文部科学省生涯学習審議会社会教育分科審議会報告の「はじめに」の中では、現在の家庭教育の状況について「近年の都市化、核家族化、少子化などに伴い、家庭の教育力が低下していると懸念されている。また、昨今憂慮されている青少年の問題行動の背景には、家庭における教育のあり方が密接に関係しているといわれ、家庭における教育的機能を高めていくことが極めて重要な課題となっている。」と述べている。社会状況が急激に変わる中、家族の形態や生活スタイルも大きく変化したことが家庭の教育的機能を「低下」させた一因であり、そのことが子どもの問題行動の背景にあるというのである。

しかし、それは、家庭の教育力全般が低下しているということなのだろうか。そもそも家庭の教育力とは何を意味し、何をして測ればよいのか。

家庭の教育力を論じるために、家族、あるいは家庭を定義してみると「家族集団は社会を構成する基本的単位であり、これに属する人々の生存ないし安息の根拠地であるとともに、人間形成の基

盤が培われる場ないし生活空間でもある。家族のこの面を含意するものとして、家庭ということばが使われる」(2)となる。このことから、子どもに対して家庭の担うべき本来の役割は「安息の根拠地」であるとともに「人間形成の基盤が培われる場」であるといえる。つまり、家庭教育の目的は子どもの人間形成であり、その目的は家庭が「安息の根拠地」であることを前提として成されるものであり、この、保護的機能と子どもの社会化機能が十分に果たされているかどうかを見取ることが「家庭の教育力」を測ることになると考えられるのである。

京都市教育委員会でも、平成14年度「生涯学習推進の方向と施策の展開」の中で、家庭教育を「人間形成を行う最初の場である家庭は、しつけや社会規範、善悪の判断など、人間としての基礎的な資質や能力を養う場であり、すべての教育の原点となるものである」と定義づけている。つまり、基本的な生活習慣と生活能力を身に付けさせ、倫理観や社会的マナーの基礎を育み、共感的な人間観を培うこと、換言すれば、子どもに自立能力と共生能力を身に付けさせることが家庭教育の目的であるとしている。

もしも、この目的が十分に果たせない状況であるならば、子どもたちの人間形成の基盤が崩れ、社会の中で自立し他者と共生していくことはできにくくなるだろう。そうだとすれば、子どもたちの問題行動の背景に家庭の教育力の「低下」があるようにも見える。確かに、社会状況の変化はハード面で家族の形態や生活スタイルを変容させ、ソフト面で子育て意識やしつけ方法を変容させたと考えられ、子どもの人間形成への影響もこれまでとは違っているといえるだろう。先に挙げた保護者調査の回答「家庭の教育力が低下している理由」のような変化が実際にあるのかもしれない。

しかし、子どもが起こす問題行動の要因には、子ども自身の人間性が十分に育っていないという見方もできる一方、子どものパーソナリティが社会に適應できずに引き起こされたものであるという見方もできる。前出、文科省の審議会報告のいう「家庭の教育的機能」としては、「子どもに社会の中で適應的に生きていくための基礎的な技能を修得させ、子どもの社会化(3)を図る働きがある」(4)とされるが、社会状況が変化すればその中で適應的に生きていくために身に付けなければならない資質や技能も変化するはずである。子どもは、その社会が共有している行動様式や価値などを身につけなければならず、それができない状況が子

どもの問題行動として表れているとすれば、それを「家庭の教育力が低下したから」と一概に言っているのだろうか。適應とは二者の間にある関係性をいうのであり、不適應を起こしている要因は両者にあると考えられるからである。

問題なのは家庭の教育力が低下しているかどうかではなく、子どもたちの育ちのようすがどのような実態にあるか、ではないか。形態や生活スタイルを変容させてきた家庭の中で、子どもの前向きな自己意識や社会的資質は育まれつつあるのが問題にされなければならない。つまり、子どもたちがどのような育ち方をし、どのような意識をもって今を生きているのかを知ることが、すなわち「家庭の教育力」を知ることであり、学校が取り組むべき教育的課題を明らかにすることになると思われる。

また、子どもの育ち方を知ることが、「家庭の教育力」のみならず学校やひいては社会の教育力を問うことでもある。したがって、子どもたちの育ち方や社会化における問題が明らかになったとしても、それをすなわち「家庭の教育機能の問題である」として個々の家庭に問題の解決を任せておくわけにはいかない。今の子どもたちの育ち方を見つめ、そこに問題があるならば、その背景や要因となるものを探り、改善のための課題を明らかにすることは必要であるが、原因や責任を追求することを問題解決方法の主眼とするべきではないと考える。

前出の審議会報告では、「家庭教育は本来、親の責任と判断において、それぞれの親の価値観やライフスタイルに基づいて行われるものである」としながらも、「家庭の様々な問題は看過できない状況となっており、もはや個々の家庭だけに問題の解決を委ねるのは適当ではなく、社会全体の問題として、積極的に家庭における教育力の充実を図っていくことが求められている」と、家庭の教育力の充実は、社会全体で取り組んでいくべき問題であるとしている。当然のことながら、これは学校教育においても求められる姿勢であるといえる。「子どもの豊かな人間性を育む」ことを共通の課題として家庭教育と学校教育とがともに理解し合い、連携・協力していくことが、お互いの教育力を高め、教育的効果を向上させていくことになるのである。

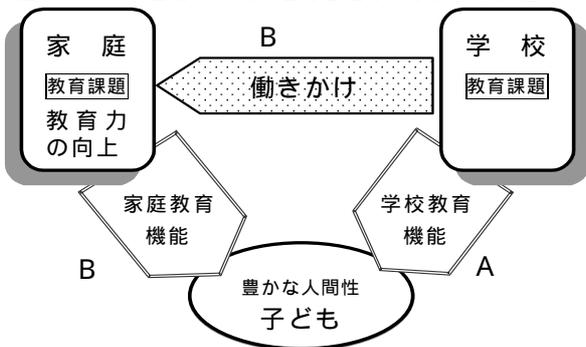
では、家庭教育と学校教育とはどのような連携や協力をしていけるのだろうか。

京都市では今年度の「生涯学習推進の方向と施策の展開」の中で、家庭教育・子育て支援の充実

を取組の重点のひとつとして掲げている。昨年発足した市民参加による「家庭の教育力サポートチーム」による各種事業を実施したり、子どもの育成に関わる各種の情報のネットワーク化を推進したりして家庭の教育力向上を支援している。また、生涯学習の拠点として学校の教育機能を発揮できるように整備が進められている。このような数々の取組によって、家庭教育を巡る今日的な課題に社会全体で取り組む機運を醸成し、主体的なかかわりと呼び起こそうとしている。(5)しかし、このような支援策による協力・サポートの他にも、学校教育の場で家庭教育との連携を充実させていくことはできないだろうか。

そこで、もう一度、前述の「家庭教育の役割」に目を向けてみる。「家庭は人間形成の基盤が培われる場であり人間としての基礎的な資質や能力を養う場である」ことをその役割としているが、これはそのまま学校教育の目的でもあることに気づく。学校教育をよりよいものにするための視点のひとつに、子どもの社会性を育み、自立を促し、豊かな人間性を育てる教育を実現することが挙げられてもいる。(6)つまり、子どもの豊かな人間性を育てるという点で、学校と家庭の連携・協力の仕方を考えていくことができるはずである。そこで、学校が取り組むべき教育課題を次の図のようにとらえてみた。(図1-2)

図1-2 子どもの人間性を育むための学校教育課題



この図に示したように、学校の教育課題は、学校教育活動の中で直接的に子どもの人間性を育ていく機能を果たすこと(A)と、家庭への働きかけによって家庭の教育力を向上させ(B)、ひいては家庭教育における子どもの人間形成に関わる機能を高めること(B)の二つの側面から考えられる。そして、前者に関しては子どもの人間性と学校教育への思いを知ることで、後者に関しては保護者の子育てや学校教育への思いを探ることによって明らかにできると考えられる。それに加えて家庭生活の現状を把握し家庭の教育課題を明らかに

することができれば、家庭教育への直接的な協力の仕方も見えてくるのではないだろうか。

以上のような研究仮説に基づいて、調査の構造を組み立てることとした。

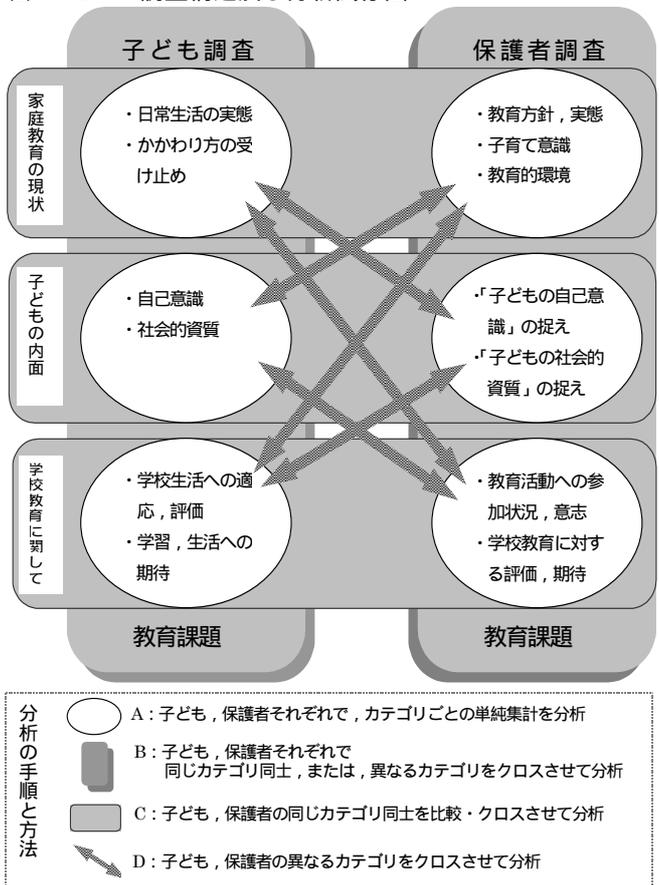
(2) 家庭教育を探る

前項で述べた研究仮説によって、調査の構造を以下の三つのカテゴリで組み立てることとした。

- 1) 「家庭教育」の現状(生活習慣・しつけ, 子育て意識, 生活スタイル)
- 2) 子どもの内面(人間形成のようす:教育効果)
- 3) 「学校教育」への思い(子ども:適応のようす, 保護者:評価, 期待)

さらに各カテゴリの実態と相互の関連性をみるために分析の視点をたてた。(図1-3)

図1-3 調査構造及び分析関係図



クロス集計による分析(7)によって、各カテゴリの関連性を明らかにすることができれば、単純集計で明らかにした教育課題の背景が見えてくるのではないかと考えた。そして、それはそのまま、課題解決のための方法や、学校と家庭とが連携・協力を充実させるための手がかりにむすびつくものと思われた。

このような調査の構造と分析の視点でアンケー

トを作成するために、各カテゴリを要素に分解して調査問題を構成した。(表1-1)

(表中の数字は、アンケートの設問番号)

表1-1 調査問題(要素構造)

(の項目は昨年度の1年生調査と共通の設問)

| 子ども | | | 視点 | 保護者 | | | |
|--|---------------------------------------|--------------------------------|---------------------------|-----------------------------|--|---|--|
| 朝食 就寝時刻 (睡眠時間) 家庭学習 手伝い 会話 挨拶 交遊関係 学校 帰宅後 | 1 10 7 8 9 2 3 6 | 生活習慣 生活リズム 対人スキル 対人行動 | 日常生活の実態 家庭教育の現状(事実・意識) | しつけ・教育方針 子育て意識 生活スタイル | 生活習慣の定着 対人意識 友達関係 家庭学習 子育て感 子どもの将来像 コミュニケーション 家族形態 子育て情報 | 13 10 24 25 26 14 16 17 12 27 11 6 7 8 1 2 3 4 5 15 18 | 生活リズム 自立 責任感 役割分担 挨拶 平等・親切 信頼 共感性 コミュニケーション 学習内容 かかわり方 習い事・学習塾 「子育て」イメージ 参画者 接し方 意義 子どもに関する心配 子育ての心配・悩み 家族間の話し合い 役割分担意識 (家庭と学校) 子どもに望む生き方 会話の量 会話の場 休日の交流相手 子ども属性(年齢・性別) 回答者の続柄 家族構成 子ども数(きょうだい) 世帯人員数 教育情報源 相談者の有無・条件 |
| 信頼 励まし 受容感 コミュニケーション不足 過度な叱責 理解不十分 | 14 15 | 心の拠りどころ 親への思い・不満 | 保護者やそのかかわり方に対する意識や実態 | 自己意識 社会的資質 | 自尊感情 共感性 対人スキル | 9 援助 救助 自己主張 自己制御 社交性 | |
| 對自己 効力感 規範意識 対他者 共感性 素直さ 話題 帰宅時の安堵感 心配や悩み | 16 11 12 13 | 期待の受け止め コミュニケーション | 自己意識 社会的資質 | 自己意識 社会的資質 | 自尊感情 共感性 対人スキル | 9 援助 救助 自己主張 自己制御 社交性 | |
| 肯定感 受容感 効力感 有能感 無力感* 有能感の逆 | 17 18 19 20 21 | 自尊感情 | 自己意識 | 自己意識 | 自尊感情 | 9 | |
| 援助 救助 | 22 23 | 共感性 | 社会的資質 | 社会的資質 | 共感性 | 援助 救助 | |
| 自己主張 自己制御 遊び集団への参加 | 24 4 5 | 対人スキル | 社会的資質 | 社会的資質 | 対人スキル | 自己主張 自己制御 社交性 | |
| 学習 (理解・表明) 規範(責任感) 学級 (受容感) 学校 (好感) | 25 27 28 29 | 自己評価 他者評価 | 適応・評価 | 学校教育への評価・期待 | 参加実態 参加状況 意志理由 | 19 授業参観 懇談会 家庭教育学級 学校行事 | |
| 授業参観 学習環境 学習スタイル 人間関係 教師期待 | 30 26 31 32 | 学習の楽しさ 期待 | 学習・生活への期待 | 評価・期待 | 認知 信頼 期待 | 20 21 22 23 28 29 教育方針・学習内容・授業 態度・友達関係 子どもの学習理解の捉え 担任の子ども理解の捉え 担任との交流 教師期待 学校教育期待 | |

要素を設問項目にして子ども用 32 問、保護者用 29 問でアンケートを作成した。回答方法は二種類とも、それぞれの設問に選択肢の中から自分の考えに最も近いものを選ぶという方法で行った。(図 1 - 4、図 1 - 5)

図 1 - 4 子ども用アンケート用紙(一部)

生活アンケート

ちょうさのお願いとやり方

○これから、みなさんに、32の質問をしますが、これはテストではありません。みなさんが、どんなふうで毎日をすごしているのかを、教えてくださいのためのものです。思ったことを、そのまま答えてください。

○質問には、3つから5つの答えの中から、自分の考えに合うものを**ひとつだけ選び**、その番号を に入れて答えてください。もし、びったりの答えがないときは、いちばん近いもので答えてください。

はじめに、**学校の名前**と、あなたが何年生かを教えてください。

京都市立 小学校 年

////// 毎日の生活について、おたずねします //////

Q 1. あなたは、朝ごはんを毎日食べていますか。

1. 毎日食べている

2. ときどき食べない日がある

3. 食べない日が多い

4. ほとんど食べない

Q 2. あなたは、近所の人に、あいさつをしていますか。(おはようございます、こんにち は、など)

1. 毎日している

2. だいたいしている

3. しない日が多い

4. ほとんどしていない

図 1 - 5 保護者用アンケート用紙(一部)

Q 1 4. 子育てについての次のような意見に対して、あなたはどう思いますか。
ア～カのそれぞれについて、あてはまる番号に○をつけてください。

| | とても その通り | やや その通り | あまり その通りでない | まったく その通りでない |
|------------------------------|-------------|------------|----------------|-----------------|
| ア 子育てには、家族全員がかかわるべきだ | 1 | 2 | 3 | 4 |
| イ 子どもは、見るよりもほめて育てた方がよい | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ウ 子どもには、厳しく接した方がよい | 1 | 2 | 3 | 4 |
| エ 子育ては、楽しいことよりもつらいことが多い | 1 | 2 | 3 | 4 |
| オ 子育てをすることで、親も人間的に成長することができる | 1 | 2 | 3 | 4 |
| カ 子育てをすることで、親の生き方が制限されてしまう | 1 | 2 | 3 | 4 |

Q 1 5. あなたは、子どものしつけや教育に関する情報を、主に何(誰)から得ていますか。
最も多いものをひとつ選んでください。

1. 教育雑誌や専門書

2. 新聞・テレビ・インターネット

3. 学校から配布されるプリントやパンフレット

4. 講演や「子育て」講座

5. 自分の親やきょうだい

6. 知人や近所の人

7. 学校の先生

8. とくにない

Q 1 6. 現在、お子さんのことで、心配なことや悩んでいることはありますか。
最も近いものをひとつ選んでください。

1. 子どもの健康や体の成長

2. 子どもの学力や進路

3. 子どもの友達関係

4. 子どもの性格や態度

5. とくにない

本調査の実施概要は以下の通りである。

1) 調査対象

小学校3年生、5年生およびその保護者

2) 調査協力校および調査人数

京都市地域類型(8)に基づき、類型比率によって調査の対象となる児童数および保護者数を算出した結果、表1-2のようになり、各学年約500組の児童・保護者を調査対象として、京都市立小学校13校に実施を依頼した。(児童約1,000名、保護者約1,000名)

3) 調査の時期と方法

平成14年7月1日(月)～7月19日(金)

- ・児童については、学級単位で一斉に実施
- ・保護者については、アンケート用紙を封筒に入れて児童が持ち帰り、保護者記入後、児童を通じて担任が回収した。

4) 有効回答数・回答率および標本誤差

全回答数2,123のうち各学年児童・保護者の有効回答数は表1-2のようになった。

回答率 児童：97.7%

保護者：86.6%

さらに調査精度をみるために、一般的な標本調査で用いられる統計学の数式(図1-6)によって信頼度を95%として標本誤差(9)を算出したところ、どちらの学年の児童・保護者においても最大で±1.91%となり、調査結果の信頼性はかなり高いものとなった。

表 1 - 2 京都市地域類型による

調査人数と有効回答者数

| 地域別 | 児童数 (京都市立小学校在籍数) | | 調査対象 各学年 (人) | 回答者数(人) | | | |
|----------------|---------------------|-------|--------------------|---------|-----|-----|-----|
| | 人 | % | | 3年生 | | 5年生 | |
| | | | | 子ども | 保護者 | 子ども | 保護者 |
| I 農山村 | 127 | 0.2 | 1 | 5 | 5 | 6 | 6 |
| II 混合(山・住) | 373 | 0.5 | 3 | | | | |
| III 住宅 | 43893 | 64.3 | 322 | 365 | 327 | 376 | 315 |
| IV 混合(商・住) | 7616 | 11.2 | 56 | 75 | 69 | 78 | 73 |
| V 商業 | 2449 | 3.6 | 18 | | | | |
| VI 混合(工・住) | 5912 | 8.7 | 44 | | | | |
| VII 工業 | 3804 | 5.6 | 28 | 110 | 99 | 110 | 104 |
| VIII 混合(商・工・住) | 4004 | 5.9 | 30 | | | | |
| 計 | 68178 | 100.0 | 502 | 555 | 500 | 570 | 498 |

図 1 - 6 標本誤差

$$\text{標本誤差} = \sqrt{\frac{p \times (100 - p)}{n} \times \left[1 - \frac{n}{N} \right] \times 2}$$

p : 標本の測定値(%) (95%)
 N : 母集団の大きさ (在籍児童数)
 n : 標本の大きさ (有効回答者数)

以上のようなアンケート調査の結果を設問ごとに集計し、項目およびカテゴリごとの傾向を把握した。(単純集計の分析：分析A)

これによって、人間形成の断面としてみた子どもたちの「内面」のようすと、日常の家庭生活の実態が大まかに把握できるものと思われた。また、子どもと保護者の意識を照合したり比較したりすることにより、意思の疎通のようすを見ることにした。さらに、両者の学校教育への思いを知ることにした。

第2節 現代の家庭を概観する

変動する社会状況に伴ってその形態や生活スタイルを変えてきた家族の中で、子どもと保護者はどのような思いで自分たちの暮らしとお互いの存在を見つめているのだろうか。

調査集計の分析と先行調査・研究から「家庭」の実態と変容を見たが、ここでは特徴的な傾向について述べることにする。詳細は巻末に付表としてつけた集計結果一覧を参照されたい。なお、グラフ化の際には「無回答・不明」は省いて表した。

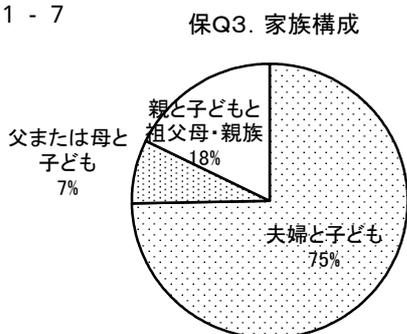
(1) くり返される家庭の日常 変化した生活スタイル

- 小さな家族 -

家族の人数や構成の変化は家庭内の人間関係を大きく変容させる。全国的に核家族化や少子化がいわれる中、京都市においてもその傾向が見られるが(10)、家族の生活スタイルはどのような実態をもち、どのような変化をしたのだろうか。

今回の調査は、小学校3年生・5年生とその保護者を対象としたが、保護者998人の回答からも、核家族の割合が高いことがうかがえた。(図1-7) また、世帯人員数は平均4.5人で、最も多いのは4人家族の45%、きょうだいの数は平均して2.1人で最も多いのは二人きょうだいの55%となった。

図1-7



このように、京都市の小学生家庭における一世

帯の人数は非常に少なく、子どもが家族の中で触れ合うことのできる人間関係はごく限られている。

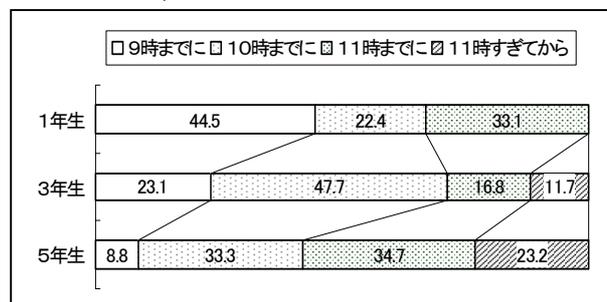
- 夜型の生活に移行 -

子どもたちは、家庭の一日をどのようにすごしているのだろうか。

毎日朝食をとっている子どもが81.5%、あとの2割近くの子どもの食べないで一日をスタートさせることがある。子Q1：付表P.47 朝食の用意がされていないのか、食欲がなく食べられないのだろうか。

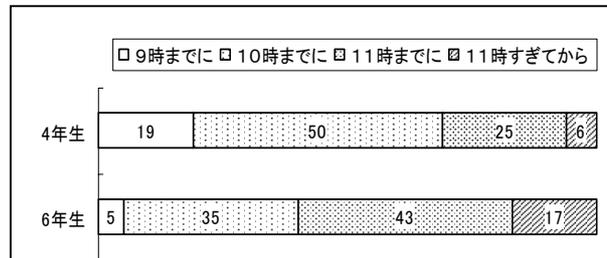
子どもたちの就寝時刻を見ると、全体では学年進行とともに遅くなっている。(図1-8) 指定都市教育研究所連盟(11)が昭和53年(1978年)に行った生活調査では、4年生と6年生の就寝時刻は図1-9のようであった。二つのグラフを比較してみると、24年前の6年生よりも今の5年生の方が夜遅くまで起きている傾向があることが分かる。現代の子どもたちの家庭生活は「夜型」になったといえるだろう。当然ながら、就寝時刻が遅くなるほど睡眠時間は短くなり、このような子どもたちの慢性的な睡眠不足が推測できる。

図1-8 子Q10. 就寝時刻 (%)



1年生のデータは昨年度調査(12)によるもの

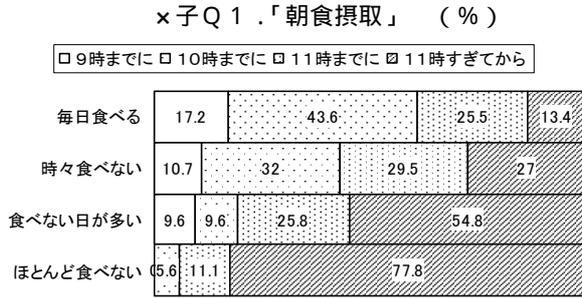
図1-9 昭和53年調査の就寝時刻 (%)



さらに、朝食摂取と就寝時刻との関連性をクロス集計で見ると次の図1-10のようになり、朝食を食べないことが多いという子どもほど就寝時刻は遅い傾向があることが分かる。このことから、睡眠不足が朝の食欲減退の要因になっていると思われる。睡眠不足の上に食欲不振で、朝食を十分

に採らないままに一日をスタートさせている子どもたちの健康状態が心配されるところである。

図 1 - 10 子 Q10. 「就寝時刻」

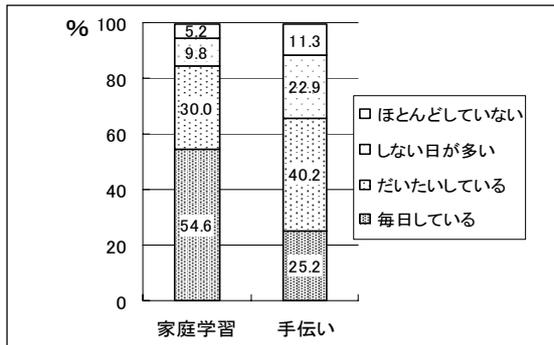


- 定着している学習習慣 -

帰宅後の子どもたちは、何を日課としているのだろう。家庭学習と手伝いについてきいてみた。(図 1 - 11) 生活習慣として定着率が高いのは家庭学習で、「毎日している」が過半数であるのに対して、手伝いについては全体の4分の1となる。子どもたちの「家でやるべきこと」としては、手伝いよりも学習の方が定着しているといえる。

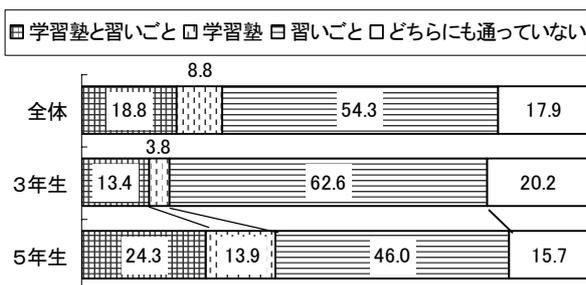
図 1 - 11

子 Q 7 「家庭学習」, Q 8 「手伝い」



保護者への設問 保 Q24 : 子どもの家庭学習の内容を見ると、「学校の宿題だけ」が 52% , 「宿題とその他の勉強」が 47% , (していない 1%) となる。また , 習いごとや学習塾について 保 Q 26 : 図 1 - 12 は , 「習いごとにも学習塾にも行っている」子どもが約 2 割 , 「学習塾のみ行っている」子どもが約 1 割 , 「習いごとのみに行っている」子どもが約半数になった。

図 1 - 12 保 Q26 「学習塾や習いごと」 (%)



つまり、全体の約 8 割の子どもは学習塾や習いごとに通っており、この割合は 3 年生から 5 年生へと高くなっている。

次に、今年度(平成 14 年度)から学校週 5 日制が始まり、子どもにとっての休日が増加したが、子どもたちはどのようにすごしているかをきいてみた。保護者からの回答 保 Q 8 : 付表 P.49 を見ると、「家族と過ごす」子どもが 68.6% となり、「友だちとの遊び (18.7%)」「習いごとやサークル活動 (12.0%)」を大きく上回った。増えた休日を「家族の時間」にしている家庭が多いのではないだろうか。ただし、3 年生から 5 年生になると「家族と過ごす」割合は減り (75.0% 62.2%) , 「習いごとやサークル活動」に出かける割合は増加している (7.8% 16.3%) ことから、子どもたちの「学ぶ習慣」は学年進行に伴って定着していることが分かる。

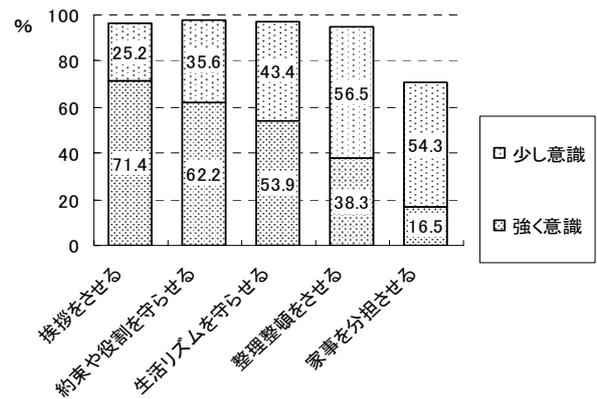
しつけ意識

- 最も強く意識している「挨拶」 -

保護者のしつけ意識を五つの項目についてきいてみた 保 Q13 。すると、最も強く意識されているのは「挨拶をさせる (71.4%) 」こと、次に「役割や約束をさせること (62.2%) 」であった。(図 1 - 13) 「整理整頓」や「家事の手伝い」よりも、社会で共生的に生きていくために必要なスキルとして重視されているのではないだろうか。

図 1 - 13

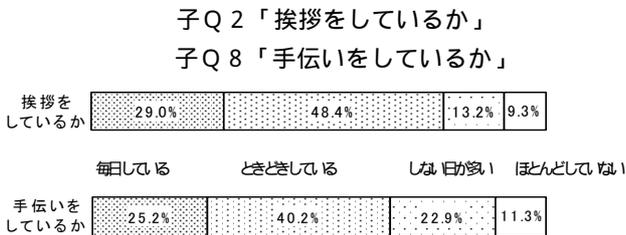
保 Q 13 「次のことをどの程度意識して子どもに接しているか」



保護者がどのような意識で子どもに接し、生活習慣の定着に働きかけているかを見ることは、家庭の教育力をうかがうためのひとつの視点にもなるだろう。そこで、子どもへの生活習慣に関する設問の中から、子 Q 2 : 挨拶をする ことと子 Q 8 : 手伝いをする ことが習慣化しているかについてきいた。その結果(図 1 - 14)をみると、毎日またはときどき「挨拶」を実行している子

もが77.4%、「手伝い」については65.4%の子どもが実行している。これは保護者の意識の程度とほぼ一致した割合であり、家庭での保護者の接し方が子どもの行動に大きく影響しているのではないかとと思われる。

図1-14



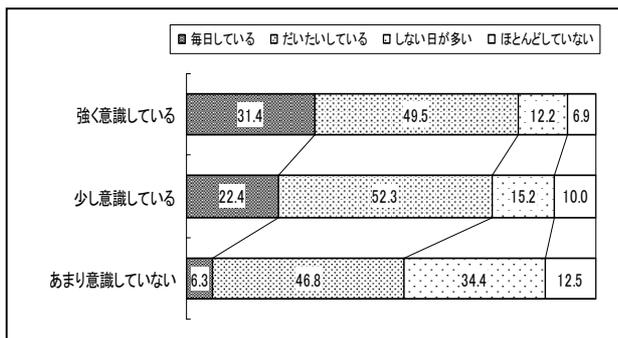
このことを確かめるために、「挨拶をする」について、保護者のしつけ意識と子どもの実行のようすとの関連性を見ると図1-15のようになった。

図1-15

しつけ意識と子どもの行動の関連性

子Q2「挨拶をしているか」

×保Q13(オ)「挨拶をさせることを意識しているか」%



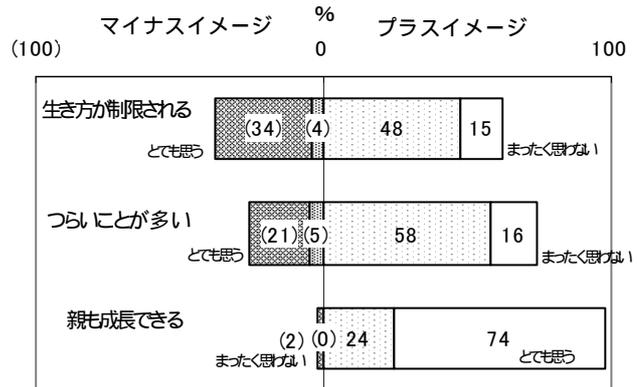
挨拶をさせることを強く意識している保護者の場合、その子どもが「挨拶をする」割合は8割以上になるが、保護者があまり意識していないと挨拶を実行する子どもの割合はおよそ半数になってしまう。このように、家庭の中で保護者が意識的に子どもに接しているかどうか子どもが行動様式を大きく左右し、「挨拶をする」「手伝いをする」などの習慣化には保護者の意識的なかかわりが不可欠であるといえるのである。

- 生き方が制限されても、意義は大きい -

では、保護者自身は子どもを育て、しつけることについてどのような思いをもっているのだろうか。子育てに対するイメージを見るために、三つの意見、「子育ては親の生き方を制限するものだ」「子育ては楽しいことよりもつらいことが多い」「子育てで親も人間的に成長できる」保Q14の工、オ、カ に対して賛同するかどうかをきいてみた。それぞれの回答の割合を、プラスイメージとマイナスイメージとして図にすると次のように

なった。(図1-16)

図1-16 保護者の「子育てイメージ」



これを見ると、制限やつらさをいくらかは感じているものの、ほとんどの保護者が「親自身も人間的に成長できる」と、子育てに意義を感じているようである。子どもの成長を自分自身の生きがいと感じている保護者が多いといえるだろう。

交差する思い

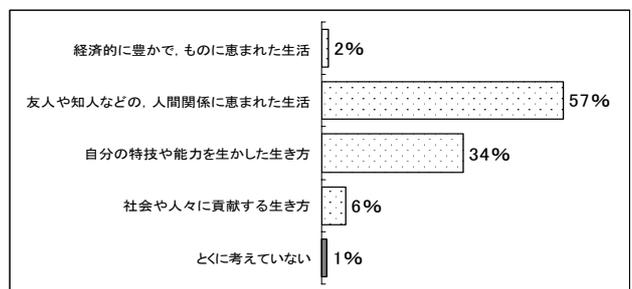
子どもの成長を見守っている保護者と、保護者の庇護のもとに生活を送っている子どもとの間にはどのような思いが交差しているのだろうか。お互いに対する思いや家庭でのコミュニケーションのようすをうかがってみた。

- 将来は「もの」より「人」に恵まれて欲しい -

保護者は、子どもにどのような将来を願いながら日々、子どもに接しているのだろうか。保護者への設問 保Q11：子どもにはどのような生活や生き方をして欲しいか に対しての回答結果が図1-17である。

図1-17

保Q11「子どもにはどのような生き方をして欲しいか」



全体の57.3%という多くの保護者が「人間関係に恵まれた」将来を子どもに望んでいる。これは、すなわち保護者自身の人生観とも受け取れる。幸福な生き方をするということは人に恵まれて生きることだと、自分の人生経験から感じている保護者が多いのではないだろうか。一方、「特技や能力を生かした生き方」を願っている保護者も全体の

3分の1を占めている。子どもの個性を大切にしようという意識が保護者の間にも強いといえるだろう。

このような願いをもって子どもと接している保護者に対して、子どもたちの方はどのような受け止め方や感じ方をしているのだろうか。

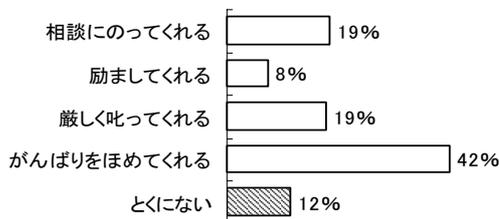
- がんばりを認めてくれるけれど、

叱られ方は納得いかない -

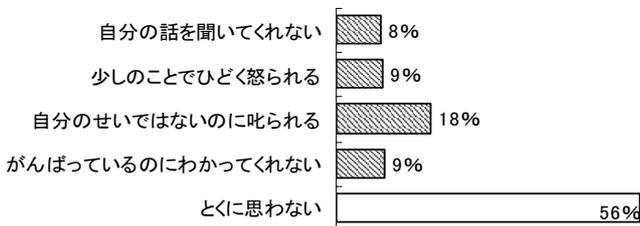
子どもたちに、家の人に対して感じていることをきいてみた。設問 子Q14：よくしてもらっていること 子Q15：普段よく思うこと の二つの設問であるが、前者は自分にとっての保護者の存在感を、後者は不満に思うことをきいたものである。回答結果は図1-18のようになった。

図1-18

子Q14「家の人がよくしてくれること」



子Q15「家の人に対して普段よく思うこと」



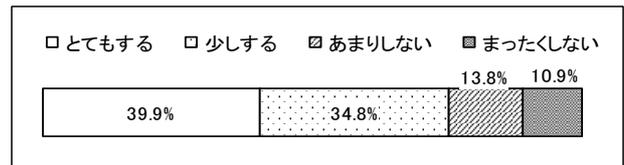
この図からは、多くの子どもが家庭での保護者とのふれあいを精神的な支えにしているようすが判る。また、怒られ方や叱られ方が納得いかないようすの子どもも見受けられるが、過半数の子どもは保護者に対して不満や不信感のようなものは感じておらず、多くの子どもにとって家庭がこころのよりどころとなっていることがうかがえる。こうした子どもたちにとっての家庭はおそらく、精神的な安らぎを感じられる場となっているだろう。

- 「安息の根拠地」としての家庭 -

子どもへの設問 子Q12:学校から帰ったとき、ほっとした気持ちになるか の回答結果は図1-19のようになった。これを見ると、刺激の多い外の生活から家庭に戻ってきたときに「ほっとする」と、安堵感を74.7%の子どもたちが感じている。前節第1項で述べたように、家庭が子どもに

担うべき役割として「安息の根拠地」となることが挙げられるが、この図からは、多くの子どもにとって家庭が安息の場となっていることがうかがえるのである。しかし、「ほっとしない」と回答した子どもも24.7%存在している。安堵感を得られない状況にいるのだろうか。このような子どもの思いについては後述することにする。(第2章第1節第2項, P.21)

図1-19 子Q12「帰宅時の安堵感」



家庭が子どもにとっての安息の場となるには、子どもの思いを受け止めてくれる保護者の存在が不可欠である。家庭はそういったコミュニケーションの場になっているのだろうか。

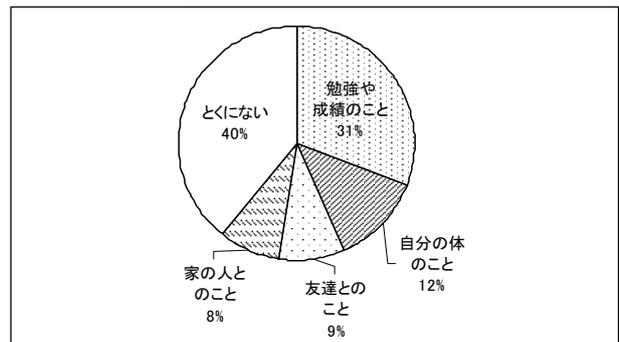
- 話題は「友だち」、悩みは「勉強」 -

家庭での会話量を、子どもと保護者それぞれにきいたところ子どもの95%が「(毎日、ときどき)話している」と回答し、保護者の96%が「ほとんど毎日話している」と回答している。子Q9：付表P.47,保Q6：付表P.49 家庭での会話は十分されているようである。

会話の場としては「食事をしている時」54%、「家事をしている時」18%となった。保Q7：付表P.49 また、会話の内容については「友だちとのこと」が52%と最も多く、子どもの最大の関心事は友達関係といえる 子Q11：付表P.47。

一方、子どもに心配ごとや悩みごとがあるかをきいた設問 子Q13 の回答結果が図1-20であるが、40%の子どもが現在のところ心配ごとはないという半面、過半数の子どもは何らかの心配ごとや悩みごとをかかえているという実態がある。

図1-20 子Q13「子どものもつ心配ごと」



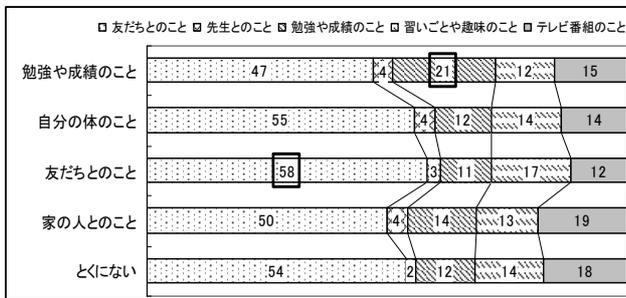
その内容としては「友だちとのこと(9%)」よりも「勉強や成績のこと(31%)」で悩んでいる子

どもの割合の方が高く、「悩みがある」という子どものうちの約半数になる(51%)。学習に関することが多くの子どもにとっての悩みになっているのである。

こうした悩みごとと家庭での話題とに関連性があるのかを 子Q11:保護者との話題 と 子Q13:心配や悩み とのクロス集計で見てみた。(図1-21)すると、子どもの悩んでいることが主に勉強のことならば話題も「勉強や成績のこと(21%)」、友だちのことを悩んでいる子どもでは「友だちのこと(58%)」を話題にする割合が他の子どもよりも高くなっている。

図1-21

子Q11「家の人との話題」
× 子Q13「心配していることや悩んでいること」%



このように自分の悩んでいることについて家の人と話している傾向があることは、自分の思いを聞いてもらっている子どもが多く、家庭でのコミュニケーションが子どもの精神的な支えになっていることを表しているのではないと思われる。

(2) 学校教育への思い

前項で見たように、心配ごとや悩みごとは「勉強や成績のこと」という子どもが多くいるが、子どもたちは学習することの楽しさを感じていないのだろうか。また、子どもの学校生活のようすを傍らで見ている保護者は、何を感じているのだろうか。子どもの「学び」に対して、子ども自身や保護者の思いを見ていくことにする。

イメージダウン

- 友だちとの学習は楽しいけれど、

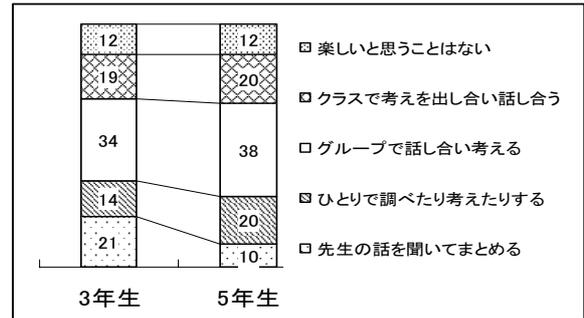
自分からは発表しない -

まず、子どもたちがどのような学習に「楽しさ」を感じているのかを知るために設問 子Q26 で「いちばん楽しいと思う学習スタイル」をきいてみた。その回答結果を学年別にグラフに表したものが次の図1-22である。

このように学習スタイルに関しては、グループやクラス全体での集団学習を好む子どもが半数以

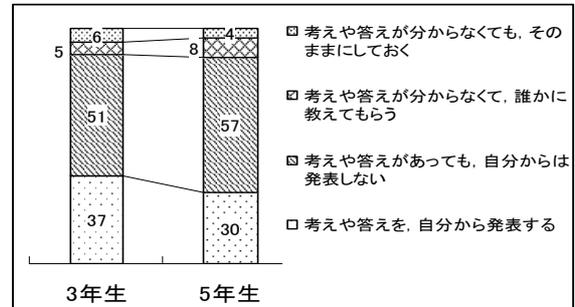
上と多く、学年が上がるとその傾向もやや強くなる。また、3年生では「先生の話聞いてまとめ」という受身的な学習スタイルを好む子どもが2割ほどいるが、5年生では半減する。替わって「ひとりで調べたり考えたりする」という自学自習のスタイルを好む子どもが増えている。このことから、子どもたちは学年が進むとともに、「集団学習」や「自学自習」の中に楽しさを見つけるようになるのではないと思われる。

図1-22 子Q26「楽しいと思う学習のスタイル」%



次に、設問 子Q25 で「学習中の自分のようす」を尋ねてみた。その回答結果である図1-23からは、9割の子どもが教室での学習内容を理解して、自分なりの「考えや答えをもって」取り組んでいるようすがうかがえた。

図1-23 子Q25「学習中の自分のようす」%



このように二つの図からは、子どもたちの学習に対する思いや態度、学習理解のようすが見て取れるのだが、図1-22によると、どちらの学年にも学習を「楽しいと思うことはない」という子どもが1割ほど存在していることが気がかりである。また、図1-23では、学習内容の「考えや答えが分からない」という子どもが1割程度いる中に「分からなくて、そのままにしておく」という子どもがわずかながらも存在していること、さらに「自分の考えや答えがある」にもかかわらず「自分からは発表しない」という子どもが半数以上にもなることに目を引かれる。

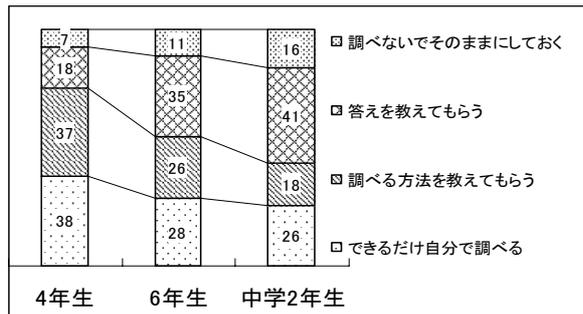
こうした学習に対する不満足感や苦手意識、消極的な態度などはおそらく、前項で見た「勉強や成績のことが悩み」という子どもの気持ちと連動

しているのだろう。しかも図1-23によると、学習に消極的になっていく傾向は3年生よりも5年生の方が強い。子どもたちの学習意欲は学年進行に伴って低下していく傾向があるのだろうか。

指定都市の教育調査(13)をみると、設問「あなたが勉強している理由は何か」に対して「勉強が好きだから」の回答率は学年が進むと減少し、「やらなければいけないから」の回答率が增加する。また、設問「学習中に疑問に思うことがあったらどうするか」に対して「調べる、教えてもらう」と回答する子どもの割合は学年が進むにつれて減少し、「そのままにしておく」子どもの割合が増加している、という結果であった。(図1-24)

このように全国的にも、子どもの学習に対するイメージや意欲、態度は、学年進行とともに低下していく傾向が見られた。このことから、子どもの主体的に学ぼうとする姿勢を育てるという現在の学校教育の方向性はさらに強調されなければならないだろう。

図1-24 「疑問を解決する方法」%

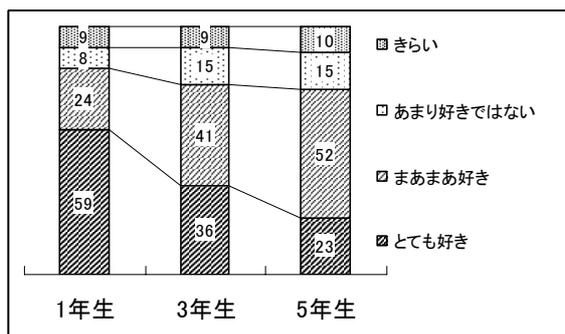


指定都市教育調査(2001年)より

- 人間関係が良好ならば、学校も楽しくなる -

学年進行とともに低下する傾向は「学校のイメージ」にも見られた。子どもたちへ「学校は自分にとって好きのところか」ときいた設問 子Q29の結果と、同じ質問を昨年の1年生にした結果とを合わせたものが図1-25であるが、やはり学習に対するイメージと同様、低下する傾向が見られる。「学校が好き」で、喜んで登校する姿は学年が進むと見られなくなるというのだろうか。

図1-25 子Q29「学校は好きか」%



そこで、子どもたちに「どうなったら今よりも学校が楽しくなると思うか」 子Q31 ときくことで子どもにとっての「楽しさ」の要素を探ってみた。すると、最も高い回答率を示したのは「今より友だちと仲良くなったら」の60%(全体)であった。そして、その割合は3年生よりも5年生の方が大きくなっている。(56% 64%:付表P.48)

前項で見たように、子どもにとっての最大の関心事は「友だちとのこと」であるが、ここでも、子どもにとって友だちとの人間関係の有様は、学校の楽しさを大きく左右するほど重要なものであることは明らかである。学年が進むにつれて学校のイメージがダウンするとはいえ、友達関係が良好なら「学校が楽しい」と感じられる子どもが多く、その傾向は学年が進むと強くなるのである。

- 「ひとり」で過ごす子ども-

子どもたちが学校生活の中で最も関心を寄せる「友達関係」についてさらに詳しく見るために、次の二つの設問に対する回答を分析した。子Q3:学校の休み時間は誰と過ごすか 子Q28:クラスのみなどと一緒にいるのは楽しいか の回答結果を昨年の1年生の回答結果と合わせてグラフ化したものが図1-26, 図1-27である。

図1-26

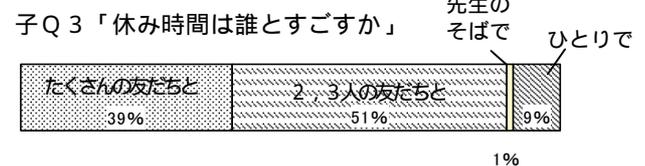
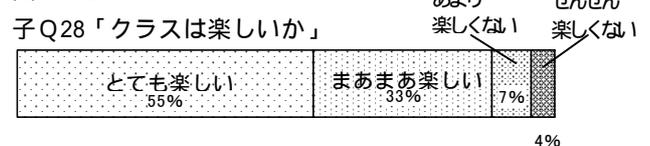


図1-27



どちらについても9割の子どもたちが、友だちと一緒に休み時間を過ごし、クラスでの集団生活を楽しんでいるようすである。このように「良好な友達関係」をもつことができている子どもたちにとって、学校生活は楽しいものになっていることだろう。

しかしその一方で、友だちと離れて「ひとり」で過ごす子どもや「クラスが楽しくない」という思いで過ごしている子どもが、それぞれ1割程度存在することにも注目すべきである。すべての子どもにとって学校生活を楽しいものにしていくことは、学校教育目標に迫るための視点の一つであると思われる。

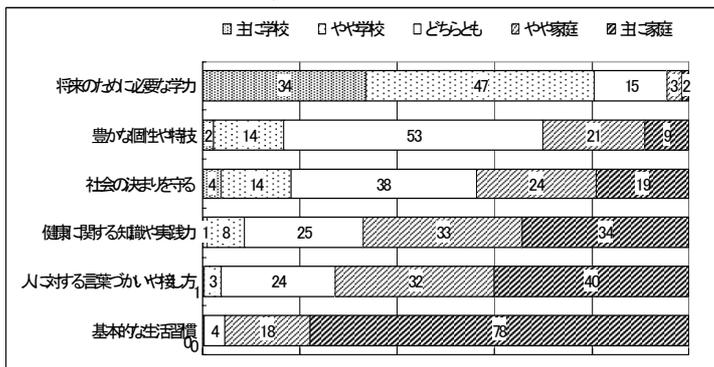
親たちの学校像

では、保護者は、学校生活をすごしている子どもたちの姿を通してどのような学校像を見ているのだろうか。

- 学校には、学力や個性を伸ばして欲しい -

保護者が学校教育に対して何を期待しているのかを知るために、子どもの教育に関する学校と家庭の「役割観」を見た。保Q27：次のようなことを教えたり身に付けさせたりするのは、学校と家庭のどちらの役割だと思うか という設問に対する回答結果が次の図1-28である。

図1-28 保Q27「教育の役割意識」%



六つの項目のうちで、学校の役割として最も強く意識され、期待されているものは子どもに「将来のために必要な学力」をつけることであった。これは学校教育が果たすべき主たる役割であって、8割の保護者が「学校の役割」と意識しているのは当然といえる。また、「家庭の役割」をいづらか意識していると回答した保護者は、子どもに学力をつけることに無関心であってはならないと感じてのことではないだろうか。

その他に学校教育への期待として大きいのは「個性や特技を伸ばすこと」「社会の決まりを守ること」の二つであるが、これについてはむしろ「学校と家庭の両方ともに」役割があると意識されているようである。

- 高い「信頼」 -

このように、子どもの「学力や個性・特技」を伸ばすことに期待が寄せられている学校教育だが、保護者は学校がその期待に応えていると判断しているのだろうか。設問 保Q21：子どもは学校の勉強が理解できているか と 保Q22：担任は子ども（の個性）を理解しているか の回答から保護者がどのように受け止めているかを見た。(図1-29, 図1-30)

本調査は7月初旬から中旬にかけて実施した。おそらく、3年生、5年生ともにクラスが再編成され、担任も交代した新しいクラスで1学期を終

えようとしている子どもたちがほとんどであると思われる。新学年になって三ヶ月あまりのこの時期で、「学習理解」にしても「担任の子ども理解」にしても、「できている」という受け止め方をしている保護者が75~85%にもなる。この短い期間を考えると高い数値であり、保護者の担任への信頼はこの時点ではかなり高いといっているのではないだろうか。

図1-29 保Q21「子どもの学習理解」%

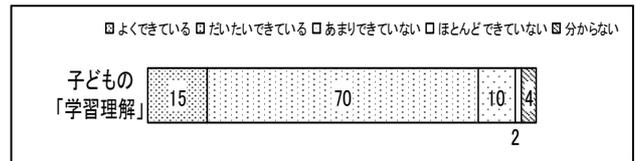
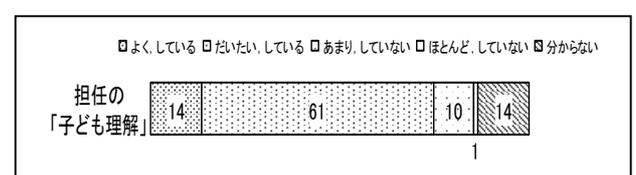


図1-30 保Q22「担任の子ども理解」%



では、保護者は、学校での子どもの学習や生活のようすをどのようにして知ることができているのだろうか。

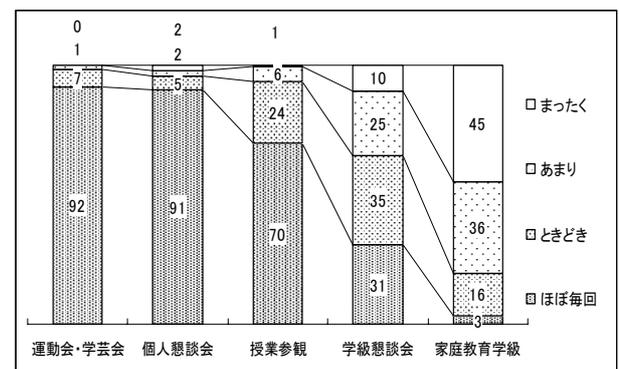
- 「家庭教育学級」って、なんですか？ -

もちろん、子どもの学校生活のようすを子どもとの会話によって把握している保護者は多いと思われる。(前項分析)しかし、学校での子どものようすを知りたいと願う保護者に対して、実際に学校でそれを目にする機会を設けることは願いに応えることでもあり、教育活動内容を伝え理解を求めめるためにも必要なことである。

それでは、学校で行われている教育活動や行事への保護者の参加状況はどうなっているのだろうか。設問 保Q19 によってきいてみた結果、次の図1-31のようになった。

図1-31

保Q19 「学校教育活動・行事への参加」%



運動会や学芸会のような行事とともに参加率が

高いのは個人懇談会，つづいて授業参観である。いずれについても「子どものようすが知りたいから」が最も多い参加理由である。確かにこの三つについては直接子どものようすがたを見たり，担任から個別に子どものようすを聞いたりすることができ，保護者の願いにかなっていると思われる。

そういう点からみれば，学級懇談会や家庭教育学級は個人的な話題が中心にはなりにくく，不参加の割合が高いことの要因とも思われる。保護者の回答 保Q19 ではどちらについても「時間が作れないから」というのが不参加理由のうちの過半数を占めているのだが，「意義を感じないから」とする回答も2割近くになった。とりわけ家庭教育学級については無回答(6%)であったり，アンケート用紙の余白に『家庭教育学級とは何のことですか?』のメモがあったりと，保護者にその意義が十分に伝わっていない面も一部にあることがうかがえる。

学校は，こうした実態を踏まえて，子どものようすが知りたいという保護者の願いを受け止めると同時に，教育活動の意義が保護者に伝わるような積極的な働きかけをすることが必要である。このことについては第3章第2節(P.37)で詳しく考察する。

(3) 育まれる子どもの内面

ここまでの分析によって，家庭における子どもと保護者の生活・意識の現状を見てきた。また，学校教育に対して抱いている両者の思いをうかがうこともできた。しかし，教育が子どもの人間形成を目的としている以上，家庭教育や学校教育がどのような現状にあるのかを測るには，子どもそのものを見つめた上でなければならない。

本項では子どものもつ「自己意識」「社会的資質」，保護者の見る「子どもの内面」にかかわる設問(表1-1, P.4)の回答から，子どもの人間形成の現状を明らかにするための分析を行う。

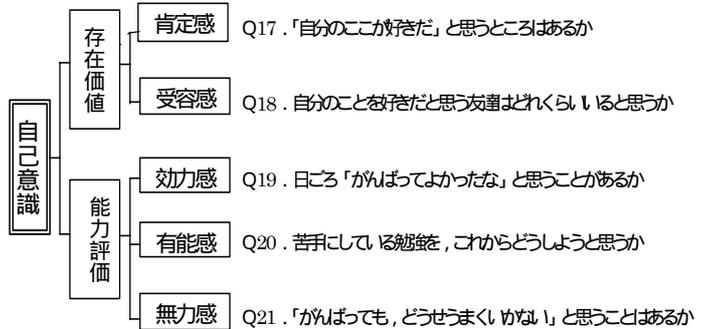
自分の「いいところ」って?

自己をどのように意識しているかを見ることは，自己の存在や自己に属すると考えられるもの(容姿，体格，人格，能力，成績など)の価値をどのように評価し，自信をもっているかという主観的な心のはたらきを見ることである。“今”の子どもたちは，自分自身をどのようにとらえているのだろう。

子どもが自己の存在価値や能力評価をどのように認識しているかを見るために，さらに「肯定感」

「(他者からの)受容感」「効力感」「有能感」「無力感」の五つの要素に分けてとらえ(図1-32)，それぞれの回答と相互の関連性を分析していくことにした。

図1-32 子どもの自己意識に関する設問



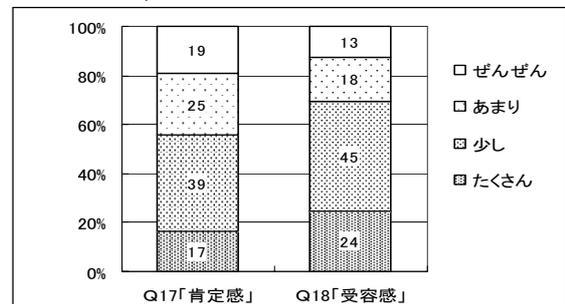
- やればできると思うけれど，

それは自分の「いいところ」なの? -

子どもの「肯定感」と「受容感」をきいた設問子Q17, 子Q18 の回答結果をグラフにしたものが図1-33である。子どもたちは，自分の存在価値についてどのように感じているのかをここから見ることにする。

図1-33

子Q17「自分の好きなところがあるか」
子Q18「自分を好きな友だちがいるか」



自分を好きだと思う友だちが「(たくさん, 少し)いる」と，自分が友だちに受容されていると感じている子どもの割合は69%になった。

一方それに比べると，自分には好きなところが「(たくさん, 少し)ある」と認識している子どもの割合は56%と低い。言い換えれば「自分のよさ」を自覚できていない子どもの割合が44%になるということだが，これは，自己の能力を低くとらえている子どもが多いということなのだろうか。三つの設問(子Q19, 20, 21)に対する回答結果から考えてみたい。

設問は，それぞれ子どもの「効力感」「有能感」「無力感(効力感・有能感の逆説としてきいたもの)」を見るためのもので，回答結果は図1-34, 図1-35のようになった。

図1-34からは，子どもたちが日常生活の中で

出会うたくさんの出来事に対して、達成感や挫折感を味わいながら、自分の能力を認識していくようすがうかがえる。「どうせうまくいかない」と思うことがある子ども(49%)でも「がんばってよかった」と思うことがあるなら、子どもは自分の能力に対する自信を確かなものにしていくことができるだろう。

図1-34

子Q19「がんばってよかったと思うことがあるか」
子Q21「がんばってもどうせうまくいかない、と思うことがあるか」

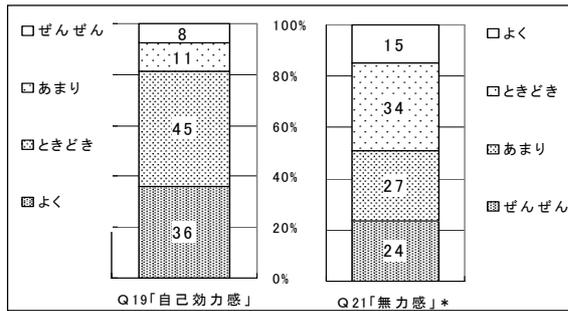
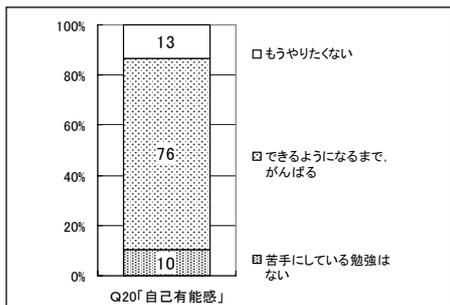


図1-35

子Q20「苦手な勉強をどうしようと思うか」



そのことは、図1-35からもうかがうことができる。苦手な勉強を「これからどうしようか」と考えるとき「もうやりたくない」という気持ちに打ちかって「できるようになるまで、がんばろう」と思うことができるのは、自分の能力に対する自信を感じているからであろう。その意味でこの図を見たとき、「自分には、やればできる力がある」と感じる自己有能感を76%の子どもがもっているといえる。

また、「苦手な勉強はない」と考えている子どもも、学習における自分の能力に自信をもっているといえるが、この万能感ともとれる意識をもつ子どもの割合は、学年が進むと激減する。(図1-36)

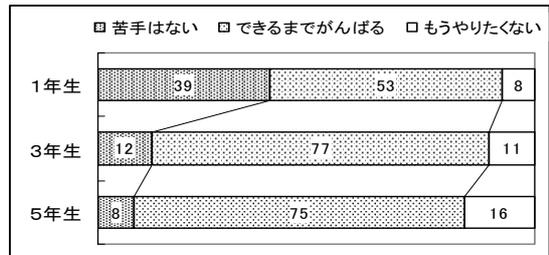
これは、子どもが成長の過程で様々な経験をしながら自分を客観的に見つめることができるようになり、自分には「苦手などはなく、何でもできる能力」があるのではなく、「苦手はあるけれど、がんばればできる能力」があるのだと、考えを転換していくからではないだろうか。このような自己有能感をもつ子どもは、自分の課題に対して前

向きに取り組んでいくことができるだろう。

その反面、「もうやりたくない」と考える子どもの割合も、学年進行とともに少しずつ増えている。自分の力が及ばないと思うことで、学習課題と向き合う意欲がもてなくなる子どもが、学年が進むと増える傾向にあるのではないかと心配される。

図1-36 学年進行と「自己有能感」

子Q20「苦手な勉強をどうしようと思うか」%



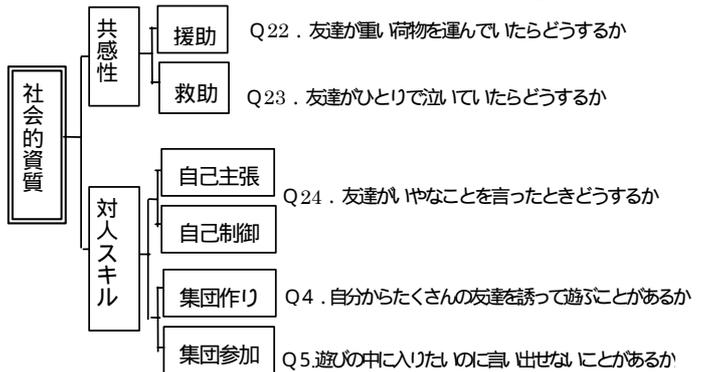
このように見ていくと、自己意識のうちの自己能力評価については肯定的な答えかたをしている子どもが多いにもかかわらず、それを「自分のよさ」と自覚できていない子どもがいるのではないかと推察できる。周囲が「苦手なことにも前向きに取り組む」子どもの姿勢を賞賛し、それが「自分のよさ」でもあることを自覚させていくようなかわり方をすることが、子どもの自己肯定感を高めることになるのではないだろうか。

自分と友だちとの間にあるもの

社会と共生していくために必要な社会的資質は、自己と他者とがかかわりをもつことによって培われていく。子どもにとって身近で重要な他者である友だちとのかわり方の実際や意識から、「今」の子どもたちの社会的資質がどのように育まれているのかを見ることにする。

社会的資質を「共感性」と「対人スキル」の二側面でもとらえることにし、さらにそれぞれを「援助」「救助」「自己主張」「自己制御」「集団作り」「集団参加」の要素に分けてそこから五つの質問を設定した。(図1-37)

図1-37 子どもの社会的資質に関する設問

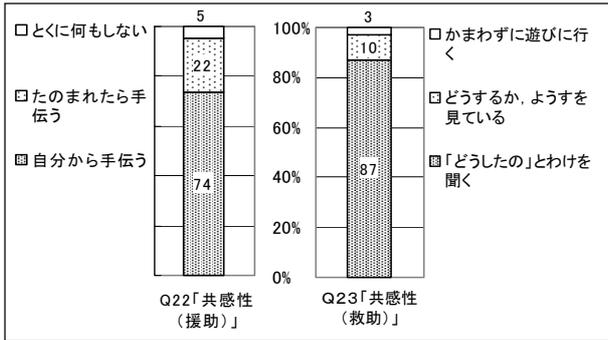


—高まっていく共感性—

友だちが困っている状況を目にしたとき、どのような行動をするかを二つの設問 子Q22, 子Q23 で聞くことにより子どもの「共感性」を見てみた。その回答結果をグラフにしたものが図1-38である。

図1-38 子どもの共感性

子Q22「友だちが荷物を運んでいたらどうするか」
子Q23「友だちが泣いていたらどうするか」



上のような二つの場面で「手伝う」という子ども(96%)や「どうしたのだろう」と心配する子ども(97%)は非常に多く、困難な状況にいる友だちに対して共感し同情する子どもがほとんどである。また、その思いを行動に移すことのできる「自分から手伝う」子ども(74%)、「(泣いている子に)わけを聞く」子ども(87%)の割合も大きい。子どもたちの共感性は高いといえるだろう。

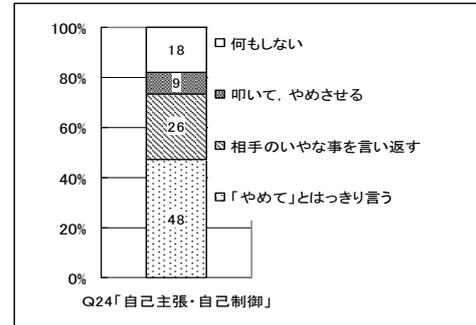
さらに、学年別に設問 子Q22 の回答率を比べてみると、「自分から手伝う」と積極的な行動に移すことのできる子どもの割合が学年進行とともに増えている。(1年生63% 3年生72% 5年生76%:付表P.48)これは、友だちが泣いている場合に「わけを聞く」行動についても見られる傾向であるが、子どもは成長とともに自分自身も困難な場面に出会うという生活経験を重ねていく中で人の心情を理解し、自ら行動に移すことができるまでに共感性を高めていくということではないかと考えられる。

では、自分自身が困難な場面に遭遇したとき子どもはどのように行動するのだろうか。調査では、友だちに自分の嫌なことを言われた場合にどのような態度をとるかときくことで、子どもの対人スキルを測ることにした。 子Q24: 図1-39

図が示すように、全体の3分の1の子どもは相手の嫌なことを言い返したり叩いたり情動にまかせて行動してしまうものの、「やめてと言う」と、自分の気持ちを話して伝えようとする子どもも約半数を占めている。この子どもたちは、自分の気持ちを抑えながらもはっきりと自己主張のできる

子どもといえるだろう。

図1-39 子どもの対人スキル「自己主張・自己制御」
子Q24「友だちがいやなことを言ったときどうするか」



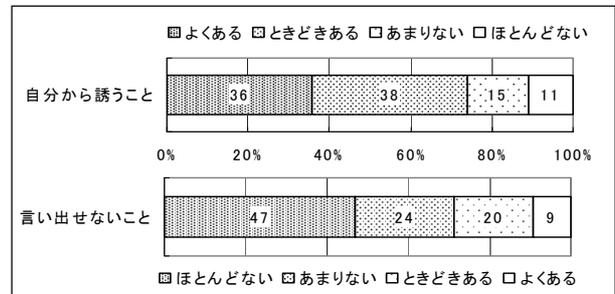
しかし、3年生に比べると5年生では「やめてと言う」ことは減り(53% 41%)、「相手の嫌なことを言う」が増える(21% 32%)という傾向が見られる。(付表 P.48) 高学年の子どもたちは共感性や感受性を高めていく一方で、お互いを中傷し合うというトラブルも増えてくるのだろうか。

—慎重な友だちづくり—

自分の気持ちを伝えることに関して、遊びの場面ではどのような行動をとる子どもが多いのかを見ると図1-40のようになった。

図1-40 子どもの対人スキル「集団作り・参加」

子Q4「自分からたくさんの友だちを誘って遊ぶことがあるか」
子Q5「遊びの中に入りたのに言い出せないことがあるか」



遊び集団を自分から作り出すことがあるという子どもの割合は74%、遊び集団の中に入りたのに言い出せないことがあるという子どもの割合は29%である。つまり、7割の子どもは遊びたいという思いを自分から伝えることができ、3割の子どもは集団に参加することに消極的であったり受身であったりする、ということである。「遊びたいのに言い出せない」子どもたちが、どのような思いで休み時間や放課後をすごしているのかが気になるところである。

このように見ていくと、自分や友だちの心の動きには敏感でありながら、それを言葉にしたり行動にしたりして伝えていくことができないでいる子どものすがたが浮かび上がってくる。そしてそ

の3割の子どもは、自己能力には自信がありながらも自己の存在価値には自信がもてないという自己意識の子どもがいたこと（P.13～14）と重なるのである。

このような子どもたちの内面に見られる傾向を、保護者はどのようにとらえているのだろうか。

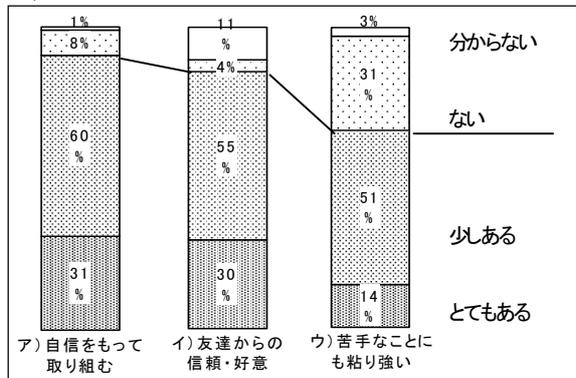
わが子を見る目

子どもはどのような内面をもっていると思うかと保護者にきいてみた。保Q9 そのうちの、子どもの自己意識に関する回答結果（図1-41）と社会的資質に関する回答結果（図1-42）から、保護者の「わが子を見る目」について考えてみた。—自信をもっていますが、粘り強さは足りません—

図1-41

保護者の見る「子どもの自己意識」

保Q9「子どもには、次のような面がどの程度あるか ア～ウ」



子どもには「勉強やスポーツなどに自信をもって取り組む面がある」ととらえている保護者が91%になり、子ども自身の自己能力評価が高かったことと一致している。得意なこと、自信をもって取り組めることがあると保護者も認めているのだが、「苦手なことに対する粘り強さ」に関しては「ある」と答えているのは65%であった。子どもが自身に感じている有能感 子Q20（86%）に比べると、保護者から見たわが子は「粘り強さが足りない」ように思えるのだろう。

わが子の「友だちからの信頼や好意」に関しては多くの保護者（85%）が「ある」と考えているが、15%が「ない・分からない」と答えている。子どもの友達関係について不安をもっている保護者がいるのではないだろうか。

つづいて「子どもの友達関係にはどんなことが大切だと思うか」と聞いた設問 保Q10 に対しては、過半数の保護者が「友だちの気持ちを考えること」を選択肢の中から選んだ。子どもの良好な友達関係づくりには、まず共感することが大切だと考える保護者が多いことを表している。

では、実際の子どもの社会的資質について、保護者はどのように感じているのかを見てみる。—一思いはありますが、伝えることはまだまだです—

図1-42

保護者の見る「子どもの社会的資質」

保Q9「子どもには、次のような面がどの程度あるか エ～キ」

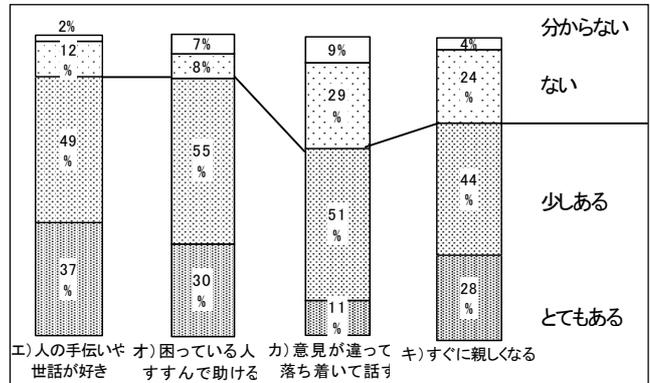


図1-42を見ると、わが子を、人を手伝ったり困っている人を助けたりする共感的行動ができる子どもだととらえている保護者は多く（エ 86%、オ 85%）、子どもの回答結果（図1-38, P.15）から見た共感性の高さとほぼ一致している。また、わが子には、自分の意見を落ち着いて話したり初めて会う人と親しくなったりする面が「ない・分からない」と見ている保護者の割合は、カ 38%、キ 28%となり、2～3割の子どもが「自分の気持ちを伝えられない」（図1-40, P.15）と回答していることと似た傾向がある。

このように、子どもの人間形成のようすを見ていくと、子ども自身の心の働き（感受性や共感性など）は豊かであり、それを子どもたちも、わが子を見つめる保護者も認識しているようである。また、自己の能力についても「やればできるはず」という見方をしている子どもが多く、保護者もそういった子どものようすを「物事に自信をもって取り組んでいる」と見ていることも読み取ることができた。

しかし一方で、そういう自分自身の存在価値にはっきりとした自信がもてない子どもも少なからず存在している実態もある。自己意識は、学習に対する意欲ややる気、努力の程度、対人関係のあり方にも影響するといわれる⁽¹⁴⁾が、今後、この「自己肯定感」の低い傾向にある子どもたちが自己意識を高めていけるような家庭や学校でのかわり方が重要になってくるといえるだろう。

本節では「家庭の教育力が低下したのではないかと懸念する声を受けて、このことを検証しながら実態を見るために分析を進めてきた。子どもの豊かな人間形成を培うという家庭の教育力が低

下したのならば、形成されているはずの子どもの内面に未形成の部分ばかりが見られるはずであるが、ここまで見てきたように、子どもの自己意識や社会的資質には豊かに形成されつつあると思われるものもあった。このように家庭教育を見ていくと、今必要なのは、現代の家庭の教育力が低下したかどうかを問題にしてトータルに論議することではなく、子どもの内面の形成に焦点を当てて家庭教育を見直し、支援や協力を要する状況に目を向けることではないかという思いが強くなる。子どもの健やかな成長を願いながらも子育てに悩み、子どもの教育に不安を感じている保護者が存在することや、自分の価値を低くとらえ社会的資質を身に付けることができないでいる子どもがいることに注目するべきではないだろうか。こうした部分に焦点を当てた取組が為されることが「今」学校に求められているのだと考える。

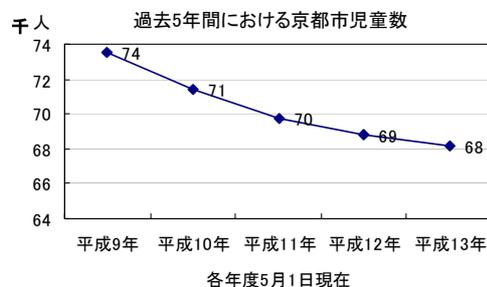
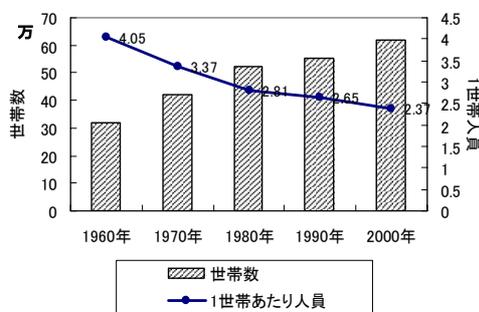
- (1) 国立教育政策研究所が平成 13 年度に行った「家庭の教育力再生に関する調査研究」では、家庭の教育力に関する実態を調査するために、全国の子どもを持つ親のうち、25 歳から 54 歳までの男女(個人)12,000 人を対象にして質問紙調査を実施した。回収数は 3,859 (回収率: 32.2%) で、回答者を「若い世代」「中堅世代」「後年世代」の 3 つの年齢層に分けて分析に当たっている。
- (2) 辻正三「家族制度」依田新監修『新・教育心理学事典』金子書房 1977 pp. 101~102
- (3) 藤崎真知代「社会化」『教育心理学辞典』学文社 1994 p. 130 「社会化とは、ある社会に属する個人が、その社会の有効な成員として適応するように成長、あるいはつくりあげられていく過程をさす」
- (4) 松田惺「家族関係と子どもの発達」『新・児童心理学講座 第 12 巻 家族関係と子ども』金子書房 1991 pp. 7~8
- (5) 京都市教育委員会「平成 14 年度 生涯学習推進の方向と施策の展開」第 2 章 教育委員会における取組の重点 - 家庭教育の積極的・総合的な支援 - から
- (6) 内閣総理大臣の諮問機関として平成 12 年 3 月に発足した教育改革国民会議の報告(2000, 12, 22)「1. 私たちの目指す教育改革(これからの教育を考える視点)」
- (7) クロス集計: 二つのカテゴリ・データの関連を検討するときに行うもの。2 変数間の関連のしかたについての基本的な情報を直截に示すものである。
- (8) 京都市地域類型: 京都市の対象地域についてある一定の標識(基準・めじるし)や、特性に基づいて比較的同じような条件にある学校を単位地区(小学校通学地

域等)としてまとめ類型化したもので、層化抽出による標本調査のための基礎資料となるもの。

- (9) 標本誤差: 全数調査に比べて、標本調査は母集団の一部分を標本(サンプル)として抽出したものであるため、常に母集団とのずれが生じる。これを標本誤差といい、この差が小さなものほど母集団の状態を忠実に反映するものとされる。
- (10) 京都市の核家族化・少子化: 京都市では 2000 年の統計によると世帯数は増加している反面、世帯人員数は 2.37 人にまで減少している。総人口の増加はわずか(10 年間で 0.5% 程度)なことから核家族化・小家族化現象がみられる。また、児童数は過去 5 年間でおよそ 5,000 人減少しており、総人口がわずかながらも増加していることを考えると、少子化が顕著である。

(図: 京都市統計情報より作成)

京都市の世帯数、世帯人員数の推移



- (11) 指定都市教育研究所連盟の調査: 全国 12 の政令指定都市の教育研究所が第 13 次共同研究(平成 12~14 年度)として、指定都市に居住する子どもたち 14,400 人を対象に、子どもの意識の実態を調査したもの。平成 15 年 3 月に「教育改革の中の子どもたち」(東洋館出版社)として刊行される。
- (12) 1 年生調査: 著者が昨年度(2001 年度)の調査研究で行った、京都市立小学校在籍の 1 年生約 1,000 名に対する「生活・意識アンケート」調査 拙著「生活・意識調査が示す小学校 1 年生のすがた」『平成 13 年度研究紀要 vol. 1』永松記念教育センター 2001
- (13) 前掲 注(11)
- (14) 上田恵津子「自信とプライドの教育心理学」『自信とプライドを育てる 教育フォーラム 20』金子書房 1997 p. 46

第2章 認められることで存在する自分

前章第2節では、家庭生活の実態と、そこでの子どもと保護者のいろいろな思いを見てきた。さらに、子どもの自己意識や社会的資質、またそれを保護者がどう受け止めているかを見てきた。ここでは、多くの家庭で、お互いの存在を精神的な支えとして子どもの内面が健やかに形成されつつあることがうかがえたが、一部には、家庭の教育的機能が十分に働いていないのではないかと思われる実態もあった。

とりわけ、「自己の存在価値」に自信の持てない子どもがいることは、その子どもの前向きに生きようとする力を育てていくことができない状態でもあり、看過できない状況である。このような意識でいる子どもの背景にはどのような生活実態や対人意識があるのかを探ることが、家庭教育との連携を図っていくための視点を明らかにすることにもなると考える。

本章では、子どもの自己意識のあり方と対人意識や行動との関連性を見ること、さらに子どもと保護者の思いを重ねて読み解くことによって、家庭生活の中で子どもの自己意識を高め、社会的資質を育てていくための手だてを考察していく。

第1節 届かない思い

～子どもの求める保護者とのかかわり～

子どもの自己意識を分析した結果、全体の傾向としては自己の能力評価は高かったが、中には自己の存在価値を低くとらえ、能力評価も悲観的である子どもがいた。ここでは、このような子どもの自己意識がどのような対人意識や行動、ものごとに取り組む態度となって表れるのかを探っていく中で、子どもの自己意識を高めるためのかかわり方を考察していくための視点を明らかにすることにする。

(1) あやふやな自分

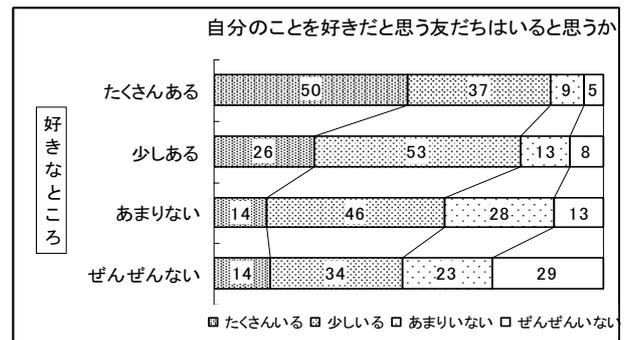
肯定感の低さは受容感のなさか

自分のよさを自覚できていない子ども、つまり「自己肯定感」を感じていない子どもは、友だちに受容されていないと感じている傾向があることが図2-1から見て取れる。この図は設問 子Q17：肯定感 と設問 子Q18：自分のことを好きだと思ふ友だちはどれくらいいると思うか の回答結果をクロス集計したものである。自分には好きなのところが「たくさんある」という子どものおよそ9割が友だちから好かれていると感じている

が、自分には好きなのところが「ぜんぜんない」という子どもには「自分のことを好きだという友だち」もいないと感じている割合が大きくなる(52%)。肯定感を感じていない子どもほど、自分は友だちから好かれていないのではないかと不安を感じている子どもでもあるといえるだろう。

図2-1

子Q18「自分を好きだと思ふ友だちはいるか(受容感)」
×子Q17「自分の好きなのところがある(肯定感)」%



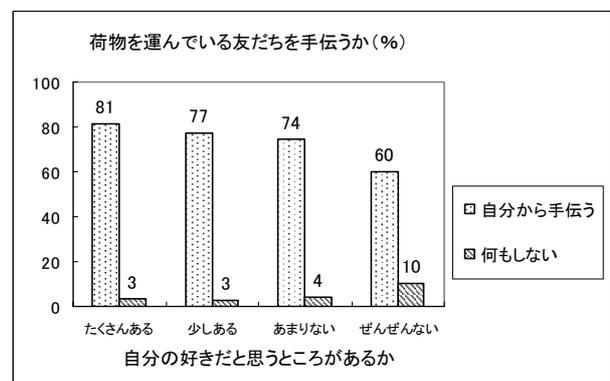
このような、自分のよさを感じられず、友だちからも好かれていないと考えてしまう自己価値の低い子どもの態度や行動には、どんな傾向が見られるのだろう。子どもが否定的な自己意識でいるとき、他者に対してどのような行動をとるのかを、「肯定感」「受容感」と対人スキルに関する設問との関連性で見ることにする。

自己の存在価値が対人行動に表れる

肯定感や受容感を感じられない子どもたちの、友だちへの共感的行動や遊び集団への参加のようすはどうか。設問 子Q22：荷物を運んでいる友だちを手伝うか(共感性) に「自分から手伝う」「何もしない」の選択肢を選んだ子どもと肯定感との関連性を見た。(図2-2)

図2-2

子Q22「荷物を運んでいる友だちを手伝うか(共感性：援助)」
×子Q17「自分の好きなのところがある(肯定感)」



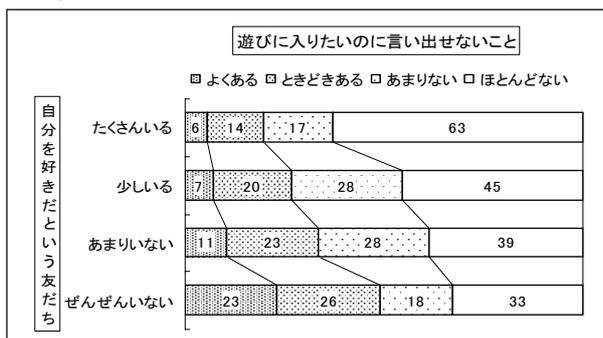
図のように、肯定感を感じていない子どもほど

「自分から手伝う」という子どもの割合は低くなっていく。とりわけ、自分には「好きなのところがぜんぜんない」と思う子どもで「自分から手伝う」のは60%で、「好きなのところがたくさんある」という子どもの81%に比べると大きく落ち込み、「何もしない」と回答する子どもの割合が増えている(3% 10%)ことが分かる。このことから、友だちが困難な状況にいるとき、友だちの立場に共感しながらも援助のための積極的な行動に出ることができないのは、その子どもの自己肯定感が低いことが要因として考えられるのである。

また、遊び集団に参加したいときにその気持ちを伝えられるか 子Q5 と、子どもの受容感との関連性は図2-3のようになった。この図からは、友だちからの受容感を感じていない子どもほど遊び集団に参加したいと思ってもその気持ちを言い出せない傾向があることがうかがえる。

図2-3

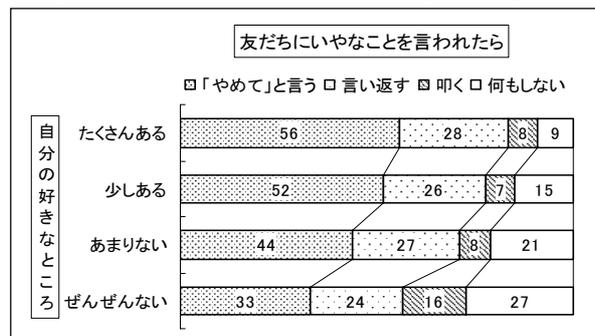
子Q5「遊びに入りたいのに言い出せないこと(集団参加)」
×子Q18「自分のことを好きだと思う友だちはいるか(受容感)」%



さらに、自分を中傷する友だちに対して自己主張や自己コントロールができるかを見た設問 子Q24: 友だちにいやなことを言われたらどうするか と肯定感との関連性を示した図2-4でも、前述のような傾向が見受けられる。

図2-4

子Q24「友だちにいやなことを言われたら(自己主張・自己制御)」
×子Q17「自分の好きなのところがある(肯定感)」%



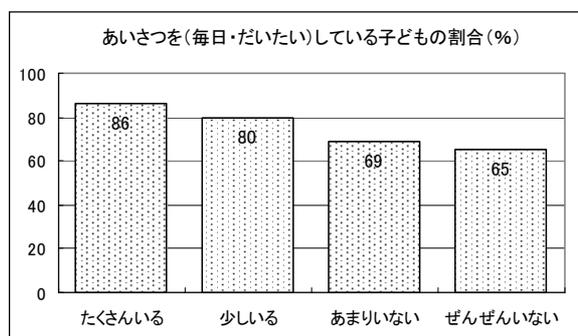
つまり、自己肯定感を感じられていない子どもほど、中傷してくる友だちに対して「やめて」欲

しいと言うことができず「何もしない」でやりすごしてしまう傾向が強くなり、うまく言葉に出して言えないためか「叩く」ことで不快感を表す子どもの割合が増えるのである。

では、友だちではなく地域社会の大人に対する態度には、子どもの自己意識のもち方による違いはあるのだろうか。肯定感と、設問 子Q2: 近所に人に挨拶をしているか で「毎日、だいたい」している」と回答した割合とのクロス集計(図2-5)を見ると、確かに意識と態度には関連性があることが見て取れる。

図2-5

子Q2「挨拶をしているか(対人行動)」
×子Q18「自分のことを好きだと思う友だちはいるか(受容感)」



学校の行き帰りや生活の場面で必ず顔を合わせるだろう近所の大人に対して、友だちからの受容感を感じていない子どもほど挨拶をしている割合が低くなっている。自分を好く友だちが「たくさんいる」と感じている子どもの86%が近所の人に挨拶をしているが、自分を好く友だちは「ぜんぜんいない」と考える子どもで挨拶を実行しているのは65%になってしまう。保護者のしつけ意識をきいた設問で、保Q13オ: 挨拶をさせることは最も強く意識されていたことである。「意識している」97%)しかし、上の図を見ると、「挨拶」が子どもの日常の行為として定着するかどうかは、保護者のしつけ意識の強さだけでなく、子どもの自己意識のあり方にもよるのだということが明らかなのである。

このように見ていくと、子どもが自己価値としての「肯定感」や「受容感」を感じられずにいることは、子どもが否定的な対人意識をもつことになり、その結果として自分の思いを言葉や行動に出せないという消極的な対人行動を生んでしまうと考えられるのである。このことから、肯定感や受容感に裏づけされた確かな自己価値を感じられない子どもは、正当な自己主張や判断ができなくなってしまふことが懸念される。学校や地域社会で、子どもがよりよい友達関係をつくることで

きない問題の背景には、その子どものもつ自己の存在価値の低さがあるのではないかと推察されるのである。

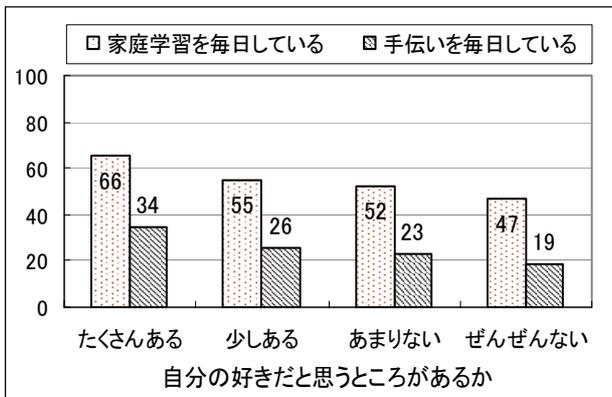
高い自己意識が課題に向き合う意志になる

また、子どもの自己意識の有様は生活習慣の定着のようすにも表れているようである。肯定感に関する回答と、設問 子Q7：家庭学習の習慣と設問 子Q8：家の手伝いの習慣 のそれぞれに「毎日している」と回答した割合を図にすると下のようになる。(図2-6)

図2-6

子Q7「家庭学習をしているか」
子Q8「手伝いをしているか」

×子Q17「自分の好きなおところがあるか(自己肯定感)」%



この図からは、自分には好きなおところが「たくさんある」という子どもの66%が家庭学習に毎日取り組み、34%が手伝いを毎日しているが、自分に好きなおところが「ぜんぜんない」という子どもでは、その割合が大きく減少している(47%、19%)ことが読み取れる。言い換えれば、子どもが自己肯定感を強く感じているほど家庭学習や手伝いの習慣が定着しており、肯定感を感じていない子どもほどこれらの習慣が身に付いていない傾向がある、ということを表している。家庭学習や手伝いをすることは、子どもにとって自分に課せられた問題や役割に取り組むことである。自分の課題に向き合い、解決に向かって自己能力を発揮してこうとする前向きな姿勢は、この図が示すように、子どもの自己意識の高さと強く関連しているといえるだろう。自分の課題に粘り強く取り組んでいこうとする意志は、自分自身の存在価値に対して自信をもつことで生まれてくるのではないと思われる。

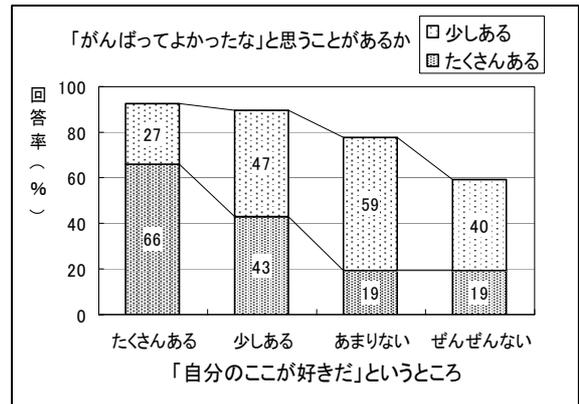
存在価値と連動する能力評価

子どもへの肯定感に関する設問 子Q17 の回答結果と設問 子Q19：「がんばってよかったな」と思うことがあるか(効力感) に対して「(よく・

ときどき)ある」と回答した子どもの割合をクロス集計したものが図2-7である。自分に対して「好きなおところ」が「ない」と感じている子どもほど「がんばってよかった」という達成感を味わうことが少ない子どもである傾向をこの図は示している。

図2-7

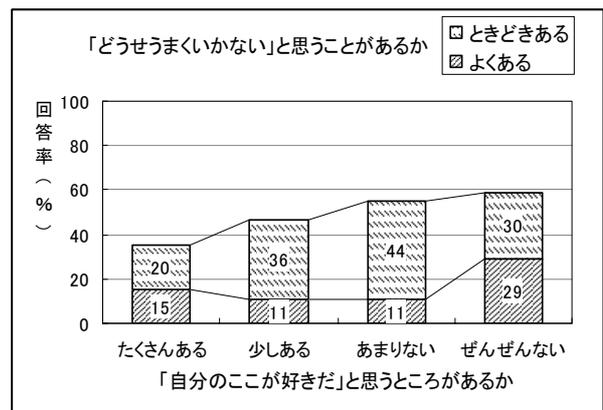
子Q19「がんばってよかったと思うこと(効力感)」
×子Q17「自分の好きなおところがある(肯定感)」



それに対して、肯定感と設問 子Q21：がんばっても「どうせうまくいかない」と思うことがあるか(無力感) の設問に「(よく・ときどき)ある」と回答した子どもとの関連性を見ると(図2-8)自分に対して肯定感を感じていない子どもほど「がんばっても、どうせうまくいかない」と自分の無力さを感じることもあるという傾向がある。

図2-8

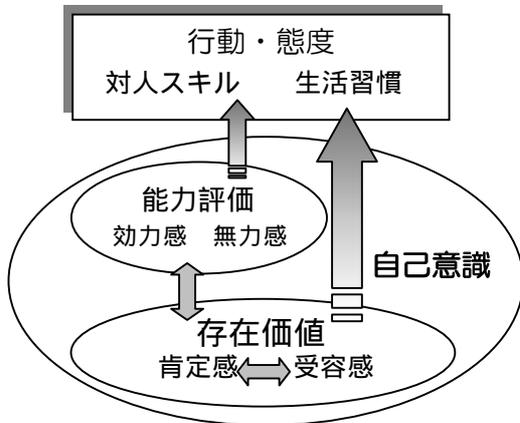
子Q21「どうせうまくいかないと思うこと(無力感)」
×子Q17「自分の好きなおところがある(肯定感)」



このように上の二つの図は、肯定感をもてず自分の存在に対する自信がない子どもほど、自分の能力に対する評価も低くなるという関連性を示している。そして、問題解決に向かうときの子どもの意欲的な態度は、子どもが自己の存在に対する

自信をもっていることの表れであり，自己の存在価値を上げていくことが子どもの前向きな考え方や積極的な行動を生み出すための大前提であることを示唆しているといえる。(図2-9)

図2-9 行動・態度を生み出す自己意識



本項では，子どもの自己意識がその子どもの対人意識や行動にどのように影響し関連しているのかを探った。そこから浮かび上がったのは，自己の存在価値を低くとらえ自分の能力に可能性を見出せない子ども，課題に向かって積極的に行動できない子どものすがたである。そして，この子どもたちには，よりよい人間関係をつくり他者と共生していくために必要な社会的資質が十分に育っていないという傾向が見られたのである。こうした実態は子どもたちの一部に見られるものではあるが，このことから，子どもの「人間形成の基盤を培う」ことの中核に「子どもの自己意識を高める」ことを据えて，これを目的としたかわり方をしていくことがすなわち「豊かな人間性を育む」ことにつながっていくことが分かる。

(2) 安息の場にいる実感

前項で見たように，子どもの自己意識のあり方はそのまま子どもの人間形成の状態を示しているといえるが，家庭生活の場で子どもがどのような自己意識を育てているかを見ることは，家庭の教育力がどのように子どもの自己意識に働きかけているのかを知ることである。

子どもの自己意識の有様と，子どもが保護者のかかわり方をどう受け止めているかとの関連性を探ることで，家庭の教育力の一側面を見ることができらる。

自分を認めてほしい人

第1章第2節第1項で家庭生活の現状についてふれたが，図1-18(P.9)では，子どもが日ごろ「家の人に感じていること」の傾向を見ることが

ができた。その図では，多くの子どもたちが保護者のかかわりを精神的支えとし，過半数の子どもは不満を感じることもなくすごしているようすがうかがえた。しかし，その半面では保護者に対して不満を感じている子どもが44%存在し，その不満のうちわけを見ると下の図2-10のようになった。

図2-10 子どもが感じる保護者への「不満」



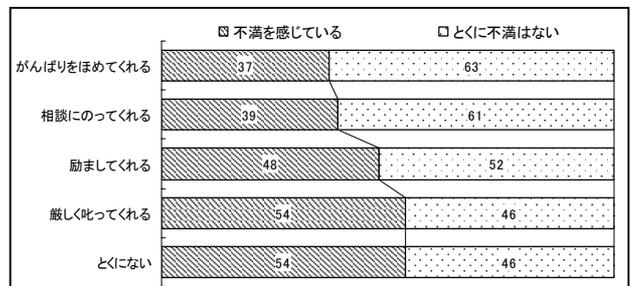
「自分のせいではないのに(41%)」や「がんばっているのに(21%)」自分のことを理解してくれていないと感じている子どもや「自分の話を聞いてくれない(19%)」と思う子どもが多いようである。自分にも言い分があるのに，自分は精一杯がんばっているのに，自分を受け容れてもらえないもどかしさを感じているのではないだろうか。

子どもがこのような思いを抱えていることと，保護者の「しつけ」に対する受け止め方には関連性はあるのだろうか。設問 子Q14：家の人からよくしてもらっていることは何か と設問 子Q15：保護者への不満 とのクロス集計の結果(図2-11)を見ると，保護者を「がんばりをほめてくれる」人，「相談にのってくれる」人など，精神的な支えとして意識している子どもには不満を感じている割合は低い。しかし，その他の選択肢を選んだ子どもには不満を感じる子どもが多く，とりわけ，「叱ってくれる」「してもらっていることは，とくにない」という子どもの半数以上が保護者に何らかの不満を感じているようである。

図2-11

子Q15「保護者への不満」

×子Q14「保護者にしてもらおうこと」%



この図からは，子どもが本来的にもっている願いは「自分を認めてほしい」ことなのだということが伝わってくる。指定都市教育研究所連盟が昨年行った調査によると，子どもが最もほめてほしいのは「家の人」であるというが(表2-1)，家の人に「自分を分かってもらえない」という気持

ちが「家の人にしてもらっていることはとくにない」という否定的な受け止め方に影響しているのではないかと思わせる集計結果である。

表 2 - 1 自分をほめてほしい人

あなたががんばったとき、だれにもっともほめてほしいですか(%)

| | 4年生 | 6年生 |
|---------------|------|------|
| 家の人 | 71.2 | 59.5 |
| 学校の先生やしょくいんの人 | 3.7 | 3.5 |
| 塾や習い事の先生 | 2.9 | 3.6 |
| 友だち | 8.3 | 11.8 |
| 近所の人 | 1.0 | 0.5 |
| 特にほめない | 12.9 | 21.1 |

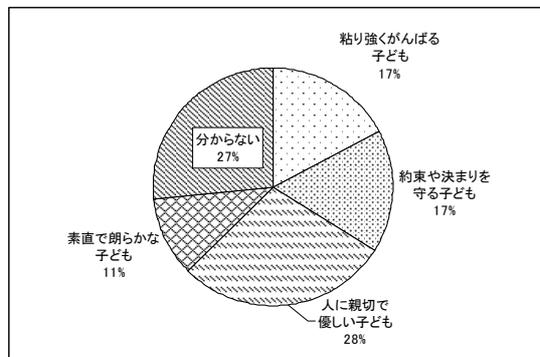
指定都市調査(平成13年10月実施)

保護者のかかわり方に精神的な支えを感じられていない3割(図1-18, P.9)の子どもたちに、保護者の願いは伝わっているのだろうか。

設問 子Q16: 家の人にはあなたにどんな子どもになってほしいのだと思うか の回答結果を見ると(図2-12), 73%の子どもは保護者の願いを自分なりに受け止めているようである。日ごろから言い聞かせている保護者もいるだろうし、保護者の姿勢から感じ取る子どももいるだろう。しかしその一方で、「分からない」の選択肢を 27%の子どもたちが選んでいるのも事実である。

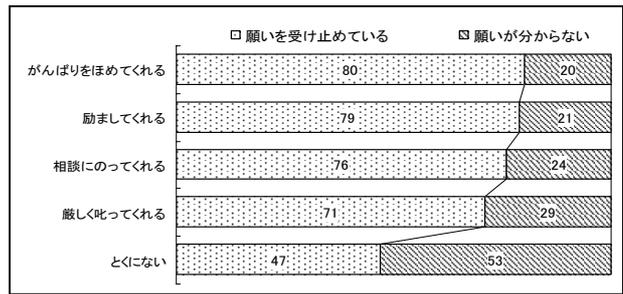
図 2 - 12

子どもの受け止める「家の人願い」



さらに、前出の設問 子Q14: 家の人にしてもらっていること に対する回答と、この「家の人願いは分からない」という子どもたちがどのように関連しているかを見た。すると、次の図2-13のように、何らかの精神的な支えを保護者を感じている子どもが保護者の願いを受け止めている割合は約8割と高いのに比べて、「してもらっていることはとくにない」と保護者とのかかわりを精神的支えと感じていない子どもには願いを受け止めている子どもの割合(47%)よりも「願いが分からない」子どもの割合(53%)の方が高くなるのである。

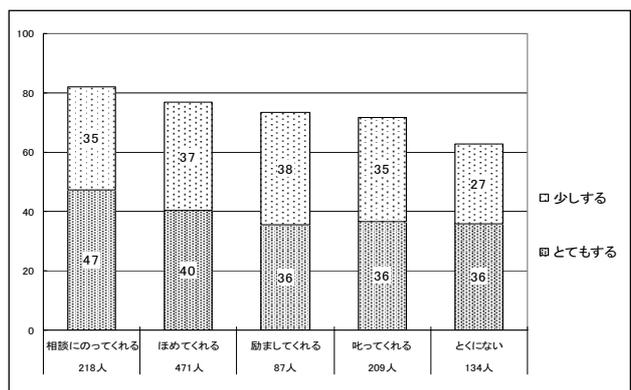
図 2 - 13 子Q16「願いの受け止め」
×子Q14「保護者にしてもらうこと」%



このように図2-11, 図2-13から子どもの保護者への思いを探っていくと、自分を認めてくれない、理解してくれないと受け止めている子どもたちは、保護者のかかわり方を「精神的な支え」と感じ取れず、保護者の「しつけ」に込められた願いはこの子どもたちには届きにくいと思われる。このように両者の間に信頼関係がもてない状況にある家庭は、子どもにとっての「安息の根拠地」にはなり得ないのではないだろうか。

下の図2-14は設問 子Q14: 保護者にしてもらうこと と 子Q12: 帰宅時の安堵感 とをクロス集計したもので、子どもが家庭に感じる安堵感と保護者のかかわり方との関連性を見たものである。この図からは、保護者のかかわり方が家庭での子どもの安堵感に影響していることが分かる。保護者の願いを感じ取ることでできる豊かな感受性は、精神的支えとなる人が存在しない、安堵感の得られない家庭では育ちにくいといえるだろう。

図 2 - 14 子Q12「家に帰ったときほっとするか」
×子Q14「保護者にしてもらうこと」%



存在価値を高める親子の信頼関係

このように家庭で安息を得られないでいることが、子どもたちの自己意識へ否定的な影響を与えていないかが心配される。

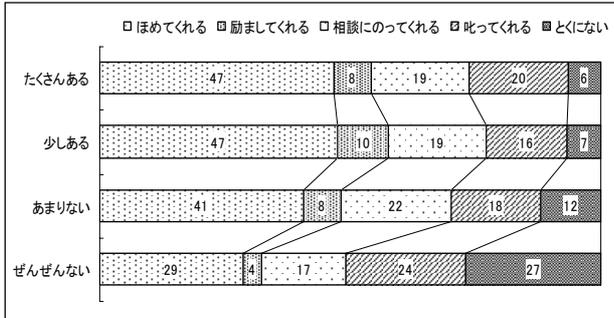
そこで、このような精神的状況が子どもの「肯定感」や「受容感」にどのように影響するのかをクロス集計で探ったところ、以下のような関連性

が明らかになった。

まず、設問 子Q14：家の人にしてもらうことと子どもの肯定感との関連性を示したものが図2 - 15である。

図2 - 15

子Q14「保護者にしてもらうこと」
×子Q17「自分の好きなところがある(肯定感)」%

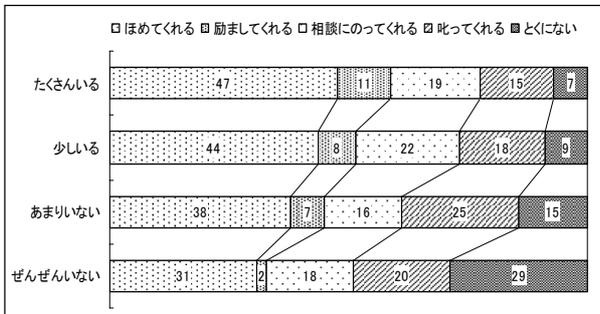


この図からは、自分に対して「好きなところは少ない」と肯定感をもてないでいる子どもほど保護者にしてもらっていることは「とくにない」と回答する子どもの割合が高くなることが読み取れる。それは、自分には好きなところが「ぜんぜんない」と回答した子どもが保護者のかかわり方をどう受け止めているかを見ると、最も顕著にその傾向を表していることが分かる。自分の存在に「ぜんぜん」自信のない子どもには、保護者から「叱られる(24%)」か「とくに(何も)してもらっていない(27%)」という子どもが過半数にもなっているのである。

次に、同じく設問 子Q14：家の人にしてもらうことと子どもの受容感との関連性(図2 - 16)を見ても、同様の傾向が読み取れる。

図2 - 16

子Q14「保護者にしてもらうこと」
×子Q18「自分を好きだという友だちはいるか(受容感)」%



自分を好きだという友だちなど「いない」と考えている子どもほど、保護者から「ほめてもらう」「励ましてもらう」という受け止め方をすることは減少し、「叱ってくれる」「とくにない」と受け止める子どもが増加している。そしてここでも、

友だちから「ぜんぜん」好かれていないと感じている子どもの約半数(49%)が、保護者からの受容感を感じていないのである。

こうして、子どもが保護者のかかわり方をどのように受け止めているかと子どもの「肯定感」「受容感」との関連性を見ていくと、保護者が子どもを認め、励まし、精神的な支えになっていることが、子どもの「自己の存在価値」を決定付けていることに改めて気付くのである。

家庭の人間関係が対人関係に反映する

また、前項の分析(P.19)では、自分が友だちから受容されていると感じられなければ、よりよい友達関係をつくるための対人行動ができない傾向が見られたが、保護者から受容されていると受け止めているかどうかと対人行動においても同じことがいえるのではないだろうか。保護者のかかわり方をどのように受け止めているかと、子どもの社会的資質との関連性を二つのクロス集計で見た。

ひとつは、共感的行動との関係について設問 子Q14：してもらうことと子Q22：共感性(援助)の回答をクロスさせたもの(図2 - 17)で、もうひとつは、同じく設問 子Q14：してもらうことと子Q24：自己主張・自己コントロールとのクロス集計である。(図2 - 18)

図2 - 17

子Q14「保護者にしてもらうこと」
×子Q22「友だちが荷物を運んでいたらどうするか(共感性)」%

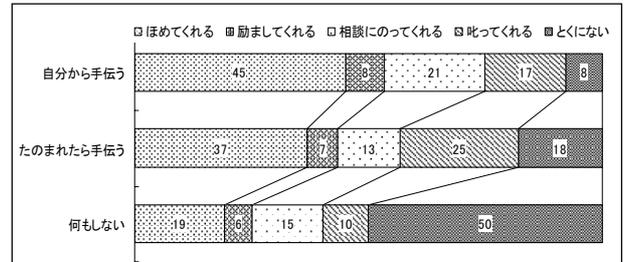


図2 - 18

子Q14「保護者にしてもらうこと」
×子Q24「いやなことを言われたら(自己主張・自己制御)」%

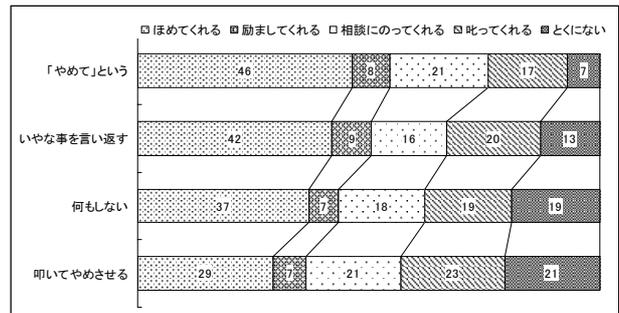


図2 - 17を見ると、友だちの困難に共感し自分

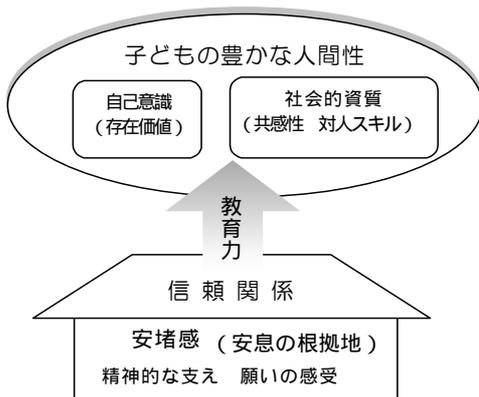
から「手伝う」という行動に移すことのできる子どもは75%が保護者から受容的な接し方をされていると感じている。それに対して、「たのまれたら」と答えた子どもや「(たのまれても)なにもしない」という子どもには、保護者からは「よく叱られる」「なにもしてもらっていない」と感じている子どもが多く、受容されていると感じている子どもの割合は57%、40%と小さくなっていく。

そして、図2-18のように、友だちから自分のいやなことを言われたときにははっきりと「やめてほしい」と言える子どもには、保護者に日ごろから自分のがんばりを「ほめて」もらっている傾向があり、「叩いてやめさせる」子どもには、保護者から、がんばりを認められるよりも「叱られる」ことや「とくになにもしてもらっていない」という印象が強いのである。

このように、困っている人の立場に共感してすすんで手を貸したり、自分が窮地に立たされたときに正当な自己主張をしたりできる社会的資質は、日ごろの保護者の接し方を子どもがどのように受け止めているかに大きく影響されていることが明らかといえる。つまり、家庭での人間関係のあり方が、そのまま対人関係に反映されるといいだろう。

本節では、子どもが保護者の接し方を受容的にとらえ家庭が安堵感を感じる「安息の根拠地」であることが子どもの自己意識を高め、社会的資質を育てていることを明らかにした。(図2-19)

図2-19 家庭の教育力の源



「豊かな人間性を育む」という家庭の教育力は、保護者と子どもの信頼関係のようすを見ることでその力を測ることができるようである。

それでは、子どもの受け止めは、保護者のどのような子育て意識やしつけスタイルを感じ取ったものなのだろうか。次節では、保護者の意識や考え方、しつけの実際が、子どもの意識や行動にどのように働きかけるのかを探っていきたい。

第2節 親も人間的に成長する

～子どもの内面に働きかける子育て意識～

前節では、保護者のかかわり方を子どもがどのように受け止めているかが、子どもの内面に大きく影響していることを確かめた。

では、その受け止め方は、実際に保護者の意識やかかわり方と一致しているのだろうか。また、どのような子育て意識や「しつけ」スタイルで子どもにかかわることが子どもの内面を育み、豊かな人間性を育むことになるのだろうか。保護者の思いや意識を軸に探っていくことにした。

(1) 「分からない」という不安

第1章第2節第3項の<育まれる内面>では、子どもの内面形成のようすを見た。つづいて<わが子を見る目>では、保護者が子どもの内面をどのように把握しているのかを見た。保護者が子どもに接するとき、その子どもの内面をよく知った上で関わっていくことが必要であるが、この両者のとらえ方に整合性やズレはあるのだろうか。また、保護者による子どもの内面のとらえ方は、家庭教育にどういった影響を及ぼしているのだろうか。クロス集計で確かめていくことにする。

対人関係は見えにくい

まず、保護者が子どもの自己意識をどのようにとらえているかと子どもの実感とを比較したものが図2-20、図2-21である。

図2-20 肯定感の比較

子Q17「自分の好きなところはあるか」

×保Q9「子どもは自信をもって取り組む面があるか」%

| | | たくさんある | 少しある | あまりない | ぜんぜんない |
|-----|-------|--------|------|-------|--------|
| 309 | とてもある | 23 | 41 | 22 | 14 |
| 596 | 少しある | 14 | 39 | 27 | 20 |
| 8 | ない | 14 | 38 | 25 | 24 |
| 12 | 分からない | 8 | 50 | 17 | 25 |

図2-21 受容感の比較

子Q18「自分を好きだという友だちはいるか」

×保Q9「友だちから信頼され、好かれている面があるか」%

| | | たくさんいる | 少しいる | あまりいない | ぜんぜんいない |
|-----|-------|--------|------|--------|---------|
| 295 | とてもある | 32 | 44 | 16 | 8 |
| 563 | 少しある | 23 | 47 | 20 | 11 |
| 42 | ない | 21 | 36 | 21 | 21 |
| 107 | 分からない | 17 | 45 | 12 | 24 |

これを見ると、両者のとらえ方に関連性はあるものの、保護者が「子どもには自信をもっている面がとともある(309人)」や「友だちから好かれている面がとともある(295人)」と把握していても、子ども自身には「自分には好きなところはない(36%)」や「好いてくれる友だちはいない(24%)」と感じているなど、ズレも見られる。また、保護者が「自信がない(80人)」「友だちに好かれていない(42人)」ととらえている子どもの中には、自己の存在価値を高く感じている子どももいる。

次に、社会的資質に関して「共感性(援助)」「自己制御」について比較すると、図2-22、図2-23のようになる。

図2-22 共感性の比較

子Q22「荷物を運んでいる友だちを手伝うか(援助)」

×保Q9、オ「人をすすんで手助けする面があるか」%

| | | 自分から手伝う | たのまれたら手伝う | なにもしない |
|-----|-------|---------|-----------|--------|
| 303 | とともある | 81 | 16 | 2 |
| 549 | 少しある | 73 | 22 | 5 |
| 77 | ない | 61 | 38 | 3 |
| 66 | 分からない | 67 | 23 | 11 |

図2-23 自己制御の比較

子Q24「いやなことを言われたらどうするか」

×保Q9、カ「落ち着いて話をする面があるか」%

| | | やめると言う | 口言い返す | 叩いてやめさせる | なにもしない |
|-----|-------|--------|-------|----------|--------|
| 114 | とともある | 53 | 22 | 9 | 17 |
| 509 | 少しある | 49 | 26 | 9 | 19 |
| 287 | ない | 43 | 30 | 11 | 16 |
| 85 | 分からない | 48 | 27 | 4 | 20 |

共感性については、保護者のとらえ方と子ども自身の感じ方の傾向はほぼ一致しており、子どもの日ごろの行動から見て、その子どもが共感的な対人行動ができるかどうかは保護者にとって判断しやすいことなのと思われる。しかし、一部には、保護者が「すすんで手伝う面はない」と見ている子どもの中の半数は「自分から手伝う」と答えている、というとらえ方の違いも見られる。また、自己制御できる面があるかどうかについても両者のとらえ方にはほぼ正の相関関係があるが、保護者が「落ち着いて話ができる子ども」ととらえていても、その中の1割は「叩いてやめさせる」と答えた子どもである。

こうして、子どもの内面の実態と、その子どもをどうとらえているかという保護者の認識を関連させてみると、いわゆる「子どものことなのだから、内面はよく分かっている」といえる傾向にはあるのだが、中には認識不足や理解不十分である保護者、また、「(よい面が)ない」と否定的な見方をしている保護者もいるようである。とりわけ、「友だちからの受容」「友だちとのトラブル対処」については「分からない」とする保護者がおよそ1割になる。(回答数約1,000名に対して)子どもが家庭の外で人に対してどのような態度をしているのかが十分に把握できないているのだろう。

かかわり方が分からない

また、このように子どもの内面を否定的にとらえたり認識できないでいたりする一部の保護者には、子育てに関して悩みをかかえている人の割合が高いことも明らかになった。保護者への設問保Q17:「子育てのことで困っていることや悩んでいることはあるか(何か)」に対して「ある」と答えた人が41%、「とくにない」と答えた人は59%だったが、子どもの内面について「ない」「分からない」と回答した保護者には表2-2のように、子育ての悩みをもつ人の割合が高いのである。

表2-2

保Q17:「子育ての悩みが「ある」

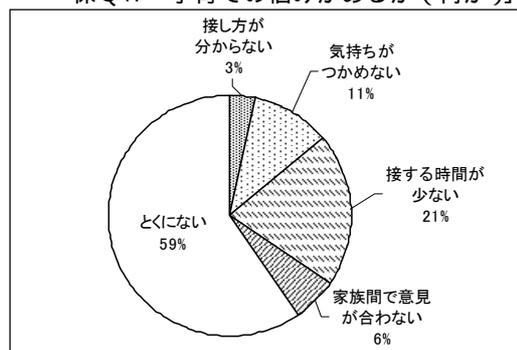
×保Q9:「子どもの内面のとらえ方

| 保Q9: 次のような内面があるか | 「ない」「分からない」(人) | そのうち、悩みが「ある」人の割合(%) |
|------------------|----------------|---------------------|
| ア) 自分に自信をもっている | 92 | 58 |
| イ) 友だちから好かれている | 149 | 58 |
| ウ) 粘り強く取り組む | 344 | 51 |
| エ) 人の世話が好き | 137 | 50 |
| オ) すすんで人を助ける | 143 | 50 |
| カ) 人と違っても落ち着いている | 372 | 49 |
| キ) すぐに人と親しくなる | 280 | 46 |
| 全体 | 996 | 41 |

一方、保護者が子育てに対してどのような悩みをもっているのかをきいた設問保Q17:「子育ての悩み」の回答結果が図2-24である。

図2-24

保Q17「子育ての悩みがあるか(何か)」



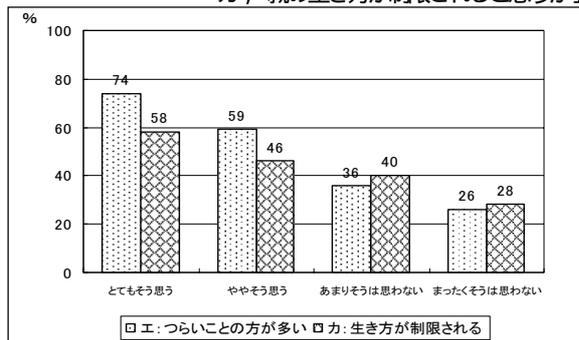
グラフが示すように、「接し方が分からない」「気持ちがあかぬ」「といった子どもへのかかわり方に悩みをもっている保護者が14%、「接する時間が少ない」「家族間で意見が合わない」といった生活スタイルの中に悩みがあるという保護者が27%となった。

ここまで見てきたことから、保護者の中には、子どもの内面が理解できずに子どもにどうかかわっているのか分からない人、逆に、接する時間が少なくて子どもの内面を理解できない人、また、子どもの否定的な自己意識に気づかなかつたりしつけの意見が合わなかつたりして適切なかわりができていない人がいることが推察できるのである。

マイナスイメージは子どもに伝わる

このような状況にある保護者の子育て意識は、どういったものなのだろうか。子育ての悩みの有無と「子育て意識」との関連性を見たものが次の図2-25である。

図2-25 保Q17「子育ての悩み」が「ある」
×保Q14,エ「子育てはつらいことが多いと思うか」
カ、「親の生き方が制限されると思うか」



この図で分かるように、子育てに対して「つらいことが多いもの」「親の生き方を制限するもの」という思いの強い保護者ほど、子育てに関する悩みをもっている。「つらさ」「生き方の制限」という二つの否定的イメージは、自らの子育ての悩みが根拠となつてつくられているのであろう。「子どもがあかぬ」「接し方が分からない」「時間がない」などの悩みをもつ保護者は、そのことを子育てのつらさと感じ、自分の生き方を制限するものとして窮屈さや苦痛を感じているのではないだろうか。

このような否定的な子育てイメージをもった保護者のかかわり方を、子どもたちはどのように受け止めているだろうか。保護者のもつマイナスイメージと子どもへの設問 子Q14: 保護者にしてもらふこと との関連性を見たものが図2-26、子Q15: 保護者への不満 との関連性を見たも

のが図2-27である。

図2-26
子Q14「保護者にしてもらふこと」
×保Q14,エ「子育てはつらいことが多いと思うか」

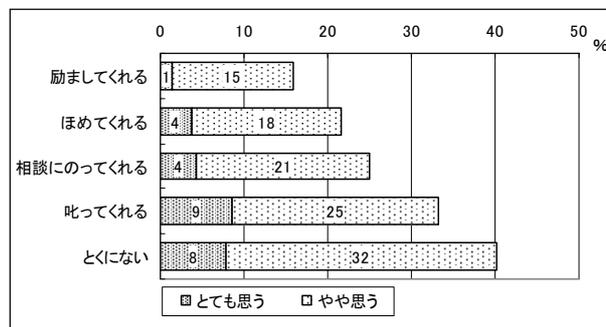
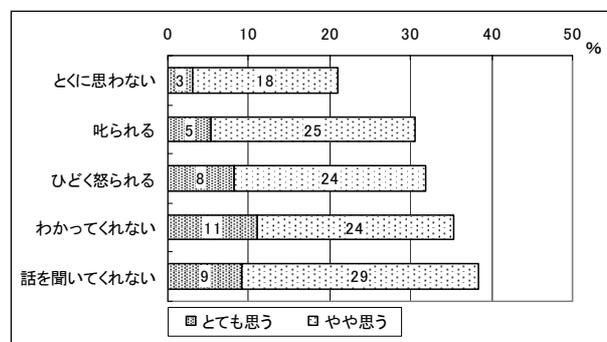


図2-27
子Q15「保護者に対して思うこと(不満)」
×保Q14,カ「子育てで親の生き方が制限されると思うか」

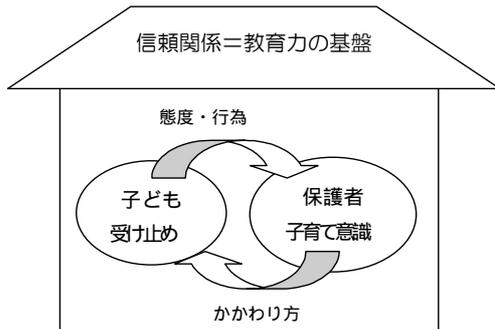


家の人にしてもらっていることを「叱ってくれる」「とくにない」と受け止めている子どもの保護者には、「子育ては楽しいよりもつらいことの方が多い」と思う人がそれぞれ34%、40%を占めている。また、保護者に対する不満は「とくに思わない」という子どもの保護者には、子育てに対するマイナスイメージをもつ人は少ないが(21%)、「分かってくれない」「話を聞いてくれない」と、自分を理解してもらえない不満を感じている子どもの保護者には、子育てに否定的な意識をもつ人の割合が35%~38%と高くなる。子育ては「つらいもの」「生き方を制限するもの」という保護者の意識は子どもへの接し方となって伝わり、子どもの不安や不満を生み出しているといえる。

本項で見てきたように、保護者が、子どもの内面を否定的にとらえていたり、十分に理解できていなかったりして子育てに悩みをもつことが、保護者自身の子育てイメージを低下させているといえる。そういったマイナスイメージをもって子どもに接することが、そのまま子どもの保護者への不安や不満を生み出しているようである。保護者の「つらさ」が子どもに態度となって伝わり、子

どもの否定的な受け止め方に表れているといえるだろう。前節で見たように、このことが子どもの自己意識を低め、社会的資質の育成を阻むものとなり、家庭の教育力が十分に機能しない要因となっているのではないだろうか。家庭での保護者と子どもの信頼関係は、保護者が子育てをどのようなイメージでとらえているかに左右されるものだといえるのである。(図2-28)

図2-28 家庭での信頼関係



(2) 子どもと向き合う

前項では、保護者の子育て意識が、子どもの保護者のかかわり方をどう受け止めるかに強く影響することを明らかにした。ここでは、保護者の子育て意識が子どもの内面形成に直接働きかけていることを検証することで、子どもの自己意識や社会的資質を高めていくために課題となることを明らかにしたい。

分析するにあたって、設問 保Q17：子育ての悩み の選択肢を次表2-3のように三つのカテゴリに分けた。保護者の悩みが何についてのものかによって、子どもへの接し方に違いがあると思われるからである。

表2-3

保Q17:子育てのことで困っていることや悩んでいることがあるか(何か)

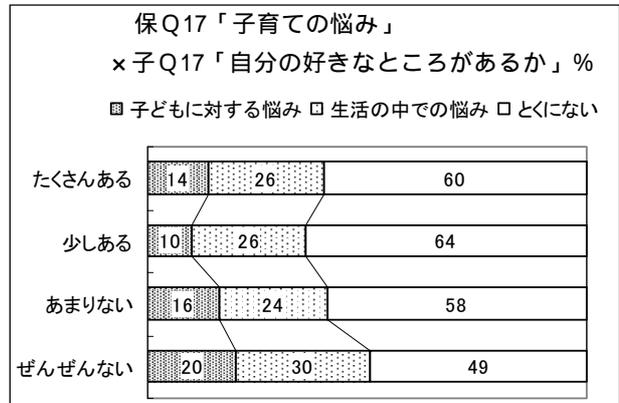
| 選択肢のカテゴリ | 選択肢 |
|--------------|----------------------|
| 子どもに対する悩みがある | 1. 子どもへの接し方が分からない |
| | 2. 子どもに対して愛情がもてない |
| | 3. 子どもの気持ちがあつかめない |
| 生活の中に悩みがある | 4. 子どもに接する時間が少ない |
| | 5. 家族の間で、子育ての意見が合わない |
| とくにない | 6. とくにない |

子どもの内面に及ぶ親のつらさ

まず、この子育ての悩みのカテゴリと子どもの肯定感との関連性を見た。(図2-29)自分の存在に自信を感じている子どもの保護者には、子育ての悩みをもつ人の割合はおよそ40%だが、自分には好きなところがある「ぜんぜんない」という子ども

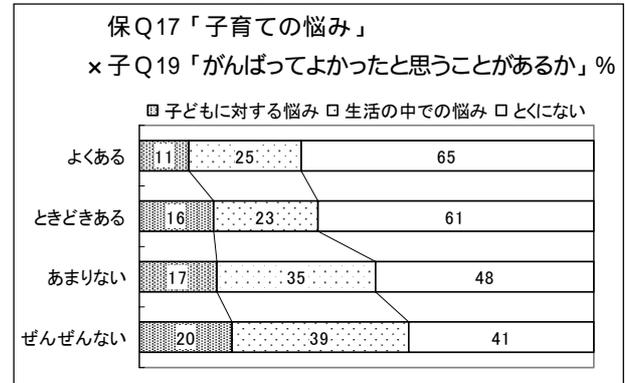
の保護者の半数(50%)は何らかの悩みをもっており、子どもの「肯定感」と保護者の子育て意識には関連性があることがうかがえる。

図2-29 子育て意識(悩み)と子どもの肯定感



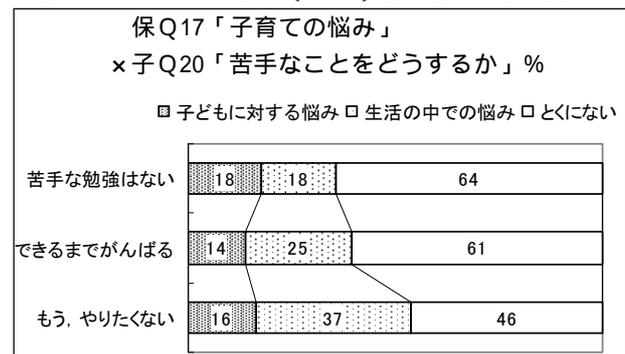
次に子どもの「効力感」との関連性を見ると、肯定感以上に強く保護者の悩みと関連していることが分かる。(図2-30)がんばってよかったと思うことが「よくある」という子どもの保護者の中では悩みをもつ人の割合は36%だが、効力感を感じることが「ぜんぜんない」という子どもの保護者では、その59%が子育てに悩みを感じているのである。

図2-30 子育て意識(悩み)と子どもの効力感



そして、子どもがものごとに向き合いに取り組んでいくために必要な「有能感」と保護者の意識との間にも、強い関連性がある。(図2-31)

図2-31 子育て意識(悩み)と子どもの有能感



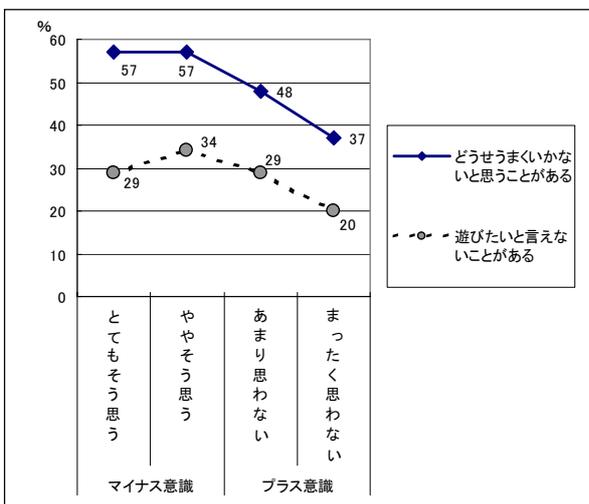
苦手なことは「もう、やりたくない」と考える子どもの保護者で、子育ての悩みをもつ人の割合は53%になり、「できるまでがんばる」という子どもの保護者に比べると高い割合となる。ここでも、子どもの有能感のあり方に、「悩み」を抱えている保護者の子育て意識が直接影響しているように思える。

以上の分析から、保護者が子育てに対してマイナス意識をもって接することは、子どもの自己意識にマイナスに働きかけることになり、子どもは自分の存在価値や能力についての評価を落としてしまう、といえるのである。

このような子どもに対する悩みをもつ保護者、すなわち子育てを「つらい」ものにとらえている保護者が子どもに接することは、子どもの内面にどのような影響を及ぼしているのかが心配される。なぜなら、図2-32で示すように、子育ては「つらいもの」と思うマイナスイメージの強い保護者の子どもほど、「がんばっても、どうせうまくいかない」と無力感を感じる子どもや、「遊びたいと言いつい出せない」で自分の思いが伝えられない子どもである割合が高いからである。

図2-32

子Q21 どうせうまくいかないと思うことがある
 子Q5 遊びたいと言えないことがある
 ×保Q14, エ「子育てはつらいことの方が多いと思うか」



このように分析をすすめていくと、子どもの自己意識や社会的資質（対人スキル）の形成は保護者の子育て意識に連動していることが明白であり、子どもの内面を高めていくための手がかりになるものは、保護者の「子育て意識」や「しつけ意識」の持ち方にあるということがいえるのである。つまり、家庭の中で子どもの豊かな人間性を育てるためには、保護者自身の子育て意識の持ち方が重要

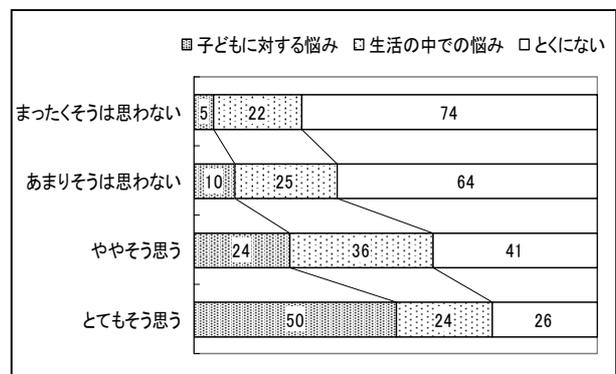
であり、それが家庭の教育力といわれるそのものなのである。保護者がポジティブな子育て意識をもち、子どもの内面を見据えたしつけや子育てのスタイルを築いていくことが家庭の教育力を向上させることになる。それが家庭教育における課題であるといえるだろう。

「知らない」ことがつらさになる

子育てに関して悩みをもつ保護者にとって、子育てそのものは決して「楽しいこと」ばかりではなく、「つらいこと」もあると感じているだろう。子育てに対して悩みをもつことは下の図2-33でも明らかのように、子育てそのものに対するイメージを「つらいことのほうが多い」と否定的にしてしまう。しかも、「とてもそう思う」とマイナスイメージの強い保護者には、子どもに対する悩みをもつ人が50%にもなり、子育てイメージの低下に伴ってその割合が倍増している。保護者が子育てを「つらいもの」と感じている主な要因には「接し方が分からない」「気持ちがつかめない」という子どもに対する悩みなのである。

図2-33

保Q17「子育ての悩み」
 ×保Q14, エ「子育てはつらいことの方が多いと思うか」%



前項で見たように、保護者が子育てに関する悩みをもつ背景には「子どもが分からない」ことがあった。(表2-2, 図2-24, P.25)

保護者が悩みや不安を抱くのは、子どもについて「分からない」ことや「知らない」ことが起因している。このことは次に挙げる図2-34からも読み取ることができる。この図は、保護者が、子どもの学校生活のようすを認知しているかどうかをたずねた設問 保Q20, ウ：子どもの授業態度 エ：子どもが親しくしている友だち オ：子どもの休み時間のすごし方を、どの程度知っているかに対して「よく知っている」と回答した保護者と「知らない」と回答した保護者の「悩み」の有無を見たものである。

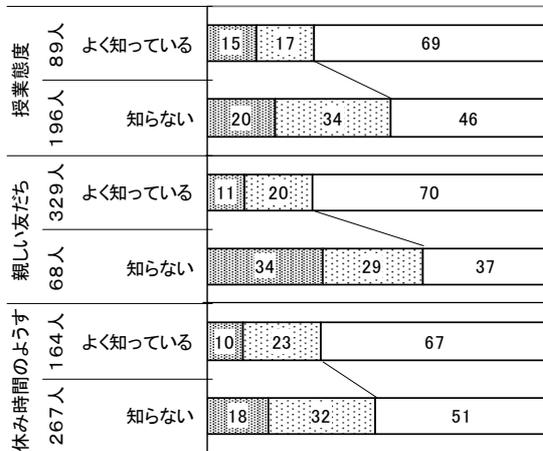
図2 - 34 こどもについて『知る』こと

保Q17「子育ての悩み」

× 保Q20「子どもについての認知度」 %

ウ：授業態度 エ：親しい友だち オ：休み時間のようす

■ かかわり方の悩み □ 生活の中の悩み □ 悩みはない



このように、学校での三つの場面について「よく知っている」という保護者には、「知らない」という保護者に比べて「悩み」をもつ人の割合は小さくなる。言い換えれば、子どもの学校生活についての認知度が高い保護者ほど悩みや不安を感じていない、という傾向があるのである。

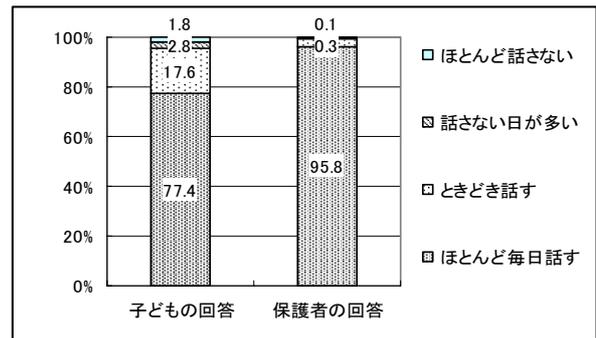
また、この図からは「知らない」という保護者が主に何について悩んでいるのかをうかがうこともできる。子どもの授業態度を「知らない」保護者は「生活の中」に主な悩みがあり、授業参観に行くための時間をつくることもままならないのではないかと。子どもの友達関係を「知らない」保護者にとっては「子どもへのかかわり方」が主な悩みで、人間関係を把握できないことが、その子の内面も知り得ないことにつながっていないだろうか。このような「知らない」状況は、子どもとのコミュニケーションのとり方で改善できるのではないだろうか。家庭での会話のようすに注目してみたい。

そして、子どもの内面に届く家庭教育のスタイルを構築していく鍵となるものとは、具体的には家庭生活の中のどのようなことなのかを探ることにする。

会話で築く親子の信頼関係

始めに、保護者と子どもがそれぞれに感じている会話の量であるが、両者の認識には少しズレがあるようだ。子どもへの設問 子Q9：家の人との会話 と保護者への設問 保Q6：子どもとの会話 に対する回答はそれぞれ図2 - 35 のようになった。

図2 - 35 家庭での会話量 (無回答、不明を除く)

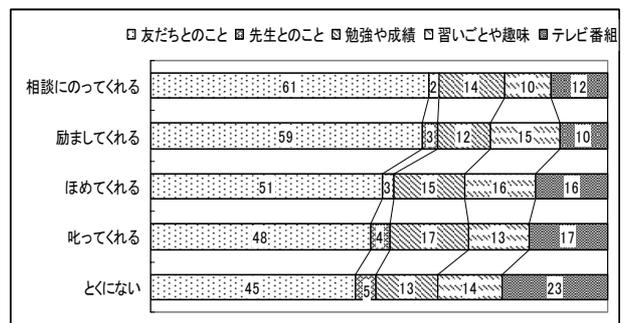


保護者のほとんど(95.8%)が「ほとんど毎日」話していると回答しているが、子どもの方は77.4%と大きく下回る。保護者が思うほどには「話していない」といえるだろう。このズレはなにかからくるものかを探るために、子どもが「話す」と、保護者のかかわり方をどう受け止めているかとの関連性を見た。(図2 - 36, 図2 - 37)

図2 - 36 は、「話題」と「保護者にしてもらうこと」とのクロス集計である。保護者とのふれあいに精神的な支えを感じている子どもたちは「友だちのこと」を話している割合が高いが、保護者を「叱ってくれる人」とくに何もしてくれない」と受け止めている子どもの話題は「友だちのこと」は少なくなり「テレビ番組など」が増えている。子どもたちが家の人に聞いてほしいことは、何よりも自分の思いや考えであろう。子どもは「友だちの」かかわりの中で生まれた喜びや悩みを「話す」ことで、受容感を得ているのではないだろうか。子どもにとって「話す」とは、言葉を交わすだけでなく自分の思いを伝えるということなのだ。

図2 - 36 子Q11「家の人とよく話すこと(話題)」

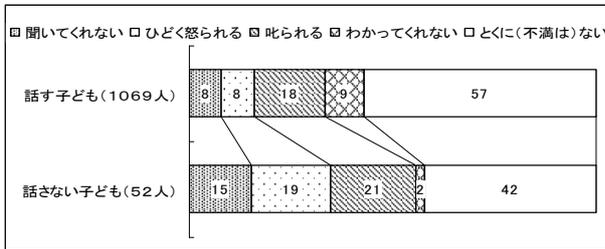
× 子Q14「してもらっていること」%



さらに「話す」と、子どもが保護者に感じる不満とのクロス集計である図2 - 37 では、「話さない」子どもが、「話す」子どもに比べて保護者への不満を感じる割合が大きくなることが分かる。ここでも、子どもが保護者との会話を通じて受容感を得ていることがうかがえる。子どもの「話

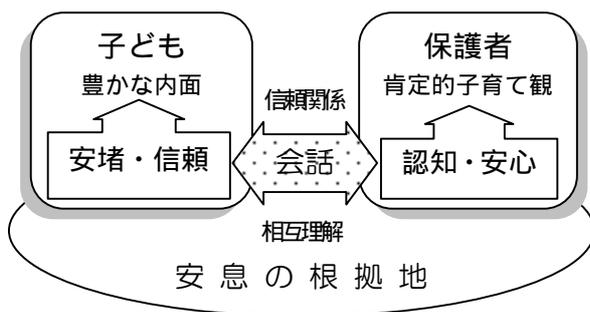
す(聞いてもらっている)には心のよりどころとしてのコミュニケーションの意味があり、保護者の「話している」とには認識のズレがあるのかもしれない。

図2-37 子Q15「保護者に感じる不満」
×子Q9「毎日の会話量」%



このように探っていくと、家庭の中で信頼関係を築いていくために最も重要なことは「会話」であることが歴然としてくる。保護者の子育てで不安が「分からない」「知らない」ことからくるものならば、子どもの話から、学校生活や友達関係のようすを注意深く聞きとり、子どもの考えや行動から内面を見つめることが必要だろう。また、家庭が子どもの精神的な安らぎの場となるためには、子どもの思いに耳を傾ける受容的な聞き手が必要である。時には共感し、時には励まし、時には諭してくれる保護者の存在こそが子どもにとっての「安息の根拠地」といえるだろう。子どもと向き合うことは、保護者の「子どもを見る目」を育て、同時に子どもの内面に働きかけることになるのである。(図2-38)

図2-38 安息の根拠地



子どもが成長する過程には、親にとって困難な問題や悩みが生まれることもある。が、その度に「子育てをすることで親も人間的に成長する」と前向きにとらえていこうとする姿勢が、ひいては子どもの心に響き、子どもの人間形成に働きかけていくのである。家庭の教育力とは、子どもの「今」を知り、子どもの「これから」を見据えたかわり方をすることで子どもの内面に働きかけていく、保護者のポジティブな意識のことなのではないだろうか。

第3章 子どもを見守る二つのまなざし

第1章第1節で述べたように(P. 2)、家庭の教育力を問うことは学校や社会の教育力を問うことでもあり、家庭教育が取り組むべき課題は学校教育の課題ともいえる。前章では、家庭の教育力の現状と課題を明らかにしてきたが、同時に学校が家庭とともに取り組んでいかなければならない課題を明確にしたことになる。つまり、子どもの自己意識や社会的資質などの内面を高めることは、家庭のみならず学校教育の目標ともいえるのである。

本章では、こうした共通の目的をもつ学校が、子どもの豊かな人間性を育むために家庭とどのように連携・協力していくことができるのかを探っていくことにする。それが、学校と家庭の「二つのまなざし」で子どもを見守り育むことになると思われるからである。

第1節 学級に求められる家庭の機能

～教室の中の子どもたち～

ここでは、子どもたちの学びに対する思いや態度の実態と子どもの内面との関連性を探ることを通して、学校教育で子どもの人間性を育てていくための課題を明らかにする。

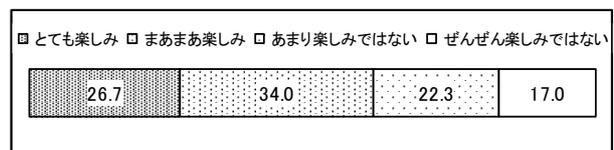
(1)「参観日は楽しみですか」

保護者が学校の教育活動に参加する理由にはいくつがあるが、最も多いのは「子どものようすが知りたいから」保Q19 というものである。各学校ではそういった保護者の希望に添いつつ、学校からの活動公開・情報発信として授業参観の機会を設けている。

生き生きと学ぶ自分を見てほしい

では、機会の増加した授業公開で、学習に向かう自分のようすを見つめられることの多くなった子どもたちは、学校での学びに対してどのように感じているだろうか。設問 子Q30：授業参観日はどのくらい楽しみなことか に対して子どもたちは図3-1のように回答した。

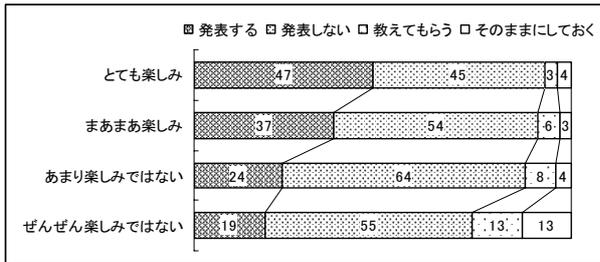
図3-1 授業参観日は楽しみか(%)



このように、過半数の子どもが授業参観を「楽しみなこと」ととらえているが、「楽しみではない」

という子ども、中でも「ぜんぜん楽しみではない」と感じている子どもが17%いる。実は、この思いは子どもの学習態度と強い関連性があるのである。このことは授業参観日に対する思い 子Q30と、学習中の自分の態度をきいた設問 子Q25：教室で学習しているときの自分のようすとをクロス集計してみることで明らかになった。(図3-2)

図3-2 子Q25「教室での学習態度」
×子Q30「授業参観日は楽しみか」 %

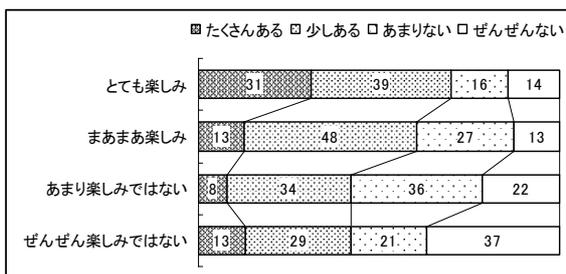


上の図が示すように、授業参観日を「楽しみではない」と思っている子どもほど、教室の授業では「発表しない」「学習内容が分からない」「内容が分からなくても教えてもらわない」子どもの割合が高くなる。授業参観日を「楽しみではない」という気持ちは、学習内容が分からなかったり分かっても発表しなかったりする自分のすがたを保護者やたくさんの人に見つめられたくないという気持ちを表しているのではないのだろうか。つまり、積極的に学びに向かえない自分、すすんで問題解決学習に参加できない自分に、子ども自身も心地悪さを感じているのではないかと思われるのである。

このように子どもの思いを推察していくと、子どもにも、子どもなりの「学びに向かう望ましいすがた」があり、「学習内容を理解し、すすんで発表する生き生きとした自分」を保護者に見てほしいと願っていることが伝わってくる。

次の図3-3は、授業参観日に対する思いと設問 子Q27：自分の好きなところ（肯定感）の関連性を見たものである。

図3-3 子Q17「自分の好きなところ（肯定感）」
×子Q30「授業参観日は楽しみか」 %



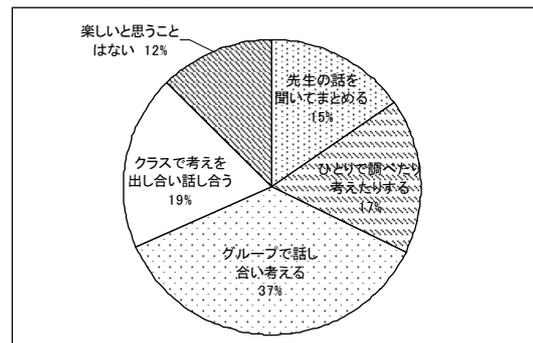
参観日は「楽しみではない」子どもの肯定感は低く、自分に自信をもてない傾向が見られる。保護者に自分の生き生きとした学びに向かうすがたを見せられないと考える子どもは、自己の存在価値を高められないのではないだろうか。だとすれば、教室での学び（授業）で子どもの自己意識を上げていくことができるのではないかと思われる。

分かる楽しさ、発表する楽しさが自己意識を高める

では、子どもたちの自己意識を高められるような授業とはどのようなものなのだろうか。子どもたちが楽しいと感じる学習と、子どもたち自身の学習態度との関連性から探っていくことにする。

設問 子Q26 で、子どもに「楽しいと思う学習スタイル」をきいたにもかかわらず「楽しいと思うことはない」という選択肢を選んだ子どもが12%存在している。(図3-4)

図3-4 子Q26「一番楽しいと思う学習の仕方」



この、教室での学びの楽しさを感じていない子どもと、楽しいと感じる学習スタイルのある子どもとでは、自己意識のもち方にどのような違いがあるのだろうか。このことを知るために、設問 子Q26：楽しいと思う学習の仕方 と「肯定感」「受容感」との関連性を図3-5で、「効力感」「無力感」との関連性を図3-6で見てみた。

図3-5 子Q18「自分を好きな友だちがいる（受容感）」
子Q17「自分の好きなところがある（肯定感）」
×子Q26「楽しいと思う学習の仕方」

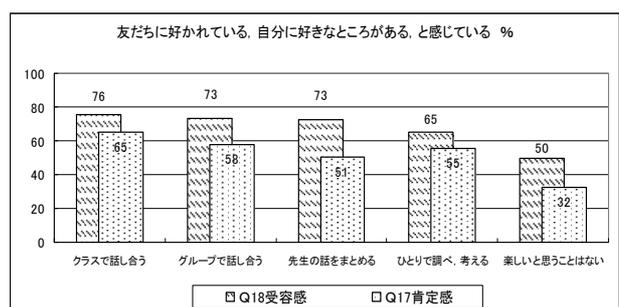
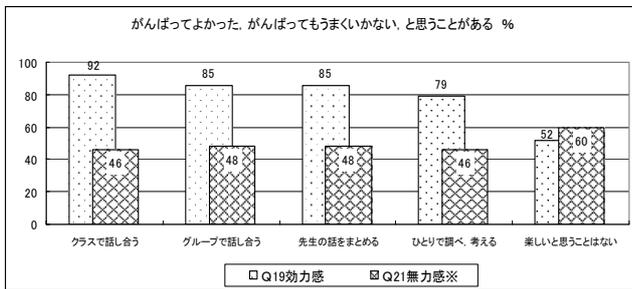


図3 - 6

子Q19「がんばってよかったと思うことがある(効力感)」
 子Q21「がんばってもうまくいかないと思うことがある(無力感)」
 ×子Q26「楽しいと思う学習の仕方」



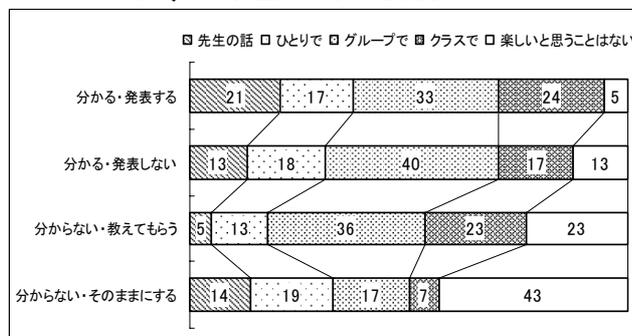
この二つの図からは、学習を「楽しいと思うことはない」という子どもは自己意識が低い傾向にあることが読み取れる。それは、肯定感を感じられていないこと(感じている子は32%)や無力感を感じるという割合が、効力感を感じている割合を上回っていることに顕著に表れている。やはり、子どもの自己意識は「楽しい授業」を通して育むことができるようである。

また、「先生の話聞いてまとめる」講義式の学習や「ひとりで調べたり考えたりする」学習の仕方よりも、グループやクラスで「考えや意見を出し合い話し合う」学習スタイルを楽しいと受け止める子どもには、自己意識の高い子どもの割合が大きい傾向があることが見て取れる。そこからは、子どもの肯定感や効力感を育むことに有効な学習スタイルは「集団解決学習」であることが推察できる。

そこで、これらのことをさらに詳しく見るために、設問 子Q26:楽しいと思う学習スタイル(子Q26) と設問 子Q25:教室での学習態度 との関連性を調べてみた。(図3 - 7)

図3 - 7

子Q26「楽しいと思う学習の仕方」
 ×子Q25「教室での学習態度」 %



この図からは「学習の楽しさ」についていくつかのことが見えてくる。

まず、「楽しいと思うことがない」子どもの割合

に注目すると、授業に対して「発表しない」「(分からないことを)そのままにする」と消極的な学習態度の子どもほどその割合が高くなることが分かる。学習内容が理解できず、答えを誰かにきくこともしない子どもに至っては、その43%もが「楽しいことはない」と解答している。つまり、子どもが生き生きと自ら学習に向かう態度は、学習の楽しさが作り出す態度であって、その学習の楽しさは「分かる」ことが大前提になっているといえるのである。それが、自分の力だけで理解したもので、先生や友だちに教えてもらったもので、である。

次に、「分かる」「(分からなくても)教えてもらう」という子どもが好む学習スタイルに注目すると、グループやクラスで考えを出して話し合う「集団解決学習」のスタイルを第一順位に選んでいるのが分かる。(57%, 59%) それに対して「分からない・そのままにする」子どもで集団解決学習を選んでいるのは24%にしかならず、むしろ先生の話聞いてまとめるひとりで考えたりする学習スタイルを好む子どもの割合の方が33%と高くなる。学習内容が理解できず、答えを聞くこともしないで自分の考えをもてずにいる子どもにとって、集団で考えを出し合う学習スタイルを楽しいとは感じられないのであろう。それよりも、友だちと交わらなくて済む学習スタイルに逃げ込んでいるのではないだろうか。

一方で、学習内容が理解できて「発表する」子どもは、「発表しない」子どもや「分からず教えてもらう」子どもよりも、先生の話聞いてまとめる学習方法を好む割合が高く(21%)なっている。自分の考えをすすんで出していこうとする積極的な学習態度の子どもと、集団解決学習を避け、学習の楽しさを感じないでいる子どもとでは「話を聞く」意味合いも異なっているだろう。「発表する」子どもたちで「話を聞く」というスタイルを選ぶ子どもは、受身の学習方法としてよりも学習内容を理解する方法として好んでいるのではないと思われる。

また、同じように集団解決学習のスタイルを好んでいても、自分の考えを発表できる子どもは発表しない子どもよりもクラス全体で話し合うスタイルを選ぶ割合が高くなっている。(17% 24%) 自分の意見を話し合いの場すすんで出そうとする子どもは、より大きな学習集団による問題解決学習を「楽しい」と感じる傾向があると考えられる。

以上のような分析から、子どもにとって「分か

る」学習方法や学習指導を構築し、問題解決に向かって思いのままに互いの考えを交えることのできる学習環境を作り出すことが、真に子どもにとっての楽しい授業であることが改めて明らかになったといえるだろう。そして、その中で、子どもの積極的な学習態度を育み、子どもの自己意識を高めることが、教室という「学びの場」に託されていることなのではないだろうか。(図3-8)

図3-8 学びの場で自己意識を高める



(2)「休み時間はだれとすごしますか」
～教室の人間関係～

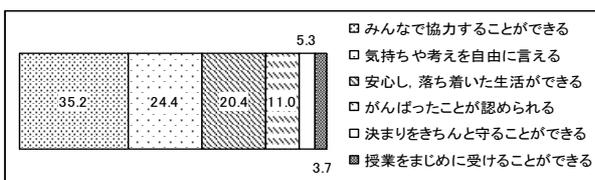
前項で明確になった学校教育の課題のひとつは子どもにとって真に「楽しい授業」を構築することであった。楽しさのひとつである「分かる授業」は教師の教材研究と教育技術によって実現されなければならないことだが、もう一つの楽しさである「考えを交わす学習集団」とはどのようにして育てることができるのだろうか。学習集団としての学級のあり方を考察してみなければならない。

学級に望むのは居心地のよさ

学びの場であると同時に生活の場でもある教室の中にはたくさんの人間関係が存在し、子どもたちの様々な思いが交錯している。前述の指定都市の調査によると、子どもが求める学級像として最も割合の高かった回答(第一順位回答)は「みんなで協力することができる学級」であった。(図3-9) 子どもたちは、いろいろな思いを相互に理解し合い、心をつなげて何かをやりとげていけるような学級でありたいと願っているのだろう。

図3-9

子どもの求める学級像 (%)



指定都市調査(平成13年10月実施)より作成

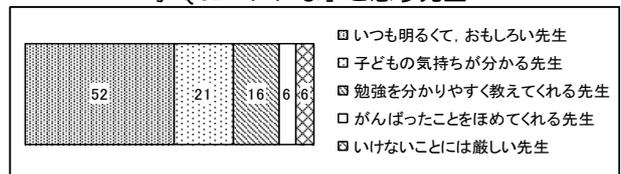
また同調査では、この回答結果を「子どもたち

は、授業をまじめに受けることができたり、決まりを守ることができたりするなどといった規範意識の高い学級を求める以上に、心の安らぎを感じることができる学級を求めていることが分かる」と分析している。「みんなで協力できる」「気持ちが自由に言える」「安心して落ち着ける」学級が子どもにとって心の安らげる学級なのであろう。同調査では、子どものおよそ8割がそう願っている。

今回行った京都市の調査では、子どもたちへ子Q32:「いいな」と思うのはどんな先生か 子どもたちが求める教師像についてきいてみた。(図3-10)

図3-10

子Q32「いいな」と思う先生



その結果、52%の子どもが「明るくておもしろい」先生を、21%の子どもが「気持ちが分かる」先生を「いいな」と思うと回答した。このように多くの子どもたちが、明るく楽しい雰囲気のある学級と、教師の共感的なかわりを望んでいる。

では、京都市の子どもたちは、自分の学級の居心地についてどのように感じているのだろうか。設問 子Q28: クラスのみんなと一緒にいるのは楽しいか に対しては、88%の子どもが「(とても、まあまあ)楽しい」と回答している。(図1-27: P.11) このように、大部分の子どもたちは学級集団の中で生活することを楽しいと思い、居心地のよさを感じているようである。

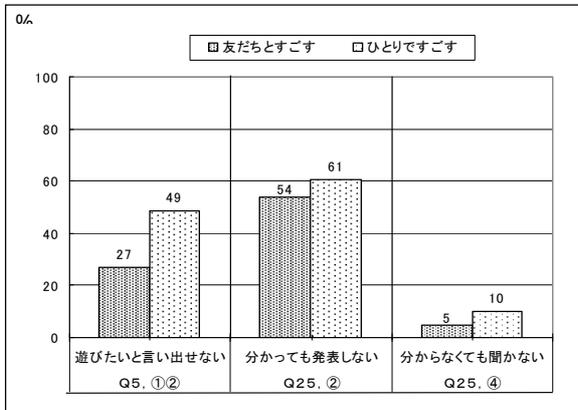
ひとりになりがちな子どもの自己意識

ところが、友だちと一緒にいる楽しさを感じながらも、設問 子Q18: 自分のことを好きだと思う友だちはいるか や設問 子Q5: 遊びたいのに言い出せないことがあるか に「自分を好き友だちはいない(31%)」や「遊びに入りたいのに言い出せないことがある(29%)」と回答する子どもが存在している。(図1-33:P.13, 図1-40:P.15) そして、およそ1割の子どもが実際に学校での友達関係をつくることができずに、休み時間を「ひとり」ですごしている。(図1-26:P.11)

この「ひとり」になりがちな子どもたちは、学級集団の中に自分が属しているときには楽しさや安心を感じていても、「みんなが協力できる」「考えを自由に言える」という「子どもが求める学級」の中の一員であるという実感がなくはないだ

ろうか。そのことをうかがわせるのが図3 - 11である。

図3 - 11 「ひとり」の子どもへの対人行動
 子Q5「遊びたいと言いつせないことがある」
 子Q25「教室での学習態度」
 ×子Q3「休みに時間に誰とすごしているか」



このグラフが示すように、学校の休み時間を「ひとり」ですごすことが多いという子どもは、遊びの場でも「言いつせない」し、学習の場でも「分かつても発表しない」または「分かつても聞かない」子どもになりがちである。つまり、休みに時間に「ひとり」ですごすことの多い子どもは消極的な対人行動をとってしまい、「みんなで何かに取り組める」「お互いの考えを自由に出し合える」学級を望みながら、そのことが自分自身にはできていないと感じているのではないかと思われるのだ。このような状況にある子どもの自己意識はどのような状態にあるのだろうか。

次に挙げる二つの図は、学校の休み時間に「友だちとすごす」ことの多い子ども(図3 - 12)と、「ひとり」でいることの多い子ども(図3 - 13)の自己意識を表したものである。自己意識にかかわる設問のそれぞれに対して「ある」と回答した子どもの割合をこの二つの図で比較すると、大きな違いがあることに気づく。

図3 - 12 「友だちと」すごす子どもの自己意識 %

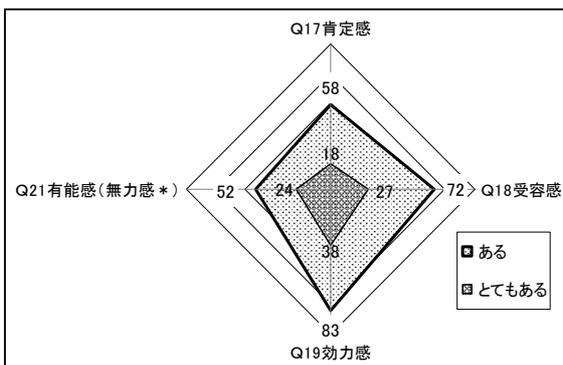
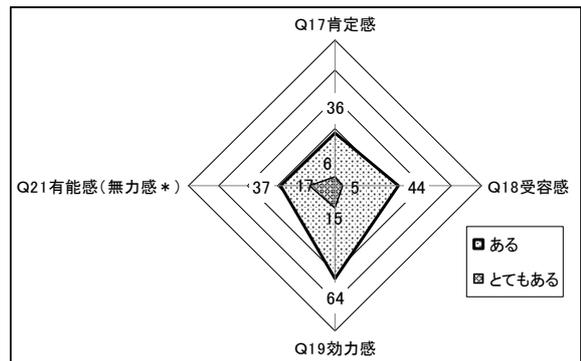


図3 - 13

「ひとりで」すごす子どもの自己意識 %



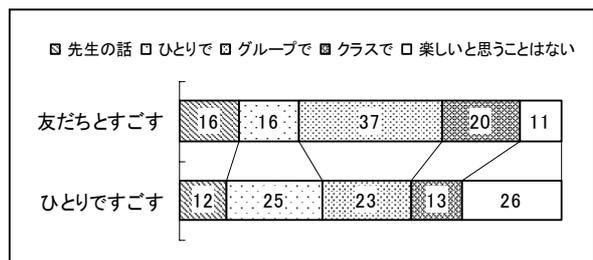
* Q21は「がんばってもどうせうまくいかない」という無力感をきいたものであるが、「がんばればなんとかなる」と考える有能感のリバースとしてとらえ、肯定的な回答(選択肢「あまりない」「ない」)を抽出したものである。

また、「ある」の割合を示す数字は肯定的な選択肢を選んだ子どもの割合を合計したものであり、その中で「とても」と強く意識している割合を図の中心に濃く示した。

自己の存在価値としての「肯定感」「受容感」、能力評価としての「効力感」「有能感」を見たとき、二つのグラフを見比べると、「ひとり」の子どもが「友だちとすごしている」子どもに比べて大きく落ち込んでいるのが「受容感(-28ポイント)」、「肯定感(-22ポイント)」である。また、「効力感」についても友だちとすごす子どもには「とてもある」と感じる子どもの割合が38%であったのに「ひとり」になりがちな子どもでは15%と、23ポイントも少なくなってしまう。友達関係をつくることができずに「ひとり」ですごしている子どもの中には、このように自己の存在や能力に自信をもてずにいる子どもたちが多くといえる。

このような自己意識をもち、積極的な対人行動をとることができない傾向の「ひとり」の子どもが、学習の楽しさを感じるができるだろうか。この子どもたちが設問 子Q26：楽しいと思う学習の仕方 に対してどのように回答しているかを見てみた。(図3 - 14)

図3 - 14 「ひとり」の子どもへの学習への思い
 子Q26「楽しいと思う学習の仕方」
 ×子Q3「休みに時間に誰とすごしているか」



この図を見ると、やはり、学級の中に休み時間を一緒に過ごすという友達関係をつくれていない「ひとり」の子どもは、学習を「楽しいと思うことはない」と感じている子どもである割合が高く(26%)、学習スタイルは、グループやクラスで取り組むよりもひとりで調べたり考えたりすることの方を好んでいる。ここでも、前項で見られたような、分からないことを人に教えてもらわず「そのまましておく」という消極的な学習態度の子どもと同様に、集団解決学習を避ける傾向があることがうかがえる。

このように、自分の思いや考えを伝えることが苦手な子どもたちは、友だちとの良好な人間関係をつくることができず、友だちと意見を交わして問題解決をしていく方法をもちにくいのではないかと考えられる。こうして、自分の望んでいるはずの学級像や自己像と現実の自分のすがたとのズレを感じている子どもたちが自己意識を低めてしまうのではないかとと思われる。

そこで、このことを手がかりとして子どもの自己意識を高める「楽しい授業」の条件である「互いの考えを交わすことのできる学習集団」の育成はどのようにすればよいのかを考えてみたい。

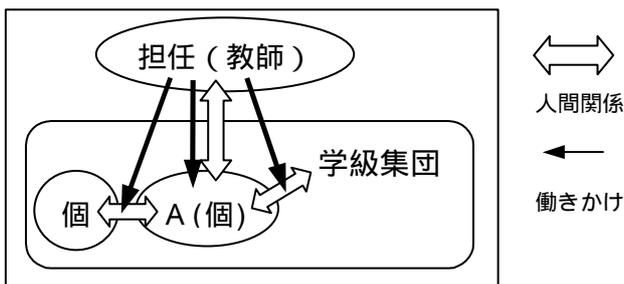
受容的・共感的な人間関係を育てる

本項で見てきた「ひとりになりがちな子ども」のように、良好な人間関係をつくるための対人スキルが十分に育っていない子どもは自己意識も低く、そのために「楽しい」と思える学習活動も積極的な対人行動もとりにくい、という悪循環を引き起こすことが危惧される。この繰り返しを止めて、子どもの自己意識を高めていけるような心地よい人間関係を教室の中に築いていくにはどのような働きかけが大切なのだろうか。

教室の中にある人間関係は図3-15のように、子ども対子ども、子ども対学級集団、子ども対担任(教師)が考えられる。そして、担任はAという子どもの内面を高めていくためにそれぞれの関係への働きかけをしていかなければならない。

図3-15

教室の人間関係



まず、個と個の人間関係に働きかけることを考えてみよう。次の図3-16は、設問 子Q18:自分を好きだと思っている友だちがいるか と 子Q28:クラスイメージ との関連性を見たものである。ここから分かるように、個と個の友達関係に受容感を感じている子どもほど学級集団を「楽しい」と思っていることが明らかである。そして、設問 子Q22:友だちを手伝うか とクラスイメージとの関連性を見た図3-17でも、「友だちを手伝う」と個への共感性をもつ子どもほど学級集団に対して「楽しい」と感じていることがうかがえる。このように学級の中の個と個の関係を受容的・共感的なものにしていくことで、個と集団の関係をも良好にすることができると考えられるのである。

図3-16 友だちからの受容感とクラスイメージ

子Q28「クラスのみみんなと一緒に楽しいか」

×子Q18「自分を好きだという友だちがいるか(受容感)」%

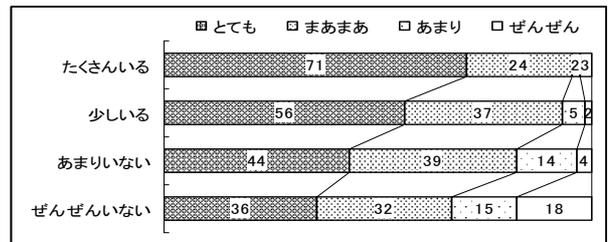
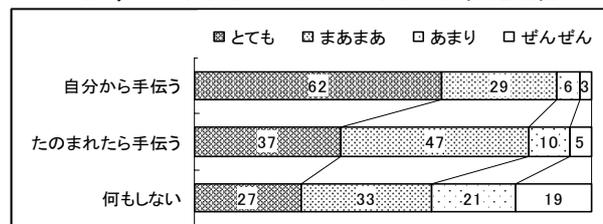


図3-17 友だちへの共感性とクラスイメージ

子Q28「クラスのみみんなと一緒に楽しいか」

×子Q22「荷物を持った友だちを手伝うか(共感性)」%

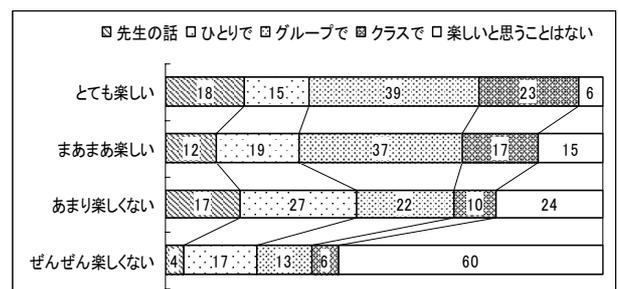


また、個と集団の关系到直接働きかけることもできるのではないかとと思われるのは、次の図3-18からである。

図3-18 クラスイメージと楽しいと思う学習スタイル

子Q26「楽しいと思う学習の仕方」

×子Q28「クラスのみみんなと一緒に楽しいか」



この図は設問 子Q26：楽しいと思う学習の仕方と子Q28：クラスのみなどという楽しさとの関連性を見たクロス集計であるが、ここからは、グループやクラス全体で学習することが学級の楽しさに強く関連していることが読み取れる。

前掲の図3-14(P.34)では「ひとり」の子どもは集団解決学習を避ける傾向があるようにも受け取れたが、この図3-18と合わせて考えると、学級を楽しいと感じられる良好な人間関係は、集団解決学習によってこそ育んでいけるものであることが明らかになってくる。共通の課題や疑問を解決するために、お互いの意見を交わし、みんなで練り上げながら、それぞれの考えを自覚したり認め合ったりすることが受容的・共感的な学習集団を育てることになる。

そういった学習集団をつくるのが、前出の図3-9(P.33)の、子どもの求めている学級像である「みんなで協力することができる」「気持ちや考えを自由に言える」「安心して生活できる」学級に近づくのではないだろうか。そして、その中の一員であることを感じる喜びが、子どもの自己意識の高まりを喚起するものになるといえるだろう。

取組への賞賛が自己意識を高める

さらに、担任から子ども一人ひとりに直接的な働きかけをすることによっても個々の子どもとの信頼関係を築き、その子どもの内面を高めていくことができる。

たとえば、次に挙げる二つの図からは、子どもが学級で割り当てられている当番や係の仕事を果たしていると思うことと「自分には好きなところがある」と肯定感を感じることは強い関連性があること(図3-19)、また、役割を果たしていることは「がんばってよかったと思うことがある」と子どもの効力感につながっていく傾向があること(図3-20)が読み取れる。

図3-19

子Q27「当番や係の仕事ができていますか」
×子Q17「自分の好きなところ(肯定感)」%

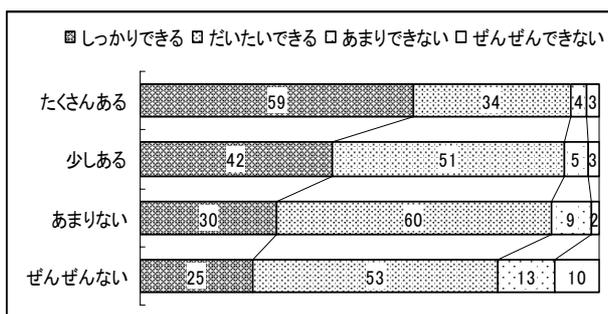
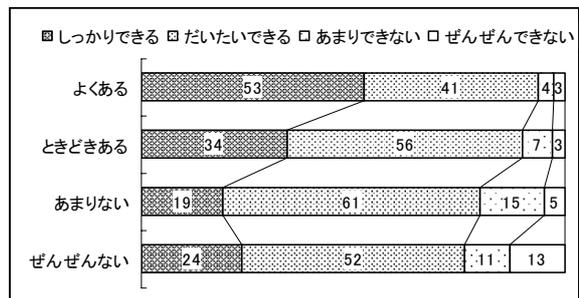


図3-20

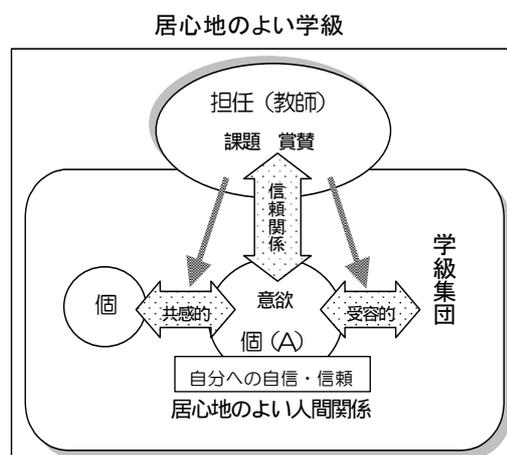
子Q27「係や当番の仕事ができていますか」
×子Q19「がんばってよかったと思うことがあるか(効力感)」%



ここから、個への課題がどのようにその子どもの自己意識に影響するかが推察できる。おそらく子どもは、自分の役目や課題を果たすことで感じる達成感や満足感によって自己の能力に対する自信を深め、自己の存在価値を高めていくのだろう。一人ひとりの能力や意識を考慮しつつ、子どもが「大変だったけど、がんばってよかった」と思えるような経験を学級生活の中に意図的に組み込むことは子どもの内面に直接働きかけることになるのである。もちろん、その取組の過程や結果において、担任や友だちからの賞賛や励ましを伴わなければ子どもの心にしみこむ経験とは成り難い。子どもの内面の成長を見通した課題を提示し、子どもの取組に対して人間味ある評価を与えていきたいものである。

本節で見てきた子どもの学級や担任への思いは考えてみると、家庭や保護者に対する思いに似ていないだろうか。子どもは「安息の根拠地」である家庭のような居心地のよさを学級にも求めているのである。(図3-21)そして、家庭が「人間形成の基盤を培う」機能をもつように、学級集団も学習や生活を通して子どもの内面を高めていく機能があるはずなのだ。

図3-21



第2節 保護者とともに

～家庭教育とつながる学校に～

前節では、教室での「楽しい授業」や「居心地のよい人間関係」が子どもの内面に働きかけ、自己意識を高めるものであることを確かめた。このような子どもへのかかわり方が学校教育の課題のひとつであるといえるのだが、学校と保護者との関係においても、子どもの内面に届いていくような保護者への働きかけができるのではないだろうか。

本節では、保護者の子育てや学校教育への思いを探ることで、学校と家庭との信頼関係を深め、保護者と「共にある」学校教育とは何かを考察していきたい。

(1)「クラスのことを知っていますか」

近年、「開かれた学校づくり」の取組の一環として、学校の教育活動を保護者や地域に公開し、また、企画・運営に参画してもらおうとする方針が打ち出された。その中で、授業公開（授業参観）の機会や期間を増やし、保護者に子どもの学習のようすを知ってもらおうとする学校が増加している。子どもの学ぶすがた、学習の内容、学習指導の仕方、学級の雰囲気など、保護者や地域の人々に公開することで、学校・学級の教育方針や教育活動の現状を理解してもらおうとするものである。はたして、そこで、保護者は子どものどのような学びのすがたを目にし、学校教育に対して何を思い期待するのだろうか。

信頼の根拠「学習理解」

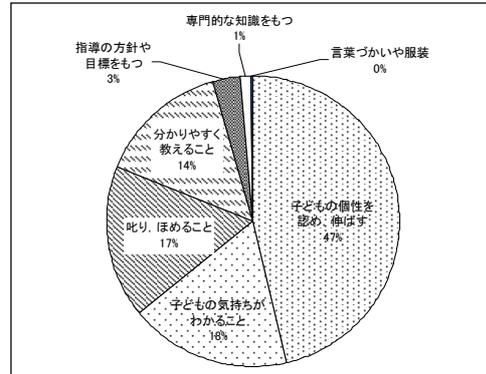
第1章第2節第1項(P.12)で示した図1-28では、保護者の役割分担意識として、学校の役割は「将来のために必要な学力をつける」ことと認識している保護者が81%となる。また、「豊かな個性や特技を伸ばす」ことが学校の役割だとする意識は16%であるが、家庭と学校との「どちらとも」と考える人は53%となっている。

一方、教師に求めたいものは何かをきいた設問保Q28:教師期待 では「子どもの個性を認め、伸ばす」「子どもの気持ちが分かる」と、子どもを理解してほしいという願いをもっている保護者が65%になり、次いで、「叱るときには叱り、ほめるときにはほめる」「学力に合わせて分かりやすく教える」と、生活指導・学習指導に対する期待が31%となった。(図3-23)

これらの回答結果から、保護者が学校教育の役割と意識していることは「学力をつける」ことであり、期待していることは「子どもを理解する」

ことであるといえるだろう。この二つの期待や願いに応えることが、学校教育に対する保護者の信頼を深めることにつながるといえる。

図3-22 保Q28「教師期待」



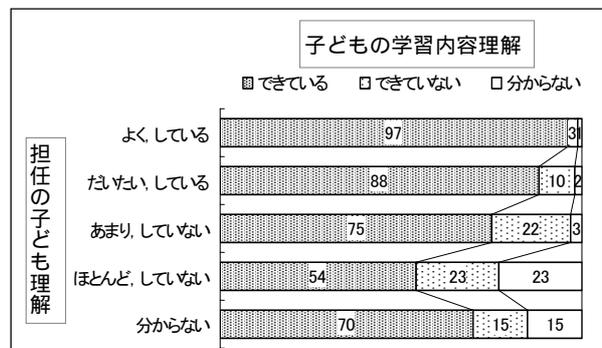
では、保護者は、学校がその役割を果たし、期待に応えていると受け止めているのだろうか。

先に第1章第2節第2項の図1-29, 図1-30(P.12)で示したように、「子どもは学習を理解していると思うか」や「担任は子どもを理解していると思うか」の設問に対して、かなり高い割合の保護者が「そう思う」と回答している。本調査は1学期末にさしかかった時点で実施したものが、新学年になって間もなくのこの時期に、こうした判断を保護者は何からしているのだろうか。考えられるのは、子どもとの会話や態度からの推測、家庭学習に取り組むようすや学校教育活動の公開時に直に目にした子どものすがたからの判断などを総括した思いなのであろう。また、「公教育」への信頼感からくるものなのかもしれない。

そこで、保護者からの信頼の根拠を探るために図3-24のように二つの設問 保Q21:子どもの学習理解 保Q22:担任の子ども理解 をクロス集計してみた。

図3-24

保Q21「子どもは学校の勉強が理解できているか」
×保Q22「担任は子どものことを理解していると思うか」%



すると、保護者にとって子どもが学習理解をしているかどうかの認識が、担任が子どもを理解し

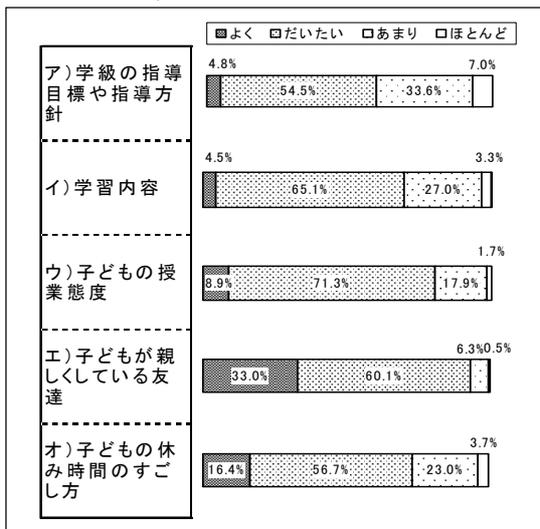
ているかどうかが大きく影響していることがうかがえた。つまり、多くの保護者にとっては、子どもが勉強を理解しているかどうか、担任の「子ども理解度」を判断する重要な要素となっているといえるのである。

しかし、同じこの図を見ると、このことに当てはまらない傾向の保護者も存在する。この、「子どもは学習を理解できていない」のに、「担任は子どもを理解している」と考えている保護者 67 人と、その逆で「子どもは学習を理解できている」のに、「担任は子どもを理解していない」と思う保護者 85 人に注目した。この保護者はそれぞれ全回答者数(998)の約 7%、約 9%ではあるが、保護者が担任を信頼する根拠となる重要な要素が明らかになるのではないかと思われたからである。

信頼の根拠「学級認知度」

そこで、信頼関係はまずお互いを知り、理解し合うことで成り立つものであることを考慮し、保護者が子どもの学級についてどのくらい認識しているのかを調べてみた。図 3 - 25 は設問 保 Q 20：子どもの学級のことをどの程度知っているかの回答結果である。これを見ると、子どもの友達関係や遊びのようすについての認知度の高さが目に付くが、これは直接子どもから話を聞くことも多いからだろう。それに対して認知度がやや低くなる項目は子どもの学習態度や学習内容、学級の指導方針など、主に担任からの情報提供や授業公開によって知ることのできるものである。

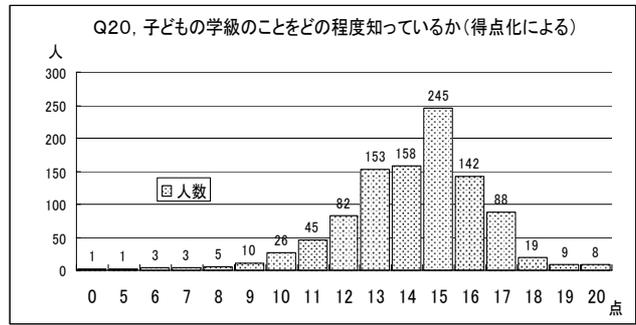
図 3 - 25 保 Q20「学級認知度」



また、この五つの項目に対する回答を点数化して合計したものを得点としてグラフに表したものが図 3 - 26 である。これによると、最も人数の多いのは認知度 15 点の保護者で 245 人となり、全体の約 25% を占めている。そして 13 点 ~ 16 点の保

護者が約 70% (698 人) を占めていることから、多くの保護者は学級のことを「だいたい知っている」といえるだろう。

図 3 - 26 保 Q20「学級認知度(得点化)」



* 5つの項目ア~オについての選択肢それぞれを、「よく知っている」4点、「だいたい知っている」3点、「あまり知らない」2点、「ほとんど知らない」1点、不明や無回答を0点として点数化した。

この「学級認知度」と「子どもの学習理解」、さらに設問 保 Q23：担任と相談や話し合いをすることがあるかを分析の視点に加えて、前述した 67 人と 85 人の保護者意識との関連性を見ることにした。(表 3 - 1)五つの項目に対してすべてに「よく知っている」場合は満点で 20 点となる。そして、すべてに「あまり知らない」と回答すれば合計 10 点、すべてに「だいたい知っている」と回答すれば合計 15 点となるため、この点数をボーダーとして層化分類を行い、「学級認知度」の 0 ~ 10 点を低認知群、11 点 ~ 15 点を中認知群、16 ~ 20 点を高認知群とした。

表 3 - 1 信頼関係に関連する要素

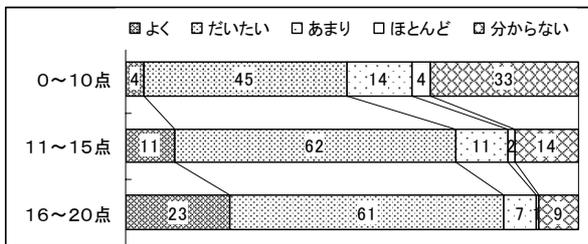
| | Q22 担任は子どもを理解していると思うか | Q21 子どもの学習理解 | Q23 担任と話し合うことが「ある」 | Q20 学級の認知度 | | | |
|--------------|-----------------------|--------------|--------------------|------------|-------|-------|-------|
| | | | | 0~10 | 11~15 | 16~20 | |
| A 理解していると思う | できていない | 67人 | 23人 | 34.3% | 9.0% | 70.1% | 20.9% |
| B 理解していないと思う | できている | 85人 | 19人 | 22.3% | 5.8% | 76.5% | 17.6% |

この表からは「子どもは学習が理解できていない」が「担任は子どもを理解している」とする A の保護者は、「子どもは学習が理解できている」が「担任は子どもを理解していない」とする B の保護者に比べると、担任と話し合う機会をもつ保護者である割合が高いのが分かる。(34.3% : 22.3%) また、学級認知度を見ても、B よりも A の保護者の方がやや高い傾向にある。ここからいえることは、子どもが「学習内容を理解する」ことは担任への信頼の裏づけとなるものではあるが、それ以上に、保護者と担任とが直接対話の機会をもつことや、学級の教育活動の目標や方法、活動内容や子どものようすについて保護者が「よく知る」こともまた、信頼関係を築くための要素となる、ということである。

それは、保護者の学級認知度と設問 保Q22：担任の子ども理解 とをクロス集計したもの（図3-27）からもうかがうことができる。

図3-27

保Q22「担任は子どもを理解していると思うか」
×保Q20「学級認知度（得点群）」 %



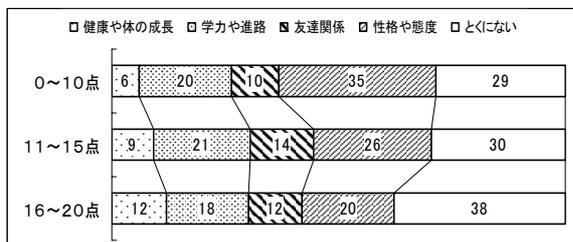
このように、学級についての認知度が高い保護者ほど、担任は「子どものことを理解している」と受け止めている傾向がある。保護者が担任を信頼する根拠には、子どもの学校生活や学習のようすをはじめ、担任を含めた学級のことを「よく知っている」ことが重要なのである。

家庭教育に参与する「学級認知度」

また、保護者の学級に関する認知度が子どものかかわり方に強く影響しているという側面もある。第2章第2節第2項(P.29)では、学級のことを「知らない」保護者は「よく知っている」保護者に比べて子育てに悩みをもつ人の割合が高かったが(図2-34),ここで示す図3-28からも、「知らない」(得点の低い)保護者ほど「子どもの性格や態度」を心配する人の割合が高くなり、「子ども理解」をしにくくなるようすがうかがえる。

図3-28

保Q16「子どものことで心配や悩みは何か」
×保Q20「学級認知度（得点化）」 %



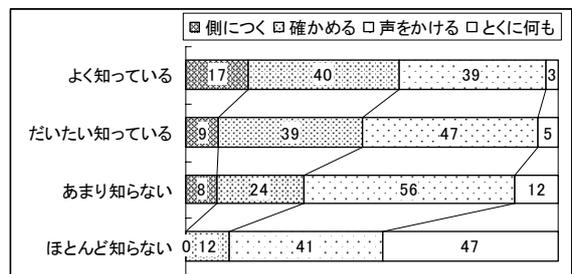
次いで示した図3-29のように、子どもの学習態度を「知らない」という保護者ほど家庭学習へのかかわり方が希薄であるという傾向もある。

これらのことから、保護者にとって子どもの学校でのようすや学級のことを「知ること」は、「子ども理解」を支えたり、子どもへの密なかかわり方を生み出したりする基になっているといえるのである。学校生活の認知度が高いことは、担任への信頼につながるばかりでなく家庭教育にも大き

く関与するといっていだろう。

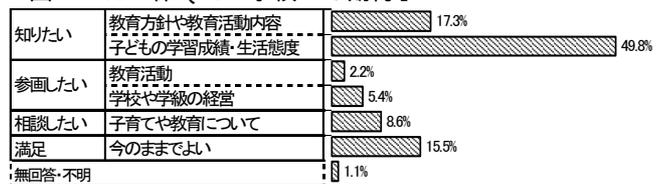
図3-29

保Q25「子どもの家庭学習へのかかわり方」
×保Q20,ウ「子どもの学習態度を知っているか」%



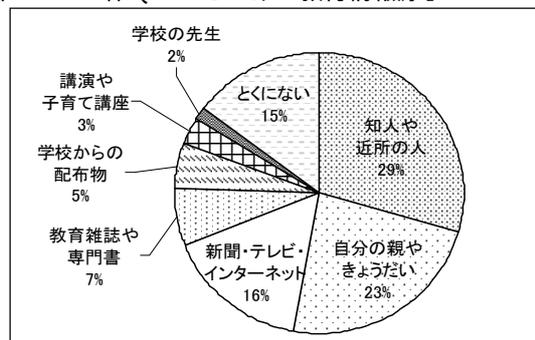
保護者への設問 保Q29：学校への期待 の回答(図3-30)を見ると、「子どものようす(学習成績・生活態度)を詳しく知りたい」(49.8%)や「教育方針や教育活動内容を詳しく知らせてほしい」(17.3%)と「知りたい」と願っている保護者は多い。学級や学校での子どものようすについて「知らない」保護者は「知りたくない」わけではない。学校からの情報発信の充実が期待されているのである。

図3-30 保Q29「学校への期待」



ところで、保護者は教育に関する情報をどのようにして得ているのだろうか。このことについてきいた設問 保Q15：しつけや教育に関する情報を主に何(誰)から得ているか に対しては、次の図3-31のような回答結果であった。

図3-31 保Q15「しつけ・教育情報源」



情報源としては主に「知人、友人、近所の人、身内」からが53%と過半数になり、「学校(配布物や講演・講座、先生)」からという保護者はわずかに10%にしかならない。つまり、教育情報は人づてに伝わっており、学校からダイレクトに受け取っているという保護者の割合は非常に小さいと

いえる。また、「書籍やマスメディア」から情報を得ている保護者が23%となっているが、子どもが直接に接している「学校教育」の現状を詳しく知る内容にはなっていない。設問 保Q20：学級認知度では教育方針や学習内容をよく知る保護者は少なかった。(図3-25, P.38)これは、学校からの発信が届いていないことを示しているのではないだろうか。保護者が最も関心をもっているのは目の前にいる子どもの学校生活そのものである。だとすれば、学校からの情報発信が保護者に届いていないことは、保護者が学校教育に関して「知らない」状態をつくってしまうのではないかと心配されるのである。

学校からの情報が、「(情報源は)とくにない」という15%の保護者(図3-31, P.39)にも届いていくような教育活動の公開や発信をしていくべきではないだろうか。

(2) パートナーシップを結ぶ

前項で述べたような学校からの「発信」は、学校が保護者との信頼関係を築く上で不可欠なことといえるが、さらに保護者には、教育活動に「参画したい(7.6%)」や子どものことを「相談したい(8.6%)」という願いもある。(図3-30, P.39)学校が、保護者のこうした思いを受け止め、共に子どもを育てていくという姿勢をもつことは学校教育への信頼を深め、パートナーシップを結ぶ上で当然のことであるといえる。

ところが、実際には学級懇談会に「参加しない」という保護者(保Q19：35%)や、担任と子どものことで相談したり話し合ったりすることが「ほとんどない」という保護者(保Q23：25%)が多い。このような保護者にとって、学校は子育ての「協力者」や「相談相手」にはなっていないというのだろうか。

孤立感がマイナス意識を強める

保護者の子育てに関するマイナス意識には、子育ては「楽しいことよりもつらいことの方が多(そう思う=25.7%)」「親の生き方が制限されるものだ(そう思う=37.8%)」という考え方があった。(保Q14)また、子どもに関する心配ごとのある人が68%(保Q16)、子育てに悩みのある人が41%(保Q17)という割合で存在している実態もあった。こうした思いでいる保護者が、子育てに関する悲観的な見方を転換したり解消したりすることはできないのだろうか。

実は、子育てについての悩みや、子育てのつらさを感じている保護者には、家族間で子育ての話

し合いをあまりしていないという傾向があることが分かった。(図3-32, 図3-33)

図3-32

保Q12「日ごろ、子育てについて家族と話すか」
×保Q17「子育てに関する悩みがあるか」%

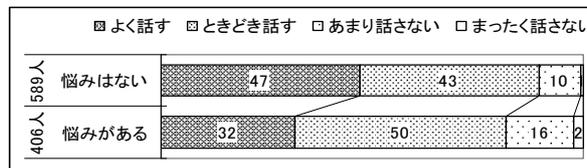
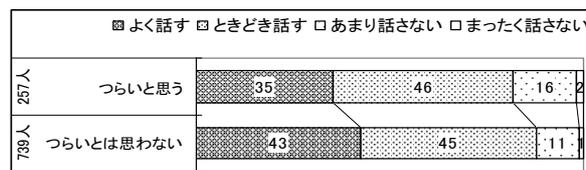


図3-33

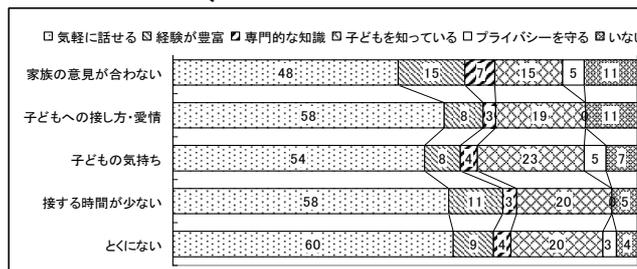
保Q12「日ごろ、子育てについて家族と話すか」
×保Q14, E「子育ては楽しいよりつらいことが多いと思うか」%



この二つの図からは悩みやつらさを感じる人は家庭の中で「話し合う」相手や機会の少ない人である傾向を読み取ることができる。今回の保護者調査では、回答者の94%が子どもの「母親」にあたる人であったが、ここからは今も、家庭教育の主な担い手は「母親」であるという意識が一般的なのではないかと推測できるが、家庭内での話し合いが「ない」状況は、母親の子育てにおける孤立が心配される。子育てに対する悩みやつらさを感じたときに、同じ子育ての担い手である家族と話し合い、家庭内で協力し合っている保護者は、子育てに対するマイナス意識を強くもつこともなく子どもの成長を見守ることができるのだろうが、自分にすべての責任がかかっていると感じるとき子育てに対する不安が生まれ、子どもへのかかわり方も悲観的になるのではないだろうか。

それでは、このような子育ての悩みをかかえた保護者は誰に相談して、安心したり見通しをもったりできているのだろうか。設問 保Q17：子育ての悩み と 保Q18：子育ての相談者 との関連性を見た。(図3-34)

図3-34 保Q18「子育ての相談はどんな人に行っているか」
×保Q17「子育ての悩み」%



子育てに関する悩みは「とくにない」という保護者には「気軽に話せる」人に子育ての相談をしている割合が、悩みのある保護者に比べると高くなっている。(60%)子どものことについて気軽に相談したり情報交換をしたりできていることで、悩みを深刻化しないで済んでいるのだろう。しかし、悩みを感じている保護者、とくに「家族間で意見が合わない」という悩みのある保護者には、気軽に話せる相談相手をもつ人の割合は減少し、代わりに「相談相手はいない」という人の割合がやや増えている。家族と意見が合わず、気軽に話せる人もいない保護者の中には「子育ての孤立感」に悩む人がいるのではないかと思われる。学校や担任はこのような保護者にとっての相談相手にならないだろうか。

求められている相談相手

子育ての過程で悩みごとや心配ごとが生まれても、その子育ての大変さを分かり合い、共感したり支援したりし合える「他者」が存在しているかどうか保護者の子育てに対する意識のもち方に大きな影響を与えることはここまでの分析で明らかである。子育ての大変さそのものは容易には解消できないものかもしれないが、自分の思いを受け止め、共に子どもの成長を見守っている人の存在が実感できることで、子育ての大変さは「つらさ」だけではなく、「親も成長することができる」や「楽しいことも多い」という前向きな意識に変えていけるのではないだろうか。

第2章で考察したように、家庭教育の担い手である保護者の子育て意識のもち方や子どもへの接し方が、子どもの人間形成に大きく影響していることを踏まえれば、こうした保護者にとってのよき相談相手となり、保護者が子育てに自信や積極性を持ち、学校教育とともに子どもの人間性を見守り育てていこうとする意識へと高めていくことが今や学校の役割になっているのではないかと思われる。

しかし、前述したように(P.40)、担任と話し合うことがほとんどないという人はかなり多い(250人:25%)。話し合うことを必要としない人がそれだけ多いということなのだろうか。担任と子どものことで話し合うことが「(よく、ときどき)ある」という保護者と「(あまり、ほとんど)ない」という保護者の、子どもに関する悩みや心配ごとの割合を比較してみた。(図3-35)

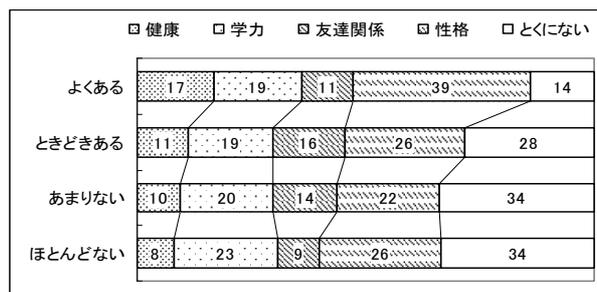
この図から読み取ることができるのは主に二つあると思われる。一つは話し合うことがよくある保護者には心配を抱えている人の割合が、話し合

うことのない保護者よりも高く(86%:66%)、さらにそのうちの多くが主に子どもの性格や態度を心配している人であるということである。

もう一つは、話し合うことがないという保護者にも子どもを心配している人の割合は高く(66%)、けて担任との話し合いや相談が不必要な人ばかりではないということである。

図3-35

保Q16「子どもに関する心配や悩み」
×保Q23「担任と話し合うことがあるか」%



このことから推察できるのは、まず、担任と話し合ったり相談をしたりすることがよくある保護者には子どもを心配し悩みをもつ保護者である割合が大きく、担任との話し合いによって何らかの見直しをもちたいと願う人であると考えられる、ということ。そして、担任と話し合うことが「(あまり、ほとんど)ない」という保護者(701人)でも、そのうちの多く(66%)は子どもに関して担任と相談する必要をもっている人であるということ、である。つまり、担任と保護者の個別の話し合いや相談の機会を設けることが大変重要なことであり、保護者から求められていることでもあることがうかがえる。

保護者と担任とのより深い関係づくり

このように相談したいことや話し合いたいことのある保護者が大変多いにもかかわらず、担任と話し合うことがないという保護者が70%を占め、教育情報源は「主に先生から」という保護者はわずかに2%(保Q15:図3-31)にしかならないという現状がある。家庭訪問や個人懇談会など、個別の話し合いの機会をどの学校でも設けてはいるが、調査の結果からはそれが保護者の「子ども理解」や「家庭教育との連携」には十分に活かされていないと考えられるのである。

以上のことから、保護者と担任とのコミュニケーションのあり方を考察すると、次のようなことがいえるのではないだろうか。

まず、学級のような子どもを家庭に知らせる機会を増やす必要があるということである。学級だよりや連絡帳によって頻繁に情報公開

や情報交換を行っていくことで、学級指導の意図や子どもの学校生活のようすについての保護者認知を高めていくことができる。連絡帳による個人情報には、その子どもの活躍した場面や成長をうかがわせることがらにも目を向けた記述が添えられれば、保護者の子育て意識にも届くものになるだろう。さらに、学校行事として定期的に行われる家庭訪問や個人懇談会だけでなく、積極的に担任から保護者との話し合いの機会を設けることも考えられる。これまでの、どちらかといえば問題が起こったときに対処することの多かった受身的な対応から、学校からのより積極的なアプローチをしなくてはならない。

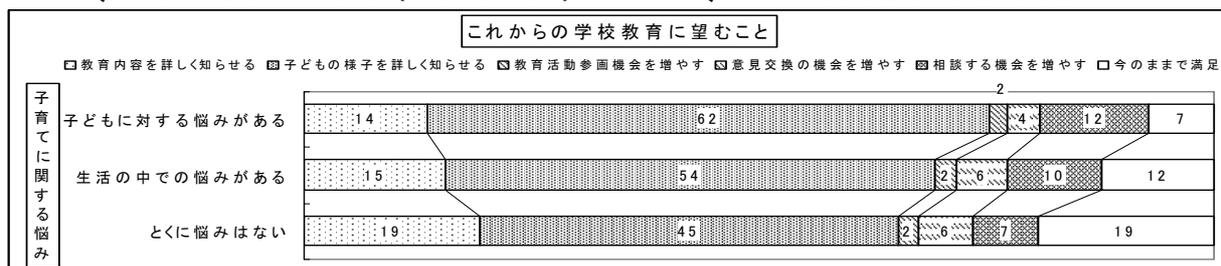
次に、これまでより以上に、一人ひとりの子どもの内面にこだわったかわり方をその子どもの保護者にもしていくことが重要だということである。学校と家庭の狭間で子どもの内面に何が起きているのかを、共に「育む者」として共有することが「子ども理解」や「家庭教育との連携」につながる。今回の調査からも、多様な育ち方をした子どもや多様な考え方の保護者に応じて、個別に子どもの内面に関する突き詰めた話し合いをしていく必要を感じたのである。

このような保護者とのコミュニケーションをもつことによって、保護者の子育てや教育に関する不安は軽減され、両者の信頼関係も深まっただろう。保護者が望んでいるのは「子どものことをよく知っている」「気軽に話せる」相談相手であって(図3-31, P.39), 教育力が低下していると指摘した上に専門的な話をする「第三者」ではない。担任と保護者との一歩踏み込んだより深い関係が、子どもの「豊かな人間形成」のために必要とされる時代なのである。

下の図3-36は、子育てで困っていることや悩んでいることがあるかと、設問 保Q29: これからの学校教育に望むこと とのクロス集計である。このように保護者は、困ったり悩んだりしている人ほど、子どものことを「知りたい」「相談したい」と強く願っているのである。

図3-36

保Q29「これからの学校への期待(詳しく知りたい)」 × 保Q17「子育てのことで悩んでいること」 %



(3) コーディネートする学校

各学校では前項で述べたような「相談相手」になるべく、家庭教育の支援を目的とした取組が行われている。中でも学級懇談会や家庭教育学級は、どの学校でも年間に数回行われており、学校という場を利用して家庭教育へ直接働きかける機会になっているものである。

ところが、この二つの話し合いに参加するという保護者の割合が、他の教育活動への参加率に比べて非常に低くなっているのである。学級懇談会については、子どもの学級に関する話題を中心とした担任との話し合いということもあってか、参加する保護者は66%になっているが、家庭教育学級に至っては19%にまで参加率が下がる。特に「まったく参加しない」という保護者が45%にもなるという状況である。(図1-31: P.12)

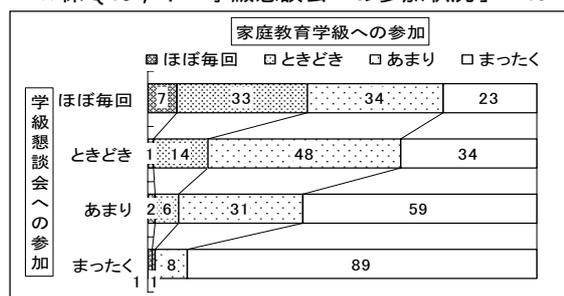
この「参加しない(できない)」という保護者の思いや実態に迫ることで、学校が保護者にとってのよき学習や交流の場となる会を設定するための要素を探ることができるのではないだろうか。

参加できない状況と、参加しない理由

図3-37は、学級懇談会と家庭教育学級への参加状況の関連性を見たクロス集計である。ここから、学級懇談会に参加しない保護者は家庭教育学級にも参加しない傾向が強いことが読み取れる。しかも調査では、この二つの機会のどちらにも参加しない傾向のある保護者は320人となり、全回答者(998人)のおよそ32%にもなる。

図3-37

保Q19, エ「家庭教育学級への参加状況」 × 保Q19, イ「学級懇談会への参加状況」 %

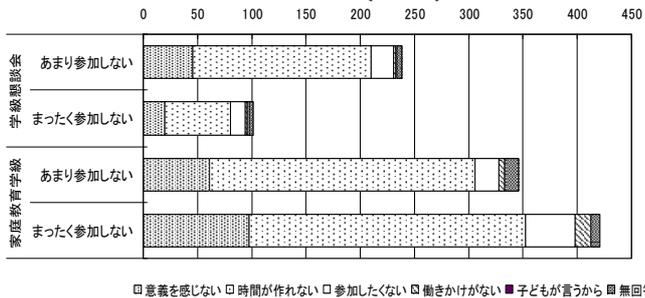


なぜ、このように「参加しない」保護者が多くなってしまっているのだろうか。不参加の理由を尋ねた設問に、「参加しない」という保護者は表3-2のように回答した。それをグラフにしたものが図3-38である。

表3-2 不参加の主な理由(人数)

| 参加状況 | 人数 | 不参加理由(人) | | | | | 無回答 | |
|--------|-----------|----------|---------|---------|---------|----------|-----|----|
| | | 意義を感じない | 時間が作れない | 参加したくない | 働きかけがない | 子どもが言うから | | |
| 学級懇談会 | あまり参加しない | 246 | 46 | 164 | 21 | 2 | 1 | 4 |
| | まったく参加しない | 101 | 20 | 60 | 14 | 2 | 0 | 5 |
| 家庭教育学級 | あまり参加しない | 355 | 61 | 245 | 22 | 5 | 0 | 13 |
| | まったく参加しない | 424 | 98 | 254 | 46 | 15 | 0 | 8 |

図3-38 不参加の主な理由(人数)



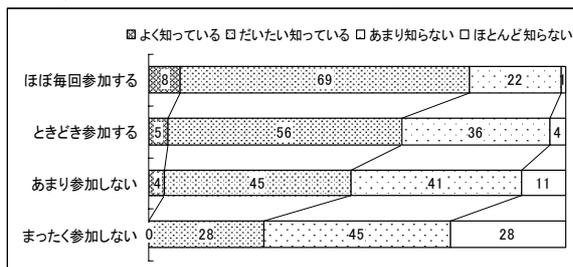
このように、家庭教育学級に「参加しない」という保護者が多く、中でも「時間を作れないから」という理由で参加しない保護者が多いことが目につく。生活が多忙化する中、仕事や用事の時間を割いて「学級懇談会」や「家庭教育学級」へ参加することが難しくなっているのだろうか。

しかし、それ以上に注目しなければならないのは、「意義を感じないから」「参加したくないから」という理由の保護者が少なくないことである。こうした受け止め方は、学級懇談会や家庭教育学級といった保護者同士の交流の場を設けることが、保護者自身にとってあまり意味のないものと受け取られているのではないかという心配がある。

ところが、次の図3-39は、学級懇談会へ参加している保護者ほど、学校や担任の指導目標や指導方法を認識している割合が高くなる傾向が強いことを表し、学級懇談会が教育活動を理解するために有効であることを示している。

図3-39

保Q20, ア「学級の指導目標や指導方針を知っているか」
×保Q19, イ「学級懇談会への参加状況」 %



このように、学校生活や学習における指導の目標や方法について担任からの説明を聞き、保護者同士の考えを交換し合い、子どもへのかかわり方を話し合うというこの会の意義は十分にあるはずなのである。それにもかかわらず「意義を感じない」と、参加しない保護者がいるという事実(表3-2, P.39)は何を物語っているのだろうか。根本からその設定意義や会のもち方を見直してみるの必要を感じさせる。

伝わっていない意義

こうした会に参加していない保護者は、意見交流や情報交換の機会を必要としていない保護者なのだろうか。この二つの会への参加状況と設問保Q17: 子育てに関する悩みや心配ごと に対する回答との関連性を見た。(図3-40, 図3-41)

図3-40

保Q17「子育てに関する悩み」
×保Q19, イ「学級懇談会への参加状況」 %

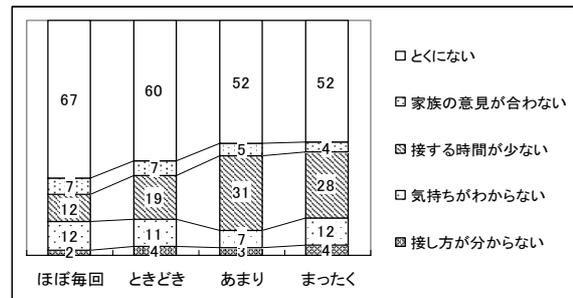
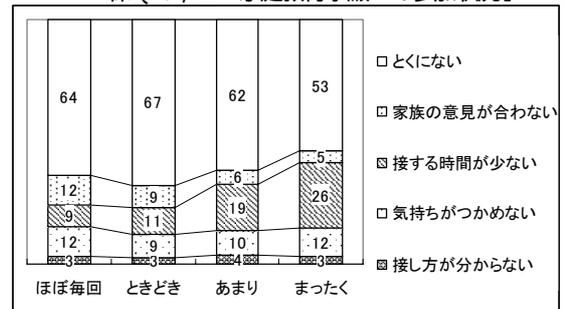


図3-41

保Q17「子育てに関する悩み」
×保Q19, エ「家庭教育学級への参加状況」 %

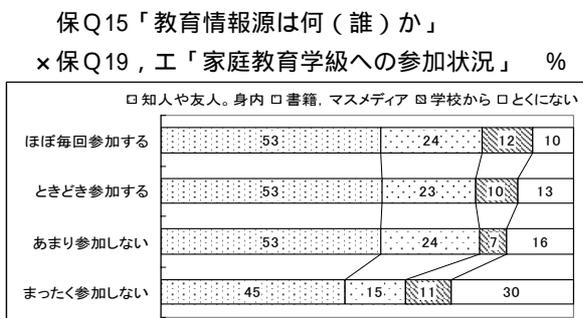


これを見ると意外なことに、「(あまり、まったく)参加しない」という保護者の方が、参加している保護者に比べて子育てに関する悩みや心配ごとをもっている人の割合が高い。言い換えれば、子育てに困っている人ほど懇談会や家庭教育学級に参加しない傾向があることを表しているのである。ただし、その内容を見ると、参加しない保護者は「子どもと接する時間が少ない」という悩みをもつ人の割合が高く、それゆえにこういった会に参加する時間もつくりができないという事情も浮かがる。

ただ、「時間がない」という事情のある保護者を除いても、これらの会に参加しない保護者で子育ての悩みをもっている人はおよそ2割になることから、必要とする状況にあるのに「意義を感じないから」「参加したくないから」と、提供された話し合いの機会を活用しない保護者もいるということになる。

次の図3-42からも家庭教育学級に参加しない保護者ほど教育の情報源を「何からも得ていない」という割合が大きくなっていて、参加しない(できない)保護者ほど教育情報源を必要としていることが分かる。このように、参加できない保護者ほど、参加する意義のある保護者の場合が多いのである。

図3-42



このように見ていくと、保護者のいう「意義を感じない」や「参加したくない」理由の背景には、こういった会そのものの意義が保護者に広く伝わっていないことが考えられる。第1章第2節(P.12)でも触れた「家庭教育学級とは何のことですか」という保護者がいたように、存在すら知らない人もいるのが現状である。子育てに対する保護者の思いに応えていく内容であるかどうかとともに、時間設定や雰囲気に参加しやすいものになっているか、開催要項が広く伝わっているか等について再検討しなければ、保護者が「意義を感じられない」まま形骸化してしまうだろう。

「参加したい」会をつくる

現在の家庭教育学級は、昭和46年11月15日、「急激な社会構造の変化に対処する社会教育のあり方について」という社会教育審議会の答申を受けて、各都道府県教育委員会教育長あてに出された文部省社会教育局長の「家庭教育学級の開設および運営について」という通知に、その基本的性格が示されている。そこでは、家庭教育学級とは「親等が家庭教育に関する学習を、一定期間にわたって、計画的、継続的かつ集団的に行う事業」であるとしている。また、学習方法としては、講演・講義より参加者相互の討議などに力点をおく

ことによって参加者の積極的な参加を促すことをすすめているほか、放送媒体や視聴覚教材を活用した豊富な学習情報の提供などの工夫を提唱しており、以後、家庭教育学級は社会の状況を反映してさまざまな関連事業が展開されることになる。

(15)1990年には全国での総開設数が27,340(16)にもなり、子どもをめぐる社会状況の変化や子どもの行動の傾向を踏まえて、親としてのあり方、子どもについての理解を深めるための学習機会となっている。

京都市教育委員会社会教育課の資料によれば、京都市立小学校における平成13年度の家庭教育学級の開設は600回以上を数え、各校での多様な取組が報告されている。(付表,P.54)1校についての平均実施回数は年3.6回となり、のべ2万人以上の保護者が参加しているという状況である。この資料から参加者の多い会の条件を探ることで「参加したい」と思える学習会のあり方やコーディネートの仕方を考察してみたい。

-開設日時-

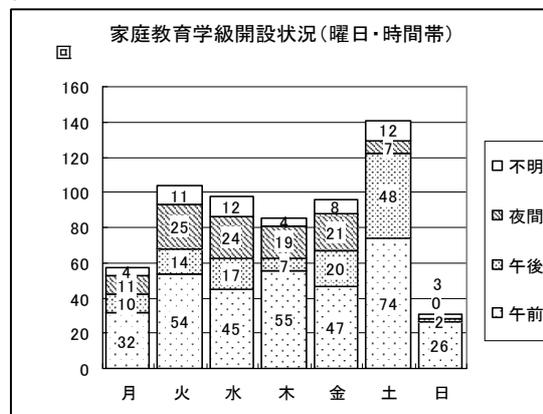
次の表3-3および図3-43は、曜日や時間帯別の家庭教育学級の実施状況である。(不明を除く)

表3-3 家庭教育学級実施状況(平成13年度)

| 曜日 | 実施回数 | 参加者数 | 1回平均参加者数(人) |
|----|------|------|-------------|
| 月 | 57 | 1635 | 28.7 |
| 火 | 104 | 3463 | 33.3 |
| 水 | 98 | 3105 | 31.7 |
| 木 | 85 | 2762 | 32.5 |
| 金 | 96 | 2967 | 30.9 |
| 土 | 141 | 5534 | 39.2 |
| 日 | 31 | 2674 | 86.3 |

| 時間帯 | 実施回数 | 参加者数 | 1回平均参加者数(人) |
|-----|------|-------|-------------|
| 午前 | 337 | 12104 | 35.9 |
| 午後 | 118 | 4337 | 36.8 |
| 夜間 | 107 | 3733 | 34.9 |
| 合計 | 562 | 20174 | 35.9 |

図3-43



土曜日の開設がのべ141回で最も多く、他の曜日に比べると午後の時間帯を利用しているものが48回となっている。さらに、曜日と時間帯ごとの

参加者数から参加率（1回平均の参加者数）を算出すると表3-4のようになり、午前よりも午後や夜間、平日よりも週末の方が参加しやすい傾向があることが分かる。

表3-4 時間帯と平均参加者数（人）

| | 午前 | 午後 | 夜間 | |
|---|------|-------|------|---|
| 月 | 27.2 | 34.1 | 28.5 | * 時間帯が「不明」 のものは除いた * 日曜日の参加者数 には、児童の参加数 も含まれている |
| 火 | 30.5 | 28.6 | 40.0 | |
| 水 | 28.1 | 35.8 | 31.9 | |
| 木 | 27.9 | 35.4 | 42.5 | |
| 金 | 31.5 | 37.3 | 28.0 | |
| 土 | 44.9 | 31.8 | 37.1 | |
| 日 | 72.0 | 235.0 | 0.0 | |

- 学習テーマ・学習内容 -

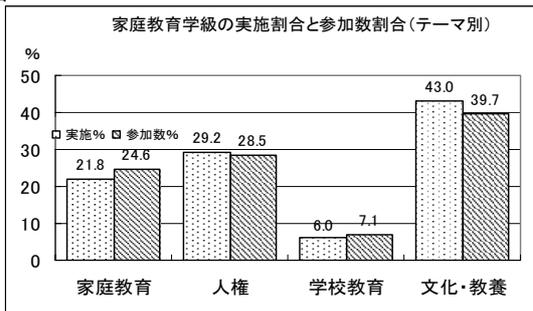
次に、学習テーマや内容が、家庭教育学級の基本的性質とされる「親としてのあり方や子どもについての理解を深めるための学習機会」（前述，P.44）に合致するものだったのか、また、保護者のニーズに応えるものかを見てみたい。

平成13年度に実施された家庭教育学級の学習テーマを「家庭教育のあり方に関するもの（家庭教育）」、「人権問題に関する認識を深めるためのもの（人権）」、「学校教育に対する理解を深めるもの（学校教育）」、「保護者自身の教養を高めるためのもの（文化・教養）」の四つのカテゴリでとらえ、実施回数と参加者数およびその割合を示したものが表3-5と図3-44である。

表3-5

| 家庭教育学級実施状況(学習テーマ別) | | | | | |
|--------------------|------|------|------|-------|---------|
| | 家庭教育 | 人権 | 学校教育 | 文化・教養 | 計 |
| 実施回数 | 134 | 180 | 37 | 265 | 616回 |
| % | 21.8 | 29.2 | 6.0 | 43.0 | 100% |
| 参加者数 | 5480 | 6348 | 1583 | 8839 | 22,250人 |
| % | 24.6 | 28.5 | 7.1 | 39.7 | 100% |

図3-44



図では「文化・教養」に関する学習テーマのものが265回実施され、全体の616回の開設数に対して43.0%という実施割合になっているが、そこに参加した人の割合は39.7%で、実施割合をやや下回る。これとは対照的に「家庭教育」「学校教育」に関する学習テーマの家庭教育学級は、実施割合よりも参加者割合の方が高くなっている。つまり、この二つの学習テーマで開設された学習会への参加率の方が高く、保護者の関心やニーズにより合ったものであることが考えられる。このことをさ

らに詳しく見るために、それぞれのテーマで行われた学習を内容ごとに細分化してとらえ各実施回数を集計した。（付表，P.54 参照）その結果から平均参加者数を算出し、多いものから並べると下の表3-6のようになる。

表3-6 平均参加者数（上位から10種類）

| 学習テーマ | 学習内容種類 | 実施回数(回) | 1回平均参加者数(人) |
|-------|-----------|---------|-------------|
| 文化・教養 | 音楽 | 14 | 92.6 |
| 学校教育 | 学習要領・内容 | 19 | 52.3 |
| 家庭教育 | コミュニケーション | 25 | 44.6 |
| 家庭教育 | こころ、内面 | 37 | 43.2 |
| 家庭教育 | その他・総合 | 38 | 41.5 |
| 学校教育 | 性教育・養護 | 2 | 41.5 |
| 人権 | 児童・子育て | 57 | 40.0 |
| 家庭教育 | 学習・読書 | 13 | 37.7 |
| 家庭教育 | 遊び | 3 | 37.7 |
| 文化・教養 | 救命・防犯 | 28 | 37.3 |

第一順位になっている「音楽」は、演奏会や鑑賞会であり、その参加者には児童も含まれていることもあって参加者数はかなり多くなっている。これを除いて見ると、上位を占めているのはやはり、「学校教育」や「家庭教育」をテーマにしたものである。

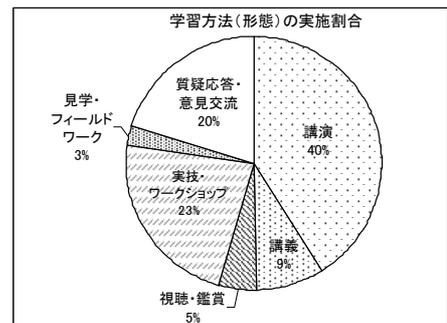
今回の調査で、子どもについての心配ごとや子育ての悩みがあると回答した保護者が多かったこと（保Q16，保Q17）や、学校に対して「教育方針や内容を詳しく知らせてほしい」や「子育てや教育について相談する機会を増やしてほしい」と望む保護者が多かったこと（保Q29）と一致した結果であるといえる。参加率が高い学習内容が、保護者のいう「会の意義」なのではないだろうか。

- 学習方法・学習形態 -

子育ての相談相手として「親しく気軽に話せる」ことを条件に挙げる保護者が多かった（保Q18：58.5%）が、家庭教育学級の学習方法別の参加状況からも保護者にとっての「参加しやすさ」がどんなことなのかをうかがうことができる。

まず、学習方法であるが、図3-45に示したように平成13年度に採用された学習方法のうち約半数が講演や講義であった。

図3-45



（一度二種類以上の学習方法をとっているものもあり、のべ回数として数えた）

また、実技やワークショップなど、実際に自分で作ったり動いたりする活動をしながら保護者同士の親睦を深めていけるような学習方法を取り入れたものも23%となっている。そこで、こういった学習方法別の参加者数(表3-7)の傾向から、「参加したい」会のあり方を考察してみる。

表3-7 学習方法別の参加状況

| 学習方法 | のべ実施回数 | のべ参加人数 | 1回平均参加人数 |
|-------------|--------|--------|----------|
| 講演 | 421 | 15721 | 37.3 |
| 講義 | 87 | 2732 | 31.4 |
| 視聴・鑑賞 | 48 | 3333 | 69.4 |
| 実技・ワークショップ | 233 | 6789 | 29.1 |
| 見学・フィールドワーク | 26 | 660 | 25.4 |
| 質疑応答・意見交流 | 208 | 7741 | 37.2 |
| 合計 | 1023 | 36976 | 36.1 |

表の「視聴・鑑賞」には音楽演奏会や鑑賞会に参加した児童が含まれているためにかなり高い参加率となっているが、音楽や演劇等を鑑賞する学習方法を組み入れることは気軽に参加できる雰囲気づくりには有効であると思われる。ただ、それだけに終始するのではなく、家庭教育学級の趣旨や保護者のニーズに合ったコミュニケーションの場にならなければならない。これまでの分析から考えて、自分の抱えている不安や疑問に対して何らかのヒントや答えを得られるような学習会を保護者は望んでいる。「講演」や「意見交流」の学習形態に平均参加人数が多くなっているのは、そうした保護者の思いやニーズを表しているのではないだろうか。

子どもの豊かな人間性を育むために、学校が家庭との連携を充実させていくことは重要な課題であるといえるが、保護者同士のつながりをコーディネートすることで家庭教育に協力していくことも、学校に求められていることである。しかし、学校が「低下した家庭の教育力を補うため」「保護者のためにしている」というスタンスでこうした機会を設けても、保護者にとってはかえって参加しづらいものになるだろう。

今、学校は子どもの健やかな成長を願う保護者の思いと「共にある」という意識や姿勢でいるのかを自問してみなければならない。保護者とともに“二つのまなざし”で子どもを見守り育てていく教育のあり方を模索するべきなのである。

(15)望月嵩「家庭教育学級」原田彰(編)『子育て「大変な時代」-教育「大変な時代」第3巻-』教育開発研究所1995 pp.185~186

(16)前掲 注15 p.190 資料「家庭教育学級の開設状況」より

おわりに

地域社会では人間関係が希薄になり、地域の教育力にも変化が見られるようになったといわれている。以前は「近所のおじさん、おばさん」から教わり学んでいた社会規範や対人スキルも、家庭教育の中で教えなければならないとされ、保護者は子育てに大きな負担感を感じざるを得なくなった。今回の意識調査でも、保護者のしつけ意識は高く(保Q13)、けして「しつけをしない家庭」が多いわけではないことは明らかである。かえって教育の役割意識を見ると(保Q27)さすがに学力をつけることは主に学校の役割だとする傾向が強いが、生活習慣をつけることをはじめ、社会規範を学ばせたり対人スキルを身につけさせたりすることは家庭の役割だとする保護者の割合はかなり高く(図1-28, P.12)、保護者が子育てに対して責任を強く感じていることがうかがえるのである。それだけに、子どものしつけや教育に全面的にかかわらなければならないといった追い詰められた意識が、子育てへの否定的な意識に結びついてしまうことが心配される。

今回の調査結果で印象的だったのは、そうした保護者の子育て意識が子どもの内面に直接響いていることであった。親の不安は子ども自身の肯定感を低めてしまい、子育てに対してポジティブな意識をもつ保護者の子どもには、自分の存在に対する自信がうかがえた。保護者と子どもとは家庭の中で「共にある」のだとあらためて感じたのである。

では、それに対して学校は、子どもや保護者とのようなつながり方をしているのだろうか。アンケートの余白に“『学級経営』という、まるで企業経営をするかのような考え方は学校を温かみのないものにしていくのではないですか”というある保護者のメモがあった。もちろん、学校教育の場では「生活や学習をするための環境を整え、居心地のよい学級づくりをすること」として認識され使われている教育用語であるが、このような「学校の常識」が保護者に伝わっていない面があるのではないだろうか。学校と保護者とのコミュニケーションを充実させなければならない。

そして、このメモからは、「子どもの人間性を育む者にこそ、人間性にあふれた温もりの感じられるかわり方をしてほしい」という保護者の願いが伝わってくる。私たちはこの保護者の問いかけに対する答えを、これからの学校教育の中で明確に示していかなければならないのである。

【付表1】

子ども調査

| 質問項目 | 選択肢 | 3年 555サンプル | | 5年 570サンプル | | 計 1125サンプル | |
|-------------------------------|--------------------------|------------|--------|------------|--------|------------|--------|
| | | 回答数(人) | 回答率(%) | 回答数(人) | 回答率(%) | 回答数(人) | 回答率(%) |
| Q1. 朝食を毎日食べているか | 1. 毎日食べている | 450 | 81.1% | 467 | 81.9% | 917 | 81.5% |
| | 2. ときどき食べない日がある | 77 | 13.9% | 82 | 14.4% | 159 | 14.1% |
| | 3. 食べない日が多い | 18 | 3.2% | 13 | 2.3% | 31 | 2.8% |
| | 4. ほとんど食べない | 10 | 1.8% | 8 | 1.4% | 18 | 1.6% |
| | 無回答・不明 | | | | | | |
| Q2. 近所の人に挨拶をしているか | 1. 毎日している | 169 | 30.5% | 157 | 27.5% | 326 | 29.0% |
| | 2. だいたいしている | 253 | 45.6% | 292 | 51.2% | 545 | 48.4% |
| | 3. しない日が多い | 77 | 13.9% | 72 | 12.6% | 149 | 13.2% |
| | 4. ほとんどしていない | 56 | 10.1% | 49 | 8.6% | 105 | 9.3% |
| | 無回答・不明 | | | | | | |
| Q3. 学校の休み時間に誰と過ごすことが多いか | 1. たくさんの友達と | 204 | 36.8% | 236 | 41.4% | 440 | 39.1% |
| | 2. 2,3人の友達と | 291 | 52.4% | 284 | 49.8% | 575 | 51.1% |
| | 3. 先生のそばで | 7 | 1.3% | 4 | 0.7% | 11 | 1.0% |
| | 4. ひとりで | 53 | 9.5% | 46 | 8.1% | 99 | 8.8% |
| | 無回答・不明 | | | | | | |
| Q4. あなたから、たくさんの友達を誘って遊ぶことがあるか | 1. よくある | 221 | 39.8% | 181 | 31.8% | 402 | 35.7% |
| | 2. ときどきある | 212 | 38.2% | 215 | 37.7% | 427 | 38.0% |
| | 3. あまりない | 66 | 11.9% | 102 | 17.9% | 168 | 14.9% |
| | 4. ほとんどない | 52 | 9.4% | 72 | 12.6% | 124 | 11.0% |
| | 無回答・不明 | 4 | 0.7% | 0 | 0.0% | 4 | 0.4% |
| Q5. 遊びの中に入りたいのに、言い出せないことがあるか | 1. よくある | 63 | 11.4% | 41 | 7.2% | 104 | 9.2% |
| | 2. ときどきある | 107 | 19.3% | 114 | 20.0% | 221 | 19.6% |
| | 3. あまりない | 111 | 20.0% | 159 | 27.9% | 270 | 24.0% |
| | 4. ほとんどない | 270 | 48.6% | 256 | 44.9% | 526 | 46.8% |
| | 無回答・不明 | 4 | 0.7% | 0 | 0.0% | 4 | 0.4% |
| Q6. 学校から帰ってから、誰と過ごすことが多いか | 1. 友達と | 267 | 48.1% | 268 | 47.0% | 535 | 47.6% |
| | 2. きょうだいと | 93 | 16.8% | 82 | 14.4% | 175 | 15.6% |
| | 3. 家の人と | 146 | 26.3% | 163 | 28.6% | 309 | 27.5% |
| | 4. ひとりで | 48 | 8.6% | 56 | 9.8% | 104 | 9.2% |
| | 無回答・不明 | 4 | 0.7% | 1 | 0.2% | 5 | 0.4% |
| Q7. 家での勉強を毎日しているか | 1. 毎日している | 310 | 55.9% | 304 | 53.3% | 614 | 54.6% |
| | 2. だいたいしている | 152 | 27.4% | 186 | 32.6% | 338 | 30.0% |
| | 3. しない日が多い | 54 | 9.7% | 56 | 9.8% | 110 | 9.8% |
| | 4. ほとんどしていない | 35 | 6.3% | 24 | 4.2% | 59 | 5.2% |
| | 無回答・不明 | 4 | 0.7% | 0 | 0.0% | 4 | 0.4% |
| Q8. 家の手伝いを毎日しているか | 1. 毎日している | 149 | 26.8% | 135 | 23.7% | 284 | 25.2% |
| | 2. だいたいしている | 221 | 39.8% | 231 | 40.5% | 452 | 40.2% |
| | 3. しない日が多い | 105 | 18.9% | 153 | 26.8% | 258 | 22.9% |
| | 4. ほとんどしていない | 76 | 13.7% | 51 | 8.9% | 127 | 11.3% |
| | 無回答・不明 | 4 | 0.7% | 0 | 0.0% | 4 | 0.4% |
| Q9. 家の人とどれくらい話をしているか | 1. ほとんど毎日話している | 398 | 71.7% | 473 | 83.0% | 871 | 77.4% |
| | 2. ときどき話している | 116 | 20.9% | 82 | 14.4% | 198 | 17.6% |
| | 3. 話さない日が多い | 22 | 4.0% | 10 | 1.8% | 32 | 2.8% |
| | 4. ほとんど話さない | 15 | 2.7% | 5 | 0.9% | 20 | 1.8% |
| | 無回答・不明 | 4 | 0.7% | 0 | 0.0% | 4 | 0.4% |
| Q10. いつも、何時ごろに寝ているか | 1. 9時までに寝ている | 128 | 23.1% | 50 | 8.8% | 178 | 15.8% |
| | 2. 10時までに寝ている | 265 | 47.7% | 190 | 33.3% | 455 | 40.4% |
| | 3. 11時までに寝ている | 93 | 16.8% | 198 | 34.7% | 291 | 25.9% |
| | 4. 11時過ぎてから寝ている | 65 | 11.7% | 132 | 23.2% | 197 | 17.5% |
| | 無回答・不明 | 4 | 0.7% | 0 | 0.0% | 4 | 0.4% |
| Q11. 家の人とする話でいちばん多いのは何か | 1. 友達とのこと | 283 | 51.0% | 299 | 52.5% | 582 | 51.7% |
| | 2. 先生とのこと | 28 | 5.0% | 7 | 1.2% | 35 | 3.1% |
| | 3. 勉強や成績のこと | 98 | 17.7% | 69 | 12.1% | 167 | 14.8% |
| | 4. 習い事や趣味のこと | 59 | 10.6% | 95 | 16.7% | 154 | 13.7% |
| | 5. テレビ番組のこと | 80 | 14.4% | 97 | 17.0% | 177 | 15.7% |
| 無回答・不明 | 7 | 1.3% | 3 | 0.5% | 10 | 0.9% | |
| Q12. 学校から家に帰ったとき、ほっとした気持ちになるか | 1. とても、ほっとする | 255 | 45.9% | 194 | 34.0% | 449 | 39.9% |
| | 2. 少し、ほっとする | 159 | 28.6% | 233 | 40.9% | 392 | 34.8% |
| | 3. あまり、ほっとしない | 66 | 11.9% | 89 | 15.6% | 155 | 13.8% |
| | 4. まったく、ほっとしない | 70 | 12.6% | 53 | 9.3% | 123 | 10.9% |
| | 無回答・不明 | 5 | 0.9% | 1 | 0.2% | 6 | 0.5% |
| Q13. 心配していることや悩んでいることがあるか(何か) | 1. 自分の体のこと | 69 | 12.4% | 70 | 12.3% | 139 | 12.4% |
| | 2. 友達のこと | 38 | 6.8% | 65 | 11.4% | 103 | 9.2% |
| | 3. 家の人とのこと | 60 | 10.8% | 32 | 5.6% | 92 | 8.2% |
| | 4. 勉強や成績のこと | 187 | 33.7% | 160 | 28.1% | 347 | 30.8% |
| | 5. とくにない | 196 | 35.3% | 243 | 42.6% | 439 | 39.0% |
| 無回答・不明 | 5 | 0.9% | 0 | 0.0% | 5 | 0.4% | |
| Q14. 家の人からよくしてもらっていることは何か | 1. 困ったときに相談のってくれる | 128 | 23.1% | 90 | 15.8% | 218 | 19.4% |
| | 2. うまくいかないときに励ましてくれる | 34 | 6.1% | 53 | 9.3% | 87 | 7.7% |
| | 3. いけないことをしたときに厳しく叱ってくれる | 108 | 19.5% | 101 | 17.7% | 209 | 18.6% |
| | 4. がんばったことを、ほめてくれる | 216 | 38.9% | 255 | 44.7% | 471 | 41.9% |
| | 5. とくにない | 63 | 11.4% | 71 | 12.5% | 134 | 11.9% |
| 無回答・不明 | 6 | 1.1% | 0 | 0.0% | 6 | 0.5% | |
| Q15. 家の人に対して、普段よく思うことは何か | 1. 自分の話を聞いてくれない | 59 | 10.6% | 34 | 6.0% | 93 | 8.3% |
| | 2. 少しのことで、ひどく怒られる | 51 | 9.2% | 45 | 7.9% | 96 | 8.5% |
| | 3. 自分のせいではないのに叱られる | 81 | 14.6% | 117 | 20.5% | 198 | 17.6% |
| | 4. がんばっているのにわかってくれない | 46 | 8.3% | 56 | 9.8% | 102 | 9.1% |
| | 5. とくに思わない | 316 | 56.9% | 318 | 55.8% | 634 | 56.4% |
| 無回答・不明 | 2 | 0.4% | 0 | 0.0% | 2 | 0.2% | |

| | | | | | | | |
|-----------------------------------|---------------------------|------|-------|------|-------|------|-------|
| Q16. 家の人は、どんな子どもになって欲しいのだと思うか | 1. 粘り強くがんばる子ども | 93 | 16.8% | 99 | 17.4% | 192 | 17.1% |
| | 2. 約束や決まりを守る子ども | 106 | 19.1% | 83 | 14.6% | 189 | 16.8% |
| | 3. 人に親切で優しい子ども | 152 | 27.4% | 167 | 29.3% | 319 | 28.4% |
| | 4. 素直で朗らかな子ども | 68 | 12.3% | 54 | 9.5% | 122 | 10.8% |
| | 5. 分からない | 133 | 24.0% | 167 | 29.3% | 300 | 26.7% |
| | 無回答・不明 | 3 | 0.5% | 0 | 0.0% | 3 | 0.3% |
| Q17. 「自分のここが好きだ」と思うところはあるか | 1. たくさんある | 109 | 19.6% | 78 | 13.7% | 187 | 16.6% |
| | 2. 少しある | 204 | 36.8% | 237 | 41.6% | 441 | 39.2% |
| | 3. あまりない | 115 | 20.7% | 166 | 29.1% | 281 | 25.0% |
| | 4. ぜんぜんない | 127 | 22.9% | 89 | 15.6% | 216 | 19.2% |
| Q18. 自分のことを好きだと思う友達は、どれくらいいると思うか | 1. たくさんいる | 134 | 24.1% | 141 | 24.7% | 275 | 24.4% |
| | 2. 少しいる | 229 | 41.3% | 275 | 48.2% | 504 | 44.8% |
| | 3. あまりいない | 104 | 18.7% | 96 | 16.8% | 200 | 17.8% |
| | 4. ぜんぜんいない | 87 | 15.7% | 56 | 9.8% | 143 | 12.7% |
| | 無回答・不明 | 1 | 0.2% | 2 | 0.4% | 3 | 0.3% |
| Q19. 日ごろ、「がんばって、よかったな」と思うことがあるか | 1. よくある | 195 | 35.1% | 211 | 37.0% | 406 | 36.1% |
| | 2. ときどきある | 247 | 44.5% | 264 | 46.3% | 511 | 45.4% |
| | 3. あまりない | 59 | 10.6% | 65 | 11.4% | 124 | 11.0% |
| | 4. ぜんぜんない | 54 | 9.7% | 30 | 5.3% | 84 | 7.5% |
| Q20. 苦手になっている勉強を、これからどうしようと思うか | 1. できるようになるまで、がんばる | 428 | 77.1% | 429 | 75.3% | 857 | 76.2% |
| | 2. もうやりたくない | 58 | 10.5% | 92 | 16.1% | 150 | 13.3% |
| | 3. 苦手になっている勉強はない | 69 | 12.4% | 47 | 8.2% | 116 | 10.3% |
| | 無回答・不明 | 0 | 0.0% | 2 | 0.4% | 2 | 0.2% |
| Q21. 「がんばっても、どうせうまくいかない」と思うことがあるか | 1. よくある | 97 | 17.5% | 71 | 12.5% | 168 | 14.9% |
| | 2. ときどきある | 160 | 28.8% | 224 | 39.3% | 384 | 34.1% |
| | 3. あまりない | 143 | 25.8% | 165 | 28.9% | 308 | 27.4% |
| | 4. ぜんぜんない | 155 | 27.9% | 109 | 19.1% | 264 | 23.5% |
| | 無回答・不明 | 0 | 0.0% | 1 | 0.2% | 1 | 0.1% |
| Q22. 友達が、重い荷物を運んでいたらどうするか | 1. 自分から手伝う | 398 | 71.7% | 432 | 75.8% | 830 | 73.8% |
| | 2. たのまれたら手伝う | 126 | 22.7% | 117 | 20.5% | 243 | 21.6% |
| | 3. とくに何もしない | 31 | 5.6% | 21 | 3.7% | 52 | 4.6% |
| Q23. 友達が、ひとりで泣いていたらどうするか | 1. 「どうしたの」とわけを聞く | 481 | 86.7% | 499 | 87.5% | 980 | 87.1% |
| | 2. どうするか、ようすを見ている | 50 | 9.0% | 61 | 10.7% | 111 | 9.9% |
| | 3. かまわずに遊びに行く | 24 | 4.3% | 10 | 1.8% | 34 | 3.0% |
| Q24. 友達が、嫌な事を言ったときどうするか | 1. 「やめて」とはっきり言う | 295 | 53.2% | 231 | 40.5% | 526 | 46.8% |
| | 2. 相手のいやな事を言い返す | 114 | 20.5% | 180 | 31.6% | 294 | 26.1% |
| | 3. 叩いて、やめさせる | 58 | 10.5% | 44 | 7.7% | 102 | 9.1% |
| | 4. 何もしない | 88 | 15.9% | 113 | 19.8% | 201 | 17.9% |
| | 無回答・不明 | 0 | 0.0% | 2 | 0.4% | 2 | 0.2% |
| Q25. 教室で学習しているときのあなたは、どんなようすか | 1. 考えや答えを、自分から発表する | 206 | 37.1% | 173 | 30.4% | 379 | 33.7% |
| | 2. 考えや答えがあっても、自分からは発表しない | 284 | 51.2% | 325 | 57.0% | 609 | 54.1% |
| | 3. 考えや答えが分からなくて、誰かに教えてもらう | 30 | 5.4% | 48 | 8.4% | 78 | 6.9% |
| | 4. 考えや答えが分からなくても、そのまましておく | 34 | 6.1% | 24 | 4.2% | 58 | 5.2% |
| | 無回答・不明 | 1 | 0.2% | 0 | 0.0% | 1 | 0.1% |
| Q26. いちばん楽しいと思う学習のし方はどれか | 1. 先生の話聞いてまとめる学習 | 116 | 20.9% | 55 | 9.6% | 171 | 15.2% |
| | 2. ひとりで調べたり考えたりする学習 | 80 | 14.4% | 112 | 19.6% | 192 | 17.1% |
| | 3. グループで話し合い考える学習 | 186 | 33.5% | 219 | 38.4% | 405 | 36.0% |
| | 4. クラスで考えを出し合い話し合う学習 | 103 | 18.6% | 114 | 20.0% | 217 | 19.3% |
| | 5. 楽しいと思うことはない | 69 | 12.4% | 70 | 12.3% | 139 | 12.4% |
| | 無回答・不明 | 1 | 0.2% | 0 | 0.0% | 1 | 0.1% |
| Q27. クラスで決まっている当番や係の仕事ができていますか | 1. しっかりできている | 248 | 44.7% | 185 | 32.5% | 433 | 38.5% |
| | 2. だいたいできている | 249 | 44.9% | 321 | 56.3% | 570 | 50.7% |
| | 3. あまりできていない | 35 | 6.3% | 45 | 7.9% | 80 | 7.1% |
| | 4. ぜんぜんできていない | 23 | 4.1% | 19 | 3.3% | 42 | 3.7% |
| Q28. クラスのみんなと一緒にいるのは楽しいか | 1. とても楽しい | 310 | 55.9% | 309 | 54.2% | 619 | 55.0% |
| | 2. まあまあ楽しい | 174 | 31.4% | 202 | 35.4% | 376 | 33.4% |
| | 3. あまり楽しくない | 46 | 8.3% | 36 | 6.3% | 82 | 7.3% |
| | 4. ぜんぜん楽しくない | 25 | 4.5% | 23 | 4.0% | 48 | 4.3% |
| Q29. 学校はあなたにとって好きなどころか | 1. とても好き | 197 | 35.5% | 131 | 23.0% | 328 | 29.2% |
| | 2. まあまあ好き | 230 | 41.4% | 294 | 51.6% | 524 | 46.6% |
| | 3. あまり好きではない | 81 | 14.6% | 87 | 15.3% | 168 | 14.9% |
| | 4. きらい | 47 | 8.5% | 58 | 10.2% | 105 | 9.3% |
| Q30. 授業参観日は、あなたにとってどのくらい楽しみなことか | 1. とても楽しみ | 212 | 38.2% | 88 | 15.4% | 300 | 26.7% |
| | 2. まあまあ楽しみ | 181 | 32.6% | 202 | 35.4% | 383 | 34.0% |
| | 3. あまり楽しみではない | 84 | 15.1% | 167 | 29.3% | 251 | 22.3% |
| | 4. ぜんぜん楽しみではない | 78 | 14.1% | 113 | 19.8% | 191 | 17.0% |
| Q31. どうなったら、今より学校が楽しくなると思うか | 1. 勉強が分かるようになったら | 209 | 37.7% | 155 | 27.2% | 364 | 32.4% |
| | 2. 友達と仲良くなったら | 313 | 56.4% | 363 | 63.7% | 676 | 60.1% |
| | 3. 先生と親しくなったら | 33 | 5.9% | 49 | 8.6% | 82 | 7.3% |
| | 無回答・不明 | 0 | 0.0% | 3 | 0.5% | 3 | 0.3% |
| Q32. 「いいな」と思うのはどんな先生か | 1. いけないことには厳しい先生 | 51 | 9.2% | 19 | 3.3% | 70 | 6.2% |
| | 2. 子どもの気持ち分かる先生 | 90 | 16.2% | 141 | 24.7% | 231 | 20.5% |
| | 3. がんばったことをほめてくれる先生 | 39 | 7.0% | 26 | 4.6% | 65 | 5.8% |
| | 4. 勉強を分かりやすく教えてくれる先生 | 109 | 19.6% | 69 | 12.1% | 178 | 15.8% |
| | 5. いつも明るくて、おもしろい先生 | 265 | 47.7% | 314 | 55.1% | 579 | 51.5% |
| 無回答・不明 | 1 | 0.2% | 1 | 0.2% | 2 | 0.2% | |

保護者調査

| 質問項目 | 選択肢 | 3年 500サンプル | | 5年 498サンプル | | 計 998サンプル | | |
|------------------------------|-----------------------------|------------|--------|------------|--------|-----------|--------|-------|
| | | 回答数(人) | 回答率(%) | 回答数(人) | 回答率(%) | 回答数(人) | 回答率(%) | |
| Q1. 子どもの性別 | 性別 | | | | | | | |
| | 1. 男 | 245 | 49.0% | 260 | 52.2% | 505 | 50.6% | |
| | 2. 女 | 254 | 50.8% | 238 | 47.8% | 492 | 49.3% | |
| | 無回答・不明 | 1 | 0.2% | 0 | 0.0% | 1 | 0.1% | |
| Q2. 子どもにとっての回答者の続柄 | 1. 母親 | 471 | 94.2% | 464 | 93.2% | 935 | 93.7% | |
| | 2. 父親 | 25 | 5.0% | 31 | 6.2% | 56 | 5.6% | |
| | 3. 祖母 | 3 | 0.6% | 2 | 0.4% | 5 | 0.5% | |
| | 4. 祖父 | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% | |
| | 5. おじ | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% | |
| | 6. おば | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% | |
| | 7. その他 | 0 | 0.0% | 1 | 0.2% | 1 | 0.1% | |
| | 無回答・不明 | 1 | 0.2% | 0 | 0.0% | 1 | 0.1% | |
| Q3. 家族構成 | 1. 夫婦と子ども | 370 | 74.0% | 370 | 74.3% | 740 | 74.1% | |
| | 2. 母と子ども | 36 | 7.2% | 29 | 5.8% | 65 | 6.5% | |
| | 3. 父と子ども | 4 | 0.8% | 3 | 0.6% | 7 | 0.7% | |
| | 4. 夫婦と子どもと祖父母や親族 | 68 | 13.6% | 76 | 15.3% | 144 | 14.4% | |
| | 5. 母と子どもと祖父母や親族 | 11 | 2.2% | 14 | 2.8% | 25 | 2.5% | |
| | 6. 父と子どもと祖父母や親族 | 4 | 0.8% | 3 | 0.6% | 7 | 0.7% | |
| | 7. これ以外の家族構成 | 6 | 1.2% | 3 | 0.6% | 9 | 0.9% | |
| | 無回答・不明 | 1 | 0.2% | 0 | 0.0% | 1 | 0.1% | |
| Q4. きょうだい(本人含む) | 1人 | 74 | 14.8% | 43 | 8.6% | 117 | 11.7% | |
| | 2人 | 282 | 56.4% | 264 | 53.0% | 546 | 54.7% | |
| | 3人 | 118 | 23.6% | 168 | 33.7% | 286 | 28.7% | |
| | 4人 | 23 | 4.6% | 16 | 3.2% | 39 | 3.9% | |
| | 5人 | 2 | 0.4% | 7 | 1.4% | 9 | 0.9% | |
| | 6人 | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% | |
| | 無回答・不明 | 1 | 0.2% | 0 | 0.0% | 1 | 0.1% | |
| Q5. 家族(同居者)の人数 | 2人 | 12 | 2.4% | 2 | 0.4% | 14 | 1.4% | |
| | 3人 | 73 | 14.6% | 49 | 9.8% | 122 | 12.2% | |
| | 4人 | 231 | 46.2% | 222 | 44.6% | 453 | 45.4% | |
| | 5人 | 109 | 21.8% | 152 | 30.5% | 261 | 26.2% | |
| | 6人 | 48 | 9.6% | 44 | 8.8% | 92 | 9.2% | |
| | 7人 | 16 | 3.2% | 23 | 4.6% | 39 | 3.9% | |
| | 8人 | 7 | 1.4% | 4 | 0.8% | 11 | 1.1% | |
| | 9人 | 1 | 0.2% | 2 | 0.4% | 3 | 0.3% | |
| | 10人以上 | 2 | 0.4% | 0 | 0.0% | 2 | 0.2% | |
| | 無回答・不明 | 1 | 0.2% | 0 | 0.0% | 1 | 0.1% | |
| Q6. 子どもとどれくらい話をしているか | 1. ほとんど毎日話している | 473 | 94.6% | 483 | 97.0% | 956 | 95.8% | |
| | 2. ときどき話している | 23 | 4.6% | 14 | 2.8% | 37 | 3.7% | |
| | 3. 話さない日が多い | 2 | 0.4% | 1 | 0.2% | 3 | 0.3% | |
| | 4. ほとんど話さない | 1 | 0.2% | 0 | 0.0% | 1 | 0.1% | |
| | 無回答・不明 | 1 | 0.2% | 0 | 0.0% | 1 | 0.1% | |
| Q7. 子どもと話すのは何をしているときが多いか | 1. 食事をしているとき | 240 | 48.0% | 302 | 60.6% | 542 | 54.3% | |
| | 2. テレビやビデオを見ているとき | 28 | 5.6% | 44 | 8.8% | 72 | 7.2% | |
| | 3. 家事をしているとき | 109 | 21.8% | 74 | 14.9% | 183 | 18.3% | |
| | 4. 一緒に風呂に入っているとき | 58 | 11.6% | 34 | 6.8% | 92 | 9.2% | |
| | 5. その他 | 62 | 12.4% | 44 | 8.8% | 106 | 10.6% | |
| | 無回答・不明 | 3 | 0.6% | 0 | 0.0% | 3 | 0.3% | |
| Q8. 子どもの休日の過ごし方で多いのはどれか | 1. ひどりで過ごす | 2 | 0.4% | 3 | 0.6% | 5 | 0.5% | |
| | 2. 家族と過ごす | 375 | 75.0% | 310 | 62.2% | 685 | 68.6% | |
| | 3. 友達と遊ぶ | 83 | 16.6% | 104 | 20.9% | 187 | 18.7% | |
| | 4. 習い事やサークル活動をする | 39 | 7.8% | 81 | 16.3% | 120 | 12.0% | |
| | 5. 知らない | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% | |
| | 無回答・不明 | 1 | 0.2% | 0 | 0.0% | 1 | 0.1% | |
| Q9. 子どもには、次のような面がどの程度あるか | ア) 勉強やスポーツ、習い事などに自信をもって取り組む | 1. とてもある | 146 | 29.2% | 163 | 32.7% | 309 | 31.0% |
| | | 2. 少しある | 306 | 61.2% | 290 | 58.2% | 596 | 59.7% |
| | | 3. ない | 42 | 8.4% | 38 | 7.6% | 80 | 8.0% |
| | | 4. 分からない | 5 | 1.0% | 7 | 1.4% | 12 | 1.2% |
| | | 無回答・不明 | 1 | 0.2% | 0 | 0.0% | 1 | 0.1% |
| | イ) たくさんの友達から信頼され好かれている | 1. とてもある | 139 | 27.8% | 156 | 31.3% | 295 | 29.6% |
| | | 2. 少しある | 276 | 55.2% | 277 | 55.6% | 553 | 55.4% |
| | | 3. ない | 22 | 4.4% | 20 | 4.0% | 42 | 4.2% |
| | | 4. 分からない | 62 | 12.4% | 45 | 9.0% | 107 | 10.7% |
| | | 無回答・不明 | 1 | 0.2% | 0 | 0.0% | 1 | 0.1% |
| | ウ) 得意ではないことでも粘り強く取り組む | 1. とてもある | 70 | 14.0% | 72 | 14.5% | 142 | 14.2% |
| | | 2. 少しある | 254 | 50.8% | 257 | 51.6% | 511 | 51.2% |
| | | 3. ない | 162 | 32.4% | 152 | 30.5% | 314 | 31.5% |
| | | 4. 分からない | 13 | 2.6% | 17 | 3.4% | 30 | 3.0% |
| | | 無回答・不明 | 1 | 0.2% | 0 | 0.0% | 1 | 0.1% |
| | エ) 人の手伝いをしたり世話をしたりするのが好きである | 1. とてもある | 179 | 35.8% | 195 | 39.2% | 374 | 37.5% |
| | | 2. 少しある | 253 | 50.6% | 233 | 46.8% | 486 | 48.7% |
| | | 3. ない | 59 | 11.8% | 59 | 11.8% | 118 | 11.8% |
| | | 4. 分からない | 8 | 1.6% | 11 | 2.2% | 19 | 1.9% |
| | | 無回答・不明 | 1 | 0.2% | 0 | 0.0% | 1 | 0.1% |
| オ) 人が困っているのを知るとすすんで手助けしようとする | 1. とてもある | 143 | 28.6% | 160 | 32.1% | 303 | 30.4% | |
| | 2. 少しある | 270 | 54.0% | 279 | 56.0% | 549 | 55.0% | |
| | 3. ない | 44 | 8.8% | 33 | 6.6% | 77 | 7.7% | |
| | 4. 分からない | 40 | 8.0% | 26 | 5.2% | 66 | 6.6% | |
| | 無回答・不明 | 3 | 0.6% | 0 | 0.0% | 3 | 0.3% | |

| | | | | | | | | |
|--------------------------------|----------------------------------|----------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| カ)人の意見と違っていて落ち着いて話をする | 1. とてもある | 50 | 10.0% | 64 | 12.9% | 114 | 11.4% | |
| | 2. 少しある | 248 | 49.6% | 261 | 52.4% | 509 | 51.0% | |
| | 3. ない | 163 | 32.6% | 124 | 24.9% | 287 | 28.8% | |
| | 4. 分からない | 36 | 7.2% | 49 | 9.8% | 85 | 8.5% | |
| | 無回答・不明 | 3 | 0.6% | 0 | 0.0% | 3 | 0.3% | |
| キ)初めて出会った人とも、すぐに親しくなる | 1. とてもある | 145 | 29.0% | 134 | 26.9% | 279 | 28.0% | |
| | 2. 少しある | 212 | 42.4% | 225 | 45.2% | 437 | 43.8% | |
| | 3. ない | 125 | 25.0% | 118 | 23.7% | 243 | 24.3% | |
| | 4. 分からない | 16 | 3.2% | 21 | 4.2% | 37 | 3.7% | |
| | 無回答・不明 | 2 | 0.4% | 0 | 0.0% | 2 | 0.2% | |
| Q10. 子どもの友達関係にはどんなことが大切だと思うか | 1. 誰にでも親切にやさしくすること | 75 | 15.0% | 56 | 11.2% | 131 | 13.1% | |
| | 2. 友達との約束を守ること | 60 | 12.0% | 60 | 12.0% | 120 | 12.0% | |
| | 3. 友達の気持ちを考えて行動すること | 264 | 52.8% | 279 | 56.0% | 543 | 54.4% | |
| | 4. 自分の気持ちを友達に伝えること | 96 | 19.2% | 99 | 19.9% | 195 | 19.5% | |
| | 5. とくにない | 4 | 0.8% | 4 | 0.8% | 8 | 0.8% | |
| 無回答・不明 | 1 | 0.2% | 0 | 0.0% | 1 | 0.1% | | |
| Q11. 子どもには、どのような生活や生き方を望みたいか | 1. 経済的に豊かで、ものに恵まれた生活 | 11 | 2.2% | 6 | 1.2% | 17 | 1.7% | |
| | 2. 友人や知人などの、人間関係に恵まれた生活 | 305 | 61.0% | 267 | 53.6% | 572 | 57.3% | |
| | 3. 自分の特技や能力を生かした生き方 | 151 | 30.2% | 184 | 36.9% | 335 | 33.6% | |
| | 4. 社会や人々に貢献する生き方 | 24 | 4.8% | 35 | 7.0% | 59 | 5.9% | |
| | 5. とくに考えていない | 8 | 1.6% | 5 | 1.0% | 13 | 1.3% | |
| 無回答・不明 | 1 | 0.2% | 1 | 0.2% | 2 | 0.2% | | |
| Q12. 日ごろ、子育てについて家族と話し合っているか | 1. よく話し合っている | 211 | 42.2% | 195 | 39.2% | 406 | 40.7% | |
| | 2. ときどき話し合っている | 220 | 44.0% | 234 | 47.0% | 454 | 45.5% | |
| | 3. あまり話し合っていない | 61 | 12.2% | 63 | 12.7% | 124 | 12.4% | |
| | 4. まったく話し合っていない | 7 | 1.4% | 6 | 1.2% | 13 | 1.3% | |
| 無回答・不明 | 1 | 0.2% | 0 | 0.0% | 1 | 0.1% | | |
| Q13. 次のことを、どの程度意識して子どもに接しているか | ア)生活リズムを 守らせる | 1. 強く意識している | 275 | 55.0% | 263 | 52.8% | 538 | 53.9% |
| | | 2. 少し意識している | 206 | 41.2% | 227 | 45.6% | 433 | 43.4% |
| | | 3. あまり意識していない | 19 | 3.8% | 8 | 1.6% | 27 | 2.7% |
| | | 4. まったく意識していない | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% |
| | イ)身の回りの整理 整頓をさせる | 1. 強く意識している | 202 | 40.4% | 180 | 36.1% | 382 | 38.3% |
| | | 2. 少し意識している | 273 | 54.6% | 291 | 58.4% | 564 | 56.5% |
| | | 3. あまり意識していない | 23 | 4.6% | 26 | 5.2% | 49 | 4.9% |
| | | 4. まったく意識していない | 2 | 0.4% | 1 | 0.2% | 3 | 0.3% |
| | ウ)約束や役割を 守らせる | 1. 強く意識している | 308 | 61.6% | 313 | 62.9% | 621 | 62.2% |
| | | 2. 少し意識している | 178 | 35.6% | 177 | 35.5% | 355 | 35.6% |
| | | 3. あまり意識していない | 14 | 2.8% | 7 | 1.4% | 21 | 2.1% |
| | | 4. まったく意識していない | 0 | 0.0% | 1 | 0.2% | 1 | 0.1% |
| | エ)家族の一員として 家事を分担させる | 1. 強く意識している | 83 | 16.6% | 82 | 16.5% | 165 | 16.5% |
| | | 2. 少し意識している | 247 | 49.4% | 295 | 59.2% | 542 | 54.3% |
| | | 3. あまり意識していない | 153 | 30.6% | 115 | 23.1% | 268 | 26.9% |
| | | 4. まったく意識していない | 17 | 3.4% | 6 | 1.2% | 23 | 2.3% |
| | オ)挨拶をさせる | 1. 強く意識している | 372 | 74.4% | 341 | 68.5% | 713 | 71.4% |
| | | 2. 少し意識している | 118 | 23.6% | 133 | 26.7% | 251 | 25.2% |
| | | 3. あまり意識していない | 10 | 2.0% | 22 | 4.4% | 32 | 3.2% |
| | | 4. まったく意識していない | 0 | 0.0% | 2 | 0.4% | 2 | 0.2% |
| Q14. 子育てに関する次のような意見に対して、どう思うか | ア)子育てには家族 全員が関わるべきだ | 1. とてもそう思う | 392 | 78.4% | 381 | 76.5% | 773 | 77.5% |
| | | 2. ややそう思う | 97 | 19.4% | 112 | 22.5% | 209 | 20.9% |
| | | 3. あまりそうは思わない | 10 | 2.0% | 5 | 1.0% | 15 | 1.5% |
| | | 4. まったくそうは思わない | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% |
| | イ)子どもは叱るよりもほめて育て た方がよい | 1. とてもそう思う | 137 | 27.4% | 163 | 32.7% | 300 | 30.1% |
| | | 2. ややそう思う | 303 | 60.6% | 288 | 57.8% | 591 | 59.2% |
| | | 3. あまりそうは思わない | 56 | 11.2% | 46 | 9.2% | 102 | 10.2% |
| | | 4. まったくそうは思わない | 3 | 0.6% | 0 | 0.0% | 3 | 0.3% |
| | ウ)子どもには厳しく 接した方がよい | 1. とてもそう思う | 31 | 6.2% | 28 | 5.6% | 59 | 5.9% |
| | | 2. ややそう思う | 258 | 51.6% | 240 | 48.2% | 498 | 49.9% |
| | | 3. あまりそうは思わない | 199 | 39.8% | 213 | 42.8% | 412 | 41.3% |
| | | 4. まったくそうは思わない | 8 | 1.6% | 17 | 3.4% | 25 | 2.5% |
| | エ)子育ては、楽しいことよりもつ らいことの方が多い | 1. とてもそう思う | 23 | 4.6% | 23 | 4.6% | 46 | 4.6% |
| | | 2. ややそう思う | 119 | 23.8% | 92 | 18.5% | 211 | 21.1% |
| | | 3. あまりそうは思わない | 294 | 58.8% | 286 | 57.4% | 580 | 58.1% |
| | | 4. まったくそうは思わない | 63 | 12.6% | 96 | 19.3% | 159 | 15.9% |
| | オ)子育てをすることで、親も人間的 に成長することができる | 1. とてもそう思う | 352 | 70.4% | 383 | 76.9% | 735 | 73.6% |
| | | 2. ややそう思う | 133 | 26.6% | 110 | 22.1% | 243 | 24.3% |
| | | 3. あまりそうは思わない | 13 | 2.6% | 4 | 0.8% | 17 | 1.7% |
| | | 4. まったくそうは思わない | 1 | 0.2% | 1 | 0.2% | 2 | 0.2% |
| カ)子育てをすることで、親の生き 方が制限されてしまう | 1. とてもそう思う | 23 | 4.6% | 20 | 4.0% | 43 | 4.3% | |
| | 2. ややそう思う | 165 | 33.0% | 169 | 33.9% | 334 | 33.5% | |
| | 3. あまりそうは思わない | 245 | 49.0% | 229 | 46.0% | 474 | 47.5% | |
| | 4. まったくそうは思わない | 66 | 13.2% | 79 | 15.9% | 145 | 14.5% | |
| 無回答・不明 | 1 | 0.2% | 1 | 0.2% | 2 | 0.2% | | |

| | | | | | | | | |
|-------------------------------------|-------------------------|-------------------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| Q15. しつけや教育に関する情報を何(誰)から得ているか | 1. 教育雑誌や専門書 | 28 | 5.6% | 38 | 7.6% | 66 | 6.6% | |
| | 2. 新聞・テレビ・インターネット | 62 | 12.4% | 99 | 19.9% | 161 | 16.1% | |
| | 3. 学校から配布されるプリントやパンフレット | 24 | 4.8% | 28 | 5.6% | 52 | 5.2% | |
| | 4. 講演や子育て講座 | 16 | 3.2% | 15 | 3.0% | 31 | 3.1% | |
| | 5. 自分の親やきょうだい | 142 | 28.4% | 90 | 18.1% | 232 | 23.2% | |
| | 6. 知人や近所の人 | 149 | 29.8% | 144 | 28.9% | 293 | 29.4% | |
| | 7. 学校の先生 | 5 | 1.0% | 10 | 2.0% | 15 | 1.5% | |
| | 8. とくにない | 74 | 14.8% | 72 | 14.5% | 146 | 14.6% | |
| | 無回答・不明 | 0 | 0.0% | 2 | 0.4% | 2 | 0.2% | |
| Q16. 子どものことで、心配や悩みはあるか(何か) | 1. 子どもの健康や体の成長 | 53 | 10.6% | 45 | 9.0% | 98 | 9.8% | |
| | 2. 子どもの学力や進路 | 80 | 16.0% | 124 | 24.9% | 204 | 20.4% | |
| | 3. 子どもの友達関係 | 71 | 14.2% | 60 | 12.0% | 131 | 13.1% | |
| | 4. 子どもの性格や態度 | 145 | 29.0% | 104 | 20.9% | 249 | 24.9% | |
| | 5. とくにない | 151 | 30.2% | 165 | 33.1% | 316 | 31.7% | |
| Q17. 子育てのことで困っていることや悩んでいることはあるか(何か) | 1. 子どもへの接し方が分からない | 19 | 3.8% | 13 | 2.6% | 32 | 3.2% | |
| | 2. 子どもに対して愛情がもてない | 3 | 0.6% | 1 | 0.2% | 4 | 0.4% | |
| | 3. 子どもの気持ちがあつかめない | 58 | 11.6% | 47 | 9.4% | 105 | 10.5% | |
| | 4. 子どもに接する時間が少ない | 108 | 21.6% | 96 | 19.3% | 204 | 20.4% | |
| | 5. 家族の間で、子育ての意見が合わない | 29 | 5.8% | 33 | 6.6% | 62 | 6.2% | |
| | 6. とくにない | 281 | 56.2% | 308 | 61.8% | 589 | 59.0% | |
| 無回答・不明 | 2 | 0.4% | 0 | 0.0% | 2 | 0.2% | | |
| Q18. しつけや教育を相談している人はどんな人か | 1. 親しく話して気軽に話せる人 | 301 | 60.2% | 283 | 56.8% | 584 | 58.5% | |
| | 2. 子育ての経験が豊富な人 | 47 | 9.4% | 46 | 9.2% | 93 | 9.3% | |
| | 3. 教育に関する専門的な知識をもつ人 | 13 | 2.6% | 24 | 4.8% | 37 | 3.7% | |
| | 4. 子どものことをよく知っている人 | 106 | 21.2% | 91 | 18.3% | 197 | 19.7% | |
| | 5. 個人のプライバシーを守る人 | 10 | 2.0% | 18 | 3.6% | 28 | 2.8% | |
| | 6. 相談する人はいない | 22 | 4.4% | 33 | 6.6% | 55 | 5.5% | |
| 無回答・不明 | 1 | 0.2% | 3 | 0.6% | 4 | 0.4% | | |
| Q19. ①学校で行われている教育活動や行事にどの程度参加しているか | ア) 授業参観 | 1. ほぼ毎回参加する | 347 | 69.4% | 351 | 70.5% | 698 | 69.9% |
| | | 2. ときどき参加する | 125 | 25.0% | 110 | 22.1% | 235 | 23.5% |
| | | 3. あまり参加しない | 25 | 5.0% | 33 | 6.6% | 58 | 5.8% |
| | | 4. まったく参加しない | 2 | 0.4% | 4 | 0.8% | 6 | 0.6% |
| | 無回答・不明 | 1 | 0.2% | 0 | 0.0% | 1 | 0.1% | |
| | イ) 学級懇談会 | 1. ほぼ毎回参加する | 148 | 29.6% | 156 | 31.3% | 304 | 30.5% |
| | | 2. ときどき参加する | 197 | 39.4% | 149 | 29.9% | 346 | 34.7% |
| | | 3. あまり参加しない | 104 | 20.8% | 142 | 28.5% | 246 | 24.6% |
| | | 4. まったく参加しない | 50 | 10.0% | 51 | 10.2% | 101 | 10.1% |
| | 無回答・不明 | 1 | 0.2% | 0 | 0.0% | 1 | 0.1% | |
| | ウ) 個人懇談会 | 1. ほぼ毎回参加する | 456 | 91.2% | 448 | 90.0% | 904 | 90.6% |
| | | 2. ときどき参加する | 24 | 4.8% | 28 | 5.6% | 52 | 5.2% |
| | | 3. あまり参加しない | 9 | 1.8% | 10 | 2.0% | 19 | 1.9% |
| | | 4. まったく参加しない | 10 | 2.0% | 12 | 2.4% | 22 | 2.2% |
| | 無回答・不明 | 1 | 0.2% | 0 | 0.0% | 1 | 0.1% | |
| | エ) 家庭教育学級 | 1. ほぼ毎回参加する | 12 | 2.4% | 21 | 4.2% | 33 | 3.3% |
| | | 2. ときどき参加する | 76 | 15.2% | 85 | 17.1% | 161 | 16.1% |
| | | 3. あまり参加しない | 176 | 35.2% | 179 | 35.9% | 355 | 35.6% |
| | | 4. まったく参加しない | 214 | 42.8% | 210 | 42.2% | 424 | 42.5% |
| | 無回答・不明 | 22 | 4.4% | 3 | 0.6% | 25 | 2.5% | |
| | オ) 運動会・学芸会 | 1. ほぼ毎回参加する | 458 | 91.6% | 456 | 91.6% | 914 | 91.6% |
| | | 2. ときどき参加する | 33 | 6.6% | 34 | 6.8% | 67 | 6.7% |
| | | 3. あまり参加しない | 7 | 1.4% | 7 | 1.4% | 14 | 1.4% |
| | | 4. まったく参加しない | 0 | 0.0% | 1 | 0.2% | 1 | 0.1% |
| 無回答・不明 | 2 | 0.4% | 0 | 0.0% | 2 | 0.2% | | |
| Q19. ②参加する(しない)主な理由は何か | ア) 授業参観 | 1. 子どもの学習や生活のようすが知りたいから | 395 | 79.0% | 400 | 80.3% | 795 | 79.7% |
| | | 2. 先生や専門家の考えが知りたいから | 3 | 0.6% | 8 | 1.6% | 11 | 1.1% |
| | | 3. 他の保護者の考えが知りたいから | 1 | 0.2% | 3 | 0.6% | 4 | 0.4% |
| | | 4. 学級やPTAの役員や係になっているから | 1 | 0.2% | 0 | 0.0% | 1 | 0.1% |
| | | 5. 子どもが参加して欲しいと言うから | 34 | 6.8% | 37 | 7.4% | 71 | 7.1% |
| | | 6. あまり意義を感じないから | 1 | 0.2% | 1 | 0.2% | 2 | 0.2% |
| | | 7. 時間が作れない(合わない)から | 33 | 6.6% | 39 | 7.8% | 72 | 7.2% |
| | | 8. 参加したくないから | 1 | 0.2% | 1 | 0.2% | 2 | 0.2% |
| | | 9. 参加するようという働きかけがないから | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% |
| | | 10. 子どもが参加して欲しくないと言うから | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% |
| | 無回答・不明 | 31 | 6.2% | 9 | 1.8% | 40 | 4.0% | |
| | イ) 学級懇談会 | 1. 子どもの学習や生活のようすが知りたいから | 117 | 23.4% | 115 | 23.1% | 232 | 23.2% |
| | | 2. 先生や専門家の考えが知りたいから | 123 | 24.6% | 90 | 18.1% | 213 | 21.3% |
| | | 3. 他の保護者の考えが知りたいから | 70 | 14.0% | 85 | 17.1% | 155 | 15.5% |
| | | 4. 学級やPTAの役員や係になっているから | 4 | 0.8% | 2 | 0.4% | 6 | 0.6% |
| | | 5. 子どもが参加して欲しいと言うから | 0 | 0.0% | 2 | 0.4% | 2 | 0.2% |
| | | 6. あまり意義を感じないから | 30 | 6.0% | 38 | 7.6% | 68 | 6.8% |
| | | 7. 時間が作れない(合わない)から | 111 | 22.2% | 132 | 26.5% | 243 | 24.3% |
| | | 8. 参加したくないから | 17 | 3.4% | 19 | 3.8% | 36 | 3.6% |
| | | 9. 参加するようという働きかけがないから | 2 | 0.4% | 2 | 0.4% | 4 | 0.4% |
| 10. 子どもが参加して欲しくないと言うから | | 0 | 0.0% | 1 | 0.2% | 1 | 0.1% | |
| 無回答・不明 | 26 | 5.2% | 12 | 2.4% | 38 | 3.8% | | |

| | | | | | | | | |
|----------------------------------|---------------------------|------------|-------|-------|-------|-------|-------|------|
| ウ)個人懇談会 | 1. 子どもの学習や生活のようすが知りたいから | 347 | 69.4% | 358 | 71.9% | 705 | 70.6% | |
| | 2. 先生や専門家の考えが知りたいから | 99 | 19.8% | 102 | 20.5% | 201 | 20.1% | |
| | 3. 他の保護者の考えが知りたいから | 0 | 0.0% | 2 | 0.4% | 2 | 0.2% | |
| | 4. 学級やPTAの役員や係になっているから | 1 | 0.2% | 0 | 0.0% | 1 | 0.1% | |
| | 5. 子どもが参加して欲しいと言うから | 1 | 0.2% | 2 | 0.4% | 3 | 0.3% | |
| | 6. あまり意義を感じないから | 1 | 0.2% | 5 | 1.0% | 6 | 0.6% | |
| | 7. 時間が作れない(合わない)から | 18 | 3.6% | 15 | 3.0% | 33 | 3.3% | |
| | 8. 参加したくないから | 2 | 0.4% | 0 | 0.0% | 2 | 0.2% | |
| | 9. 参加するよという働きかけがないから | 0 | 0.0% | 1 | 0.2% | 1 | 0.1% | |
| | 10. 子どもが参加して欲しくないと言うから | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% | |
| 無回答・不明 | 31 | 6.2% | 13 | 2.6% | 44 | 4.4% | | |
| エ)家庭教育学級 | 1. 子どもの学習や生活のようすが知りたいから | 17 | 3.4% | 9 | 1.8% | 26 | 2.6% | |
| | 2. 先生や専門家の考えが知りたいから | 31 | 6.2% | 57 | 11.4% | 88 | 8.8% | |
| | 3. 他の保護者の考えが知りたいから | 9 | 1.8% | 10 | 2.0% | 19 | 1.9% | |
| | 4. 学級やPTAの役員や係になっているから | 20 | 4.0% | 30 | 6.0% | 50 | 5.0% | |
| | 5. 子どもが参加して欲しいと言うから | 0 | 0.0% | 2 | 0.4% | 2 | 0.2% | |
| | 6. あまり意義を感じないから | 76 | 15.2% | 83 | 16.7% | 159 | 15.9% | |
| | 7. 時間が作れない(合わない)から | 247 | 49.4% | 260 | 52.2% | 507 | 50.8% | |
| | 8. 参加したくないから | 44 | 8.8% | 25 | 5.0% | 69 | 6.9% | |
| | 9. 参加するよという働きかけがないから | 14 | 2.8% | 6 | 1.2% | 20 | 2.0% | |
| | 10. 子どもが参加して欲しくないと言うから | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% | |
| 無回答・不明 | 42 | 8.4% | 16 | 3.2% | 58 | 5.8% | | |
| オ)運動会・学芸会 | 1. 子どもの学習や生活のようすが知りたいから | 387 | 77.4% | 417 | 83.7% | 804 | 80.6% | |
| | 2. 先生や専門家の考えが知りたいから | 0 | 0.0% | 1 | 0.2% | 1 | 0.1% | |
| | 3. 他の保護者の考えが知りたいから | 0 | 0.0% | 2 | 0.4% | 2 | 0.2% | |
| | 4. 学級やPTAの役員や係になっているから | 3 | 0.6% | 2 | 0.4% | 5 | 0.5% | |
| | 5. 子どもが参加して欲しいと言うから | 62 | 12.4% | 47 | 9.4% | 109 | 10.9% | |
| | 6. あまり意義を感じないから | 0 | 0.0% | 3 | 0.6% | 3 | 0.3% | |
| | 7. 時間が作れない(合わない)から | 14 | 2.8% | 9 | 1.8% | 23 | 2.3% | |
| | 8. 参加したくないから | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% | |
| | 9. 参加するよという働きかけがないから | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% | |
| | 10. 子どもが参加して欲しくないと言うから | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% | |
| 無回答・不明 | 34 | 6.8% | 17 | 3.4% | 51 | 5.1% | | |
| Q20. 子どもの学級のことをどの程度知っているか | ア)学級の指導目標や指導方針 | 1. よく知っている | 18 | 3.6% | 30 | 6.0% | 48 | 4.8% |
| | 2. だいたい知っている | 278 | 55.6% | 266 | 53.4% | 544 | 54.5% | |
| | 3. あまり知らない | 168 | 33.6% | 167 | 33.5% | 335 | 33.6% | |
| | 4. ほとんど知らない | 35 | 7.0% | 35 | 7.0% | 70 | 7.0% | |
| | 無回答・不明 | 1 | 0.2% | 0 | 0.0% | 1 | 0.1% | |
| | イ)学習内容 | 1. よく知っている | 26 | 5.2% | 19 | 3.8% | 45 | 4.5% |
| | 2. だいたい知っている | 334 | 66.8% | 316 | 63.5% | 650 | 65.1% | |
| | 3. あまり知らない | 125 | 25.0% | 144 | 28.9% | 269 | 27.0% | |
| | 4. ほとんど知らない | 14 | 2.8% | 19 | 3.8% | 33 | 3.3% | |
| | 無回答・不明 | 1 | 0.2% | 0 | 0.0% | 1 | 0.1% | |
| ウ)子どもの授業態度 | 1. よく知っている | 48 | 9.6% | 41 | 8.2% | 89 | 8.9% | |
| 2. だいたい知っている | 351 | 70.2% | 361 | 72.5% | 712 | 71.3% | | |
| 3. あまり知らない | 93 | 18.6% | 86 | 17.3% | 179 | 17.9% | | |
| 4. ほとんど知らない | 7 | 1.4% | 10 | 2.0% | 17 | 1.7% | | |
| 無回答・不明 | 1 | 0.2% | 0 | 0.0% | 1 | 0.1% | | |
| エ)子どもが親しんでいる友達 | 1. よく知っている | 154 | 30.8% | 175 | 35.1% | 329 | 33.0% | |
| 2. だいたい知っている | 306 | 61.2% | 294 | 59.0% | 600 | 60.1% | | |
| 3. あまり知らない | 36 | 7.2% | 27 | 5.4% | 63 | 6.3% | | |
| 4. ほとんど知らない | 3 | 0.6% | 2 | 0.4% | 5 | 0.5% | | |
| 無回答・不明 | 1 | 0.2% | 0 | 0.0% | 1 | 0.1% | | |
| オ)子どもの休みの過ごし方 | 1. よく知っている | 76 | 15.2% | 88 | 17.7% | 164 | 16.4% | |
| 2. だいたい知っている | 288 | 57.6% | 278 | 55.8% | 566 | 56.7% | | |
| 3. あまり知らない | 118 | 23.6% | 112 | 22.5% | 230 | 23.0% | | |
| 4. ほとんど知らない | 17 | 3.4% | 20 | 4.0% | 37 | 3.7% | | |
| 無回答・不明 | 1 | 0.2% | 0 | 0.0% | 1 | 0.1% | | |
| Q21. 子どもは、学校の勉強が理解できているか | 1. よく理解できている | 56 | 11.2% | 97 | 19.5% | 153 | 15.3% | |
| | 2. だいたい理解できている | 355 | 71.0% | 340 | 68.3% | 695 | 69.6% | |
| | 3. あまり理解できていない | 56 | 11.2% | 41 | 8.2% | 97 | 9.7% | |
| | 4. ほとんど理解できていない | 8 | 1.6% | 8 | 1.6% | 16 | 1.6% | |
| | 5. 理解できているのか分からない | 25 | 5.0% | 12 | 2.4% | 37 | 3.7% | |
| Q22. 担任は、子どものことを理解していると思うか | 1. よく理解している | 65 | 13.0% | 72 | 14.5% | 137 | 13.7% | |
| | 2. だいたい理解している | 299 | 59.8% | 310 | 62.2% | 609 | 61.0% | |
| | 3. あまり理解していない | 57 | 11.4% | 47 | 9.4% | 104 | 10.4% | |
| | 4. ほとんど理解していない | 7 | 1.4% | 6 | 1.2% | 13 | 1.3% | |
| | 5. 理解しているのか分からない | 72 | 14.4% | 63 | 12.7% | 135 | 13.5% | |
| Q23. 担任と、子どものことで相談や話し合いをすることがあるか | 1. よくある | 21 | 4.2% | 15 | 3.0% | 36 | 3.6% | |
| | 2. ときどきある | 119 | 23.8% | 142 | 28.5% | 261 | 26.2% | |
| | 3. あまりない | 230 | 46.0% | 221 | 44.4% | 451 | 45.2% | |
| | 4. ほとんどない | 130 | 26.0% | 120 | 24.1% | 250 | 25.1% | |
| Q24. 子どもの家庭学習の内容は何か | 1. 学校の宿題と、その他の勉強をしている | 205 | 41.0% | 262 | 52.6% | 467 | 46.8% | |
| | 2. 学校の宿題だけしている | 292 | 58.4% | 227 | 45.6% | 519 | 52.0% | |
| | 3. 家庭での勉強はしていない | 1 | 0.2% | 8 | 1.6% | 9 | 0.9% | |
| | 4. よく知らない | 1 | 0.2% | 1 | 0.2% | 2 | 0.2% | |
| 無回答・不明 | 1 | 0.2% | 0 | 0.0% | 1 | 0.1% | | |
| Q25. 子どもの家庭学習に、どのように関わっているか | 1. そばについてみている | 60 | 12.0% | 33 | 6.6% | 93 | 9.3% | |
| | 2. 子どもがやった後、できたかどうか確かめている | 229 | 45.8% | 127 | 25.5% | 356 | 35.7% | |
| | 3. やるように声をかけている | 193 | 38.6% | 285 | 57.2% | 478 | 47.9% | |
| | 4. とくに何もしていない | 18 | 3.6% | 52 | 10.4% | 70 | 7.0% | |
| 無回答・不明 | 0 | 0.0% | 1 | 0.2% | 1 | 0.1% | | |

| | | | | | | | | |
|--|------------------------------|---------------------------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| Q26. 習いごと(文化・スポーツ)や学習塾に通っているか | 1. 習いごとにも学習塾にも通っている | 67 | 13.4% | 121 | 24.3% | 188 | 18.8% | |
| | 2. 学習塾に通っている | 19 | 3.8% | 69 | 13.9% | 88 | 8.8% | |
| | 3. 習いごとに通っている | 313 | 62.6% | 229 | 46.0% | 542 | 54.3% | |
| | 4. どちらにも通っていない | 101 | 20.2% | 78 | 15.7% | 179 | 17.9% | |
| | 無回答・不明 | 0 | 0.0% | 1 | 0.2% | 1 | 0.1% | |
| Q27. 次のことを子どもに教えたり身に付けさせたりするのは、家庭、学校のどちらの役割だと思うか | ア) 基本的な生活習慣 | 1. 主に家庭 | 371 | 74.2% | 406 | 81.5% | 777 | 77.9% |
| | | 2. どちらかという和家庭 | 105 | 21.0% | 71 | 14.3% | 176 | 17.6% |
| | | 3. どちらともいえない | 21 | 4.2% | 20 | 4.0% | 41 | 4.1% |
| | | 4. どちらかという和学校 | 2 | 0.4% | 1 | 0.2% | 3 | 0.3% |
| | | 5. 主に学校 | 1 | 0.2% | 0 | 0.0% | 1 | 0.1% |
| | イ) 健康に関する知識や実践力 | 1. 主に家庭 | 149 | 29.8% | 192 | 38.6% | 341 | 34.2% |
| | | 2. どちらかという和家庭 | 166 | 33.2% | 158 | 31.7% | 324 | 32.5% |
| | | 3. どちらともいえない | 142 | 28.4% | 103 | 20.7% | 245 | 24.5% |
| | | 4. どちらかという和学校 | 40 | 8.0% | 36 | 7.2% | 76 | 7.6% |
| | | 5. 主に学校 | 3 | 0.6% | 7 | 1.4% | 10 | 1.0% |
| | ウ) 将来のために必要な学力 | 無回答・不明 | 0 | 0.0% | 2 | 0.4% | 2 | 0.2% |
| | | 1. 主に家庭 | 9 | 1.8% | 6 | 1.2% | 15 | 1.5% |
| | | 2. どちらかという和家庭 | 12 | 2.4% | 18 | 3.6% | 30 | 3.0% |
| | | 3. どちらともいえない | 70 | 14.0% | 79 | 15.9% | 149 | 14.9% |
| | | 4. どちらかという和学校 | 234 | 46.8% | 234 | 47.0% | 468 | 46.9% |
| | エ) 豊かな個性や特技 | 5. 主に学校 | 174 | 34.8% | 161 | 32.3% | 335 | 33.6% |
| | | 無回答・不明 | 1 | 0.2% | 0 | 0.0% | 1 | 0.1% |
| | | 1. 主に家庭 | 42 | 8.4% | 48 | 9.6% | 90 | 9.0% |
| | | 2. どちらかという和家庭 | 98 | 19.6% | 110 | 22.1% | 208 | 20.8% |
| | | 3. どちらともいえない | 268 | 53.6% | 264 | 53.0% | 532 | 53.3% |
| | オ) 社会の決まりを守る | 4. どちらかという和学校 | 77 | 15.4% | 66 | 13.3% | 143 | 14.3% |
| | | 5. 主に学校 | 15 | 3.0% | 9 | 1.8% | 24 | 2.4% |
| | | 無回答・不明 | 0 | 0.0% | 1 | 0.2% | 1 | 0.1% |
| | | 1. 主に家庭 | 92 | 18.4% | 100 | 20.1% | 192 | 19.2% |
| | | 2. どちらかという和家庭 | 120 | 24.0% | 123 | 24.7% | 243 | 24.3% |
| | カ) 人に対する言葉づかいや接し方 | 3. どちらともいえない | 197 | 39.4% | 185 | 37.1% | 382 | 38.3% |
| | | 4. どちらかという和学校 | 69 | 13.8% | 73 | 14.7% | 142 | 14.2% |
| | | 5. 主に学校 | 22 | 4.4% | 17 | 3.4% | 39 | 3.9% |
| | | 1. 主に家庭 | 194 | 38.8% | 206 | 41.4% | 400 | 40.1% |
| | | 2. どちらかという和家庭 | 157 | 31.4% | 166 | 33.3% | 323 | 32.4% |
| | Q28. 学校の教師に求めたいものは何か | 3. どちらともいえない | 129 | 25.8% | 106 | 21.3% | 235 | 23.5% |
| | | 4. どちらかという和学校 | 17 | 3.4% | 17 | 3.4% | 34 | 3.4% |
| | | 5. 主に学校 | 3 | 0.6% | 2 | 0.4% | 5 | 0.5% |
| | | 無回答・不明 | 0 | 0.0% | 1 | 0.2% | 1 | 0.1% |
| | | 1. 子どもの気持ちがわかること | 85 | 17.0% | 94 | 18.9% | 179 | 17.9% |
| | | 2. 子どもの個性を認め、伸ばそうとすること | 216 | 43.2% | 246 | 49.4% | 462 | 46.3% |
| | | 3. 指導の方針や目標をはっきりと持っていること | 15 | 3.0% | 17 | 3.4% | 32 | 3.2% |
| | | 4. 叱るときには叱り、ほめるときにはほめること | 101 | 20.2% | 67 | 13.5% | 168 | 16.8% |
| | Q29. これからの学校教育に望むことは何か | 5. 子どもの学力に合わせて分かりやすく教えること | 81 | 16.2% | 63 | 12.7% | 144 | 14.4% |
| | | 6. 専門的な知識を豊富にもっていること | 2 | 0.4% | 9 | 1.8% | 11 | 1.1% |
| | | 7. 言葉づかいや服装がきちんとしていること | 0 | 0.0% | 2 | 0.4% | 2 | 0.2% |
| | | 1. 教育方針や教育活動内容を詳しく知らせて欲しい | 69 | 13.8% | 104 | 20.9% | 173 | 17.3% |
| | | 2. 子どもの様子(学習成績・生活態度)を詳しく知らせて欲しい | 279 | 55.8% | 218 | 43.8% | 497 | 49.8% |
| | | 3. 保護者が参加できる教育活動を増やして欲しい | 12 | 2.4% | 10 | 2.0% | 22 | 2.2% |
| | | 4. 学校や学級の経営について意見交換する機会を増やして欲しい | 20 | 4.0% | 34 | 6.8% | 54 | 5.4% |
| | 5. 子育てや教育について、相談する機会を増やして欲しい | 44 | 8.8% | 42 | 8.4% | 86 | 8.6% | |
| | 6. 今のままで満足している | 71 | 14.2% | 84 | 16.9% | 155 | 15.5% | |
| | 無回答・不明 | 5 | 1.0% | 6 | 1.2% | 11 | 1.1% | |

【付表2】

家庭教育学級実施状況一覧(平成13年度, 2001, 4~2002, 3)

| 実施時期及び時間帯 | | | | | 学習 テーマ | 主な内容の種類 | 学習方法(重複あり) | 講師・助言者 | 参加者数 | | | | | | | | | | |
|-----------|-----|-----|-----|-----|-----------|---------|------------|--------|-----------|---------|--------|-------------|--------|------------|------|-------|-------|---------|-----|
| 月 | 日 | 曜 | 時間帯 | 男性 | | | | | 女性 | 合計 | | | | | | | | | |
| 4 | 0 | 上旬 | 213 | 月 | 57 | 午前 | 337 | 家庭教育 | コミュニケーション | 25 | 講演 | 421 | 自校・教職員 | 125 | 3466 | 18784 | 22250 | | |
| 5 | 9 | 中旬 | 233 | 火 | 104 | 午後 | 118 | 134 | コミュニケーション | 25 | 講演 | 421 | 自校・保護者 | 47 | | | | | |
| 6 | 106 | 下旬 | 166 | 水 | 98 | 夜間 | 107 | | 134 | こころ、内面 | 37 | 講義 | 87 | 他校・教職員 | | | | 32 | |
| 7 | 65 | 不明 | 4 | 木 | 85 | 不明 | 54 | | 134 | 生活習慣・食 | 11 | 視聴・鑑賞 | 48 | 市教委 | | | | 83 | |
| 8 | 2 | | | 金 | 96 | | | | 134 | 学習・読書 | 13 | 実技・ワークショップ | 233 | 施設役員・職員 | | | | 74 | |
| 9 | 39 | | | 土 | 141 | | | | 134 | 遊び | 3 | 見学・フィールドワーク | 26 | 警察・消防・防災セ | | | | 28 | |
| 10 | 58 | | | 日 | 31 | | | | 134 | 健康・成長 | 7 | 質疑応答・意見交流 | 208 | 大学(専門学校)職員 | | | | 46 | |
| 11 | 78 | | | 不明 | 4 | | | | 180 | その他・総合 | 38 | | | 団体役員・企業職員 | | | | 45 | |
| 12 | 73 | | | | | | | | | 180 | 同和 | 13 | | | | | | 医療関係者 | 27 |
| 1 | 41 | | | | | | | | | 180 | 外教 | 7 | | | | | | 文化人・技術者 | 105 |
| 2 | 110 | | | | | | | | | 180 | 男女 | 9 | | | | | | その他 | 4 |
| 3 | 35 | | | | | | | | | 180 | 障害 | 56 | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | 180 | 介護老人福祉 | 6 | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | 180 | 児童・子育て | 57 | | | | | | | |
| | | | | | | | | | その他・総合 | 32 | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | 37 | 学校教育 | 学習要領・内容 | 19 | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | 37 | 学校給食 | 14 | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | 37 | 性教育・養護 | 2 | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | 37 | その他 | 2 | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | 文化・教養 | 国際理解 | 11 | | | | | | | |
| | | | | | | | | 265 | 265 | 自然・環境 | 25 | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | 265 | 歴史・伝統 | 28 | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | 265 | 地域産業 | 2 | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | 265 | 救命・防犯 | 28 | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | 265 | コンピュータ | 47 | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | 265 | 音楽 | 14 | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | 265 | クラフト・芸術 | 55 | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | 265 | スポーツ・健康 | 27 | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | 265 | 栄養・調理 | 19 | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | 265 | その他 | 9 | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | その他 | 9 | | | | | | | | |
| 616 | 616 | 616 | 616 | 616 | 616 | 616 | 1023 | 616 | 15.6% | 84.4% | 36.1人 | | | | | | | | |

調査校 173校 (167+6) 実施のべ回数616回(1校平均3.56回実施)

| 学習 テーマ | 内容の種類 (実施回数) | 参加状況 | | |
|-------------|--------------|---------|---------|------|
| | | 参加総数(人) | 1回平均(人) | |
| 家庭教育 134 | コミュニケーション | 25 | 1116 | 44.6 |
| | こころ、内面 | 37 | 1598 | 43.2 |
| | 生活習慣・食 | 11 | 336 | 30.5 |
| | 学習・読書 | 13 | 490 | 37.7 |
| | 遊び | 3 | 113 | 37.7 |
| | 健康・成長 | 7 | 248 | 35.4 |
| | その他・総合 | 38 | 1579 | 41.5 |
| 人権 180 | 同和 | 13 | 360 | 27.7 |
| | 外教 | 7 | 248 | 35.4 |
| | 男女 | 9 | 304 | 33.8 |
| | 障害 | 56 | 1916 | 34.2 |
| | 老人福祉・介護 | 6 | 212 | 35.3 |
| | 児童・子育て | 57 | 2279 | 40.0 |
| | その他・総合 | 32 | 1029 | 32.2 |
| 学校教育 37 | 学習要領・内容 | 19 | 993 | 52.3 |
| | 学校給食 | 14 | 449 | 32.1 |
| | 性教育・養護 | 2 | 83 | 41.5 |
| | その他 | 2 | 58 | 29.0 |
| | 文化・教養 265 | 国際理解 | 11 | 296 |
| 自然・環境 | | 25 | 790 | 31.6 |
| 歴史・伝統 | | 28 | 1007 | 36.0 |
| 地域産業 | | 2 | 53 | 26.5 |
| 救命・防犯 | | 28 | 1044 | 37.3 |
| コンピュータ | | 47 | 1025 | 21.8 |
| 音楽 | | 14 | 1297 | 92.6 |
| クラフト・芸術 | | 55 | 1522 | 27.7 |
| スポーツ・健康 | | 27 | 911 | 33.7 |
| 栄養・調理 | | 19 | 566 | 29.8 |
| その他 | | 9 | 328 | 36.4 |
| 616 | 616 | 22,250 | 36.1 | |